

明治四十二年三月二十七日發行

(非賣品)

# 北辰會雜誌

第五拾四號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第五拾四號目次

本欄

- 小倉百人一首を論ず……………青 花
- 荒野(ツルゲネフ)上……………渡邊 庸三
- 武人の文事……………其 月 生
- 爾に反れ……………た か き
- 自信の價值……………高宮 儀助
- 犬……………田 中 無 限
- 月……………伊 多 嘉 儀
- 蛙の述懐……………の も と
- 所謂「生存競争と人道」……………鈿 生
- 文學者……………み つ を
- おもしろ草……………た け を

○枯れ蘆……………四高和歌會

○四高俳句會選句……………

○冬春雜吟……………

時評

○北辰會誌第五十三號を讀みて……………み つ を

○これを見よ……………み つ を

○冷語録……………さ ま 生

○所謂運動會全廢説……………

部 報

○野球部報……………

○五箇の莊を訪ふ……………

雜 報

○叙任○校長訓辭○寒稽古終矣○時習察大茶話會○寄贈雜誌

北辰會雜誌第五十四號

本欄

小倉百人一首を論ず

青 花

序、——上世より鎌倉時代に至る和歌の概観、——小倉山莊の色紙、——百人一首は果して定家の選なりや、——その肯定説と否定説——百首選擇の杜撰、——定家の和歌觀と百首との關係、——後鳥羽、順徳兩院と定家、——百首の詩的價值、——百人一首に現はれたる、主觀詩と客觀詩、——詩歌の兩面、形式と内容、——結論

百人一首の世に喧傳せらるゝや久しい哉。小倉山莊の色紙、一度詩人定家の墨痕を留めてより、茲に六百有餘年、詩界の蒼波は潑勃たる氣運に伴ひて幾度か蕩搖したれども、年々歳々の初め、芝居の評判記に賣りこみし八文字屋も、繪草紙に花をやりし鱗形屋も、塵頭、飲ぐべからざりしは、此百首がるたなりさ。今や玷壇の傾向著しく變化し、泰西の幽香、又我想象界に移植せられ、朝にはモーパッサンを送りて夕にはツルゲネフを迎へ、バネロン、ジェリーの聲、夢の如く消えて、マラルメ、ゾルレエヌの讚美せらるゝの時、垂髫の兒女猶「天智天皇」を口吟するを思はゞ。百首

傳誦の力、蓋し偉大なりと謂ふべし。然らば何が故に百人一首は、しかく勢力を得るに至りしや。乞ふ吾人をして暫く、これに先つて、日本詩歌史の一端を窺はしめよ。

二、

思ひも遙けき古雲州の地、八雲たつの一韻に國風の萌芽を促してより世は紀記の時代を過ぎ、青丹よし奈良の都は咲く花と匂ひて七代七十餘年を経たり、燦爛たる當代の文華を具体的に表示せるものを實に萬葉集二十卷となす。藤原宮の人麿、天平の赤人、皆一時の選なり、或は石見の邊陲に哀絶の調を歌ひ、或は田子の浦曲に靈山の美を讚す、加ふるに憶良、旅人等相次いで出で萬葉の價値、ために九呂よりも重し。其調や豪宕雄渾、その語や簡勁素朴、胸臆を披瀝して更に矯飾を加へず所謂蛟龍の雲霄に翔り壯夫の勁弓を鳴らすが如し。然りと雖も隆あれば替あり、物極まれば必ず轉ず、漢詩漢文の勃興はやがて和歌の衰頹を來たし、此風潮、平安朝初期に入つては更に甚だしく、支那文物の輸入日に月に急なり、而して皇室の獎勵は幾多の詞人文客を輩出せしめ遂に凌雲、文華秀麗の二集をさへ見るに至りぬ。

然れども漢詩漢文は畢竟他國の語のみ、異邦の調のみ、自己の感情を歌ひ自己の思想を陳べんと欲せば必ず自國の聲調と言語とに頼らざるべからず、こゝに於てか假名文は發芽し、和歌は復活の氣運に向ひ、流麗の調を以て優雅の想をやり、道は崎嶇たる山峽を出で、紅紫燎亂の花野に入る、これ貞觀より寛平に至る詩壇の風潮にして業平小町等所謂六歌仙、この間に覇を稱ふ。次で延喜年間に至り、貫之、躬恒の徒、醍醐帝の勅を奉じて古今和歌集二十卷を選す、清新なる趣向

と巧妙なる修辭とを用ひてよく當時の優美華麗の風を發揮せり、これをとつてかの萬葉に對せんか、吾人はこの間に幾多の徑庭あるを感せずんばならず、風調は勁拔より婉柔に變じ、思想は敘述的より思惟的となり、句法は五七より七五に移り、而してこれの長は短歌にありて彼れの長は長歌にあり、彼れは客觀的傾向を帯ひこれは主觀的抒情に偏せり。萬葉の直情は古今に於て見るべからず、單一は複雑となり、情を景に寄せ、考案思索、時に理致に陥りて詩味索然たるもの少なからず。試に古今の

業平

忠岑

讀人しらす

をとつて萬葉の

去年見てし秋の月夜は照らせれど、あひ見し妹はいや年さがる、

人麿

久方の天路は遠しなほ、家に歸りて業をしまさに

憶良

春日なる三笠の山にゐる雲を出て見る毎に君をしぞ思ふ

十 二、

に比較せよ、兩歌集の特徴何ぞ瞭々たるや。

古今出て、より年を閱する事四十七星霜、天曆五年十月後選集成るされど近世の中山美石が

正しく選びあへられざりしものと見えて、四季、戀、雜などわけられたる様は古今集と等しけれど戀雜などの歌と見ゆるが四季の中に入りたるなども折々ありて、歌の次序もいと亂りがは

しく、よみ人の名の、しるし様も如何にぞやと見ゆる所々もあり、或は讀人の名を誤りたる處もあり、それに合せて詞書にもいと亂りがはしく、或はいたく言足らで詞書を以て歌の意を求めんとするに、その心得がたく、または深き故よしありてよみ出でつらんと見ゆるが題しらすなごありて更にわきまふべき由なきもあり、おふけなき、いひ言ながら歌の意もむげに幼なげに拙なき様なるなほもまれ／＼に交れり、されど後世に寫し誤りたる事などもあるべけれど、ごにもかくにも他の選集とくらべていと／＼亂りかはしき事、多かる集になんありける

と云へるが如く、後選は畢竟古今の糟粕に過ぎず、當時の歌人は前代を渴仰するの極、自己を没却して、舊習を墨守し、新説の意氣動く事なく、しかもその作歌漸く玩弄物視せられて男女贈答の器となりぬ、かくの如くにして猶、詩品の高逸至醇を求む、また難からずや。

時は流れて長徳に入り、拾遺集即現はる。拾遺に集、抄の二種ありて、古來幾多の説あれども吾人は唯、共に幽玄深邃の趣を缺き意義明白にして餘韻なく、ひたすら風姿の直からむ事を希ひしものと記せば足る。かの古今に於ける

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるい

躬 恒

櫻色に衣は深く染めて着ん、花のちりなむ後のかたみに

在 友

の、拾遺にては

香をどめて誰折らざらむ梅の花、あやなし霞たちなかくしそ

躬 恒

櫻色にわが身は深くなりぬらむ、心にしみて花をおしめば

讀人しらす

と改刪せられたるを見れば思半ばに過ぎむ

而して時勢の推移と共に漸次古調に遠かり「咲けばちり、さかねば戀し」の如き對句、「どふ人もあらしの山」人に心をつくばねの」などの懸詞ますます多く、新奇に趨りて卑俗に流れ巧緻を求めて織細に陥り、曾丹が和歌革新の絶叫未だ一世を覺醒するに足らず、かくの如くにして拾遺を去る九十餘年白河の御代、わが文學史は更に後拾遺集を加へたり。

これよりさき、識見時流を抜き、歌論の急先鋒となりしものを拾遺抄の選者、藤原公任となす、彼れや先人の詠を胸に蓄へ博引旁證、世人をしてその學識に驚歎せしめしとは云へ、古今の櫻らる木下陰は寒むからで空にしられぬ雪ぞふりける

青柳の片系によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠

を、とつて

紅葉は雨とふれども空はれて袖より外は濡れずぞありける

青柳の片系により出でけれど、さしてぞ着つる梅の花笠

と翻したるは、會々以て彼れの才藻の寧ろ憐むべきを證するに似たり。

當時因襲風をなし舉世滔々として氣力なく模倣剽竊の魔風、歌壇に吹き荒ぶの時、獨り炎々たる情火を胸に抱いで、直情人の肺腑を衝きしものを和泉式部の咏となす

黒髪の亂れも知らず打伏せば先づ搔きやりし人をしぞ思ふ  
うき事も、戀ひし事も秋の夜には見ゆる心地こそすれ

露を見て草葉の上と思ひしは、時待つ程の命なりけり

翻て後拾遺を見んか、もごより時世の轉移は否むべからず、趣味漸く動きて清新の意は變調を齎らし、古今を遠かる事、拾遺より更に一步を進む、されどこの間猶古格に背かざらむとする時代の風尙歴然たり、

心あらむ人に見せばや津の國の難波あたりの春のけしきを

能因

すむ人もなき山里の秋の夜は月の光も淋しかりけり

範永

世の中を思ひ亂れてつくつく眺むる宿に秋風ぞふく

道濟

しかも餘弊は纖細となりぬ、「後拾遺姿」の名また宜なる哉、

さゝがにの巢かく淺茅の末毎に亂れてぬける白露の玉

長能

當代第一流の歌人を擧ぐれば先づ指を源經信に屈せざるべからず。八雲御抄に「經信卿ばかりこそ楚國に屈原がありけむように、獨り古體を存して並びなかりしかど、天下これをよしと定むる人もなし」と。然りと雖も彼れの特色は尙古の点にわらずして、自然の景を叙し、新體の調を奏でしにあり

風牙えて浮寝の床や氷るらむ、あぢむら騒く滋賀の唐崎

旅寝して曉がたの鹿の音に稻葉おしなみ秋風ぞふく

後拾遺に於て漸く發達せし新體は金葉詞花二集に至つて極点に達せり。曾根好忠一度改革の旗を翻へしてより五十餘年、天下靡然としてその風に移る、經信の子俊頼は實に急激なる新派の驍將

なりき

金葉集は後拾遺を去る四十二年、崇徳の天治元年、俊頼これを編み、詞花集は近衛の朝、天養元年、藤原顯輔これを奉る、共に十卷也、阿佛尼口傳に曰く、「金葉詞花などは歌の姿かはりて、一節おかしき處ある歌多く侍る、今めきたるものがちにや候ふらむ」と、今兩集の作をわけん乎。金葉には、

鶉なく眞野の入江の濱風に尾花波よる秋の夕暮

俊頼

宇治川の河瀬も見えぬ夕霧に槇の島人舟呼ばふなり

基光

待ちし夜の更けしを何に歎きけむ思ひたえても過ごしける身を

越中

詞花には

灘波江の蘆間に宿る月見ればわが身一つも沈まざりけり

顯輔

夕霧に佐野の舟橋音すなり、たなれの駒の歸りくるかも

左大臣俊雅母

思ひかね別れし野邊に來て見れば淺茅が原に秋風ぞふく

道濟

眞都以來四百歳、世は變じ人は移りぬ。藤氏の榮華既に破れて、西八條こそ永しへの春と思ひしに一朝吹き寄せし木曾の嵐に脆くも散りぬ、やがて、粟津が原に秋風たてば、壇の浦曲に千鳥の聲悲しげなり、無常迅速、會者定離、慘憺たる年は暮れに暮れて、詞花成りてより三十八年、文治四年、藤原俊成勅を奉じて千載集を選す。花紅葉の色のみは昔に變らずや、月卿雲客のさても悠々たる哉。

新派の勢力は依然として盛なり、叙景には

櫻花、比良の山風ふくまゝに花になりゆく志賀の浦浪  
小夜千鳥、ふけひの浦に音づれて繪島が磯に月傾きぬ

良經 家基

されど、これその一面のみ、穩雅なる抒情の咏もまた乏しからず  
うき事のまどろむ程は忘れて、覺むれば夢の心地こそすれ

崇徳院

景情融合せるものには

何となくものぞ悲しき菅原や伏見の里の秋の夕暮  
過ぎぬるか夜半の寢覺の時鳥、聲は枕にある心地して

俊頼 俊成

又宗教思想の反照とも見るべきは

物思へど、かゝらぬ人もあるものを哀れなりける身の契かな

西行

思ふに、俊成は天馬空を行くの奇才に非ず、諸家を咀嚼し、諸風を折衷し、かくして「松風烈し  
き夕暮に、仄かに琴の音を聞けるが如き桐火桶の體」をなせるものなり、されば天下の詩權一た  
び、俊成の手に落ちてより、弊は流れて新古今に入り纖巧浮薄の痕、蔽ふべからず、早くも達摩  
宗の譏りありき。然りと雖も、その長や艶麗にして幽婉、加ふるに高雅の韻を以てす

浦つたふ磯の苦屋の梶枕聞きも習はぬ浪の音かな  
すみわびて身をかくすべき山里に、あまり隈なき夜半の月かな

千載集と相距つ事二十年歌界の木鐸新古今集は遂に成れり、時に建久三年四月也、藤原定家等、

後鳥羽上皇の院宣を奉して選定せるものにして、勅選集中嶄然として傑出す、調や流麗にして雅  
致に富み、語や巧緻を極めて餘韻を宿し、錦繡織り亂して才華煥發、擲たば金石の響すべし、さ  
れど俊成これが桶をなして、その弊も亦少なからず、かの

折らば落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなんとする玉笹の霰など申すべきを、餘りに、たはれす  
ぐして歌のあしざまに成りぬべしとて新勅選は思ふ所ありて、まことある歌を擇ばれけるなど  
ぞ、うけたまはりし(阿佛尼「夜の鶴」)。

と云へるは斯般の消息を傳へたるものと謂ふべし

越へて二十六歳、後堀河の貞永元年、定家復新勅選集を編む、これ新古今の花に過ぎたるを矯め  
んとて成りしものなり。新古今の

志賀の浦の遠ざかりゆく浪間より氷りて出づる有明の月  
霜迷ふ空にしほれし雁の歸る翼に春雨を降る  
津の國のなにはの春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり

定家隆 西行

を吟じて更に新勅選を見よ

けふ見れば雲も櫻も埋もれてかすみかたなるみ芳野の山  
天の原思へばかはる色もなし、秋こそ月の光なりけれ  
風ふけば花の白波岩こえてわたりわづらふ山河の水

定家隆 西行

兩者の用意略々推して知るべきのみ、

吾人は煩を嫌はずして、上萬葉より、下鎌倉時代に至る詩歌の變遷を畧述したり、これ當に小倉百人一首が此期に於ける選集なるが爲のみに非ず、詩歌評論の事たる、作家と時代との關係、又忽せにすべからざるものあつて存すればなり。言をなすものあり曰く、詩歌の事、學に非ず才に非ず、唯一の趣味にあり、その妙諦に至つては神解すべくして、言傳ふべからず、所謂默契なるものは文學の機微を解する第一義也と、さらば吾人の百人一首を是非して如是觀をなさんとする、亦可ならずや。

## 三、

鎌倉の世、花柑子匂ふ嵯峨の奥、小倉の庵に獨居して、心を松風に澄し、情を蘿月に遣り悠々閑寂を樂しむものあり、蓮生入道宇都宮賴綱と云、時の歌人爲家(定家の子)これと交り遂にその女婿となる、一日賴綱、定家を訪ひて古今の短歌一人一首都て百首を山莊の障子に書せしむ、これを百人一首の來歴とす。抑も百人一首の名義たるや、一人一首合して百首となすにあり、百人の短歌を一集となすは端を茲に開けるに非ず、既に冷泉帝猶東宮にあるの日、源重之、自作百首を選してこれを奉りたるに扨る。後鳥羽順徳の世に及びて此風特に盛なりき、而も小倉百首世に出づるや後世これに倣ふもの多く、源氏百人一首、後選百人一首、女百人一首等あげて數ふべからざるに至る。

小倉百人一首は文曆二年五月かくして成れり、然れども、こゝに一個の疑雲あり、定家の私記明月記に曰く

廿七日己未、予本不知書文字、嵯峨中院障子色紙形、故予可書由、彼入道懇切、雖極見苦事、  
熬染筆送之、古來歌人各一首、自天智天皇以來及家隆雅經卿云々

と、入道は即賴綱也、これに依れば百首の筆者の定家なるは疑ふべからざるも、選、筆共に彼れなりとは俄に斷すべからざるもの、如し。室町時代の歌人は定家崇拜の極、これを神視して阿諛至らざるなく、説をなして曰く百人一首の選は定家也、新古今なるや、彼れは俊成の喪に會して、選に預らず、即これを慨し百人一首を選して新古今の華麗を去り、摯實を索め以て小倉山莊の色紙に題すと、飛鳥井抄、頼阿の家説皆然らざるなし。されどこの論たるや古人の道破せるが如く謬見とするに足らず、新古今の成れるは建久三年にて俊成の死は翌年即元久元年十一月也、然らば定家の服喪説は獨斷の甚しきもの、しかも定家もし、新古今の浮華を厭はん乎、彼れは直ちにこれを新勅選に於てなすべし、焉ぞ後の百人一首を俟つの愚をなさん耶。

而して、徳川期に入りては、選者を定家となすの否定説、先づ契沖の改觀抄に現はれ、次で安藤年山はその著年山紀聞に於て蓮生選、定家書と斷定し、香川景樹は百首異見に於て更にこれを祖述しく曰く年山の説は尤も確實なり入道もし、定家に托するに選を以てせば、明見記の文必ず之を記さん、而も此事なきは定家の撰にあらざるの證なり且、蓮生は和歌に精しく、萬葉に通せり何ぞ他によつて選を企てんやと。ひそかに思ふ、景樹がこれに因つて定家選を否定するは即ち可なり、されど、それがために直ちに蓮生の撰となすは穩健なる議論と云ふべからざるに似たり。吾人は是に於て、條項の下に選者を定家となすの可否に就て聊か論ずる處なかるべからず

先づ百人一首の選次に見よ。萬葉より鎌倉に至る、詩聖歌匠二百人、紅花紫蘭、目も彩に居並らびたれど吾人はこの人選に就て慊焉たることなくんばならず、梨壺の五人の隨一たりし源順、六條派の祖、藤原顯季、共に令名噴々たりしに拘らず一首をだに載せられず頼政、清輔、長能等亦一代の巨匠を以てして尙百首中に求むるを得ず、夫の高遠は如何、元方は如何、範永は如何、頼基は如何、之れを女流に見るも、中務、丹後、檜垣の媼、肥後、馬内侍の輩等しく選者の棄てて顧みざる所、而して萬葉時代の旅人、憶良を省き額田女王、石川郎女等を挙げざりしは吾人の特に首肯し能はざるものなり。加ふるに和歌の選は更に孟浪なり、杜撰なり、開卷第一の天智の歌を見よ

秋の田の借廬の庵の苦をあらみわが衣手は露にぬれつゝ、

荷田在滿の國歌八論に曰く、この詠天智の作として收むると雖も、近江朝時代の風格に非ずと、大菅公圭これを駁して曰く國歌その体多し、一人の作必ずしも一体ならむやと、更に本居宣長はこれを評して曰く此詠の天智時代の體を失する甚しきは日本紀、萬葉の格調を知れる者の復疑はざる處也、一人の作、もとより一体にあらず時によつて萬化すと雖も時代の風調は嚴として争ひ難きものあるを如何せんと、思ふに、此詠や萬葉十の

秋田菊る借廬を作りわれ居れば衣手さむく霜をきにける

の改作たるや必せり、天智の什となすは謂れなきに非ずや

柿本人麿は千古の詩聖也、而して百首收むる處は

さゝなみや、志賀の唐崎さきくあれど大宮人は舟まぢかねつ  
石見のや、高角山の木の間よりわがふる袖を妹みつらんか

に非ずして、何等の感興なき

足曳の山鳥の尾のしたり尾のながし夜をひとりかも寝む

の吟なり、此歌は萬葉に寄物陳思、

念へども念ひもかねつ足びきの山鳥の尾のながき此夜を

と共に併舉して作者不詳とせるもの、拾遺集初めて題不知、人麿として收めたり、百首の選者の拾遺によりしや明かなれど何ぞ流に遡りて、その源を極めざりしや、かの人麿集中此作を容れたれど後人の僞作決して信すべからず。

中納言兼輔の詠

みかの原わきて流るゝいづみ川いつみきとてか戀しかるらむ

は新古今に出でたるもの家集これを載せず、思ふに六帖に「音にのみ聞かましものを音羽川」の詠ありて兼輔の名を署し、これより以下八首、讀人不知とありて「みかの原」の歌はその第八位に位せり、新古今誤りて轉載し、更に百首の選者はその儘にこれを探りしものゝ如し、而して猿丸大夫の「奥山に」家持の「鶉のわたせる橋」の如きも亦頗る疑悞の念に堪へざるもの也、

筆を進めて字句の異同を訂さんか、百首の、  
春すぎて夏きにけらし白妙の衣はすてふ天の香久山

持統天皇



田子浦に打ち出て、見れば白妙のふじの高根に雪はふりつゝ、  
天の原ふけさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

赤 人  
仲 鷹

これやこのゆくも歸るも別れては知るもしらぬも逢坂の關  
小倉山峯のもみちば心あらば今一度の行幸またなむ

蟬 丸  
貞 信 公

瀧の音は絶えて久しくなりぬれを名こそ流れてなほ聞えけれ  
陸奥のしのおもし摺たれ故にみだれそめにしわれならなくに

公 任  
河原左大臣

秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出る月の影のさやけさ  
を各その源に歸つて對比すれば

顯 輔  
万 葉 一、

春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香久山  
田子の浦ゆ打出て、見れば眞白にぞふじの高嶺に雪はふりける

萬 葉 三、  
古 今 羈 旅

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも  
これやこのゆくも歸るも別れつゝ知るも知らぬも逢坂のせき

素 性 集  
大 鏡

小倉山峯の紅葉の色もあらば今一たびの行幸またなむ  
瀧の糸はたえて久しくなりぬるを名こそ流れてなほ聞えけれ

拾 遺、  
古 今

陸奥の忍ぶもしずり誰れ故にみだれんと思ふわれならなくに  
秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出る月の影のさやけさ

久 安 百 首

とせざるべからず、事や些細に屬すれども、持統天皇、赤人の詠の如く、全然原作の意義を滅却

して徒らに改削したるが如きは斷じて免すべきに非ず以て百首の杜撰なる一證となすを得む  
之れに加ふるに和歌の選、孟浪にして必ずしも作家の秀逸、詩人の特色を發揮せるものを選ばず。  
人鷹赤人は暫く措くも業平の

千早振神代も聞かず立田川、からくれなるに水くゝるとは  
は果して彼れが多恨多情の面白を吐露せるものなりや、百首の選者は何が故に

月やあらぬ春や昔しの春ならぬわが身一つはもとの身にして  
ねぬる夜の夢をはかなみ、まごろめばいや果敢なくもなりまさる哉

の詠を擧げざりしか、又躬恒の什

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

の如き意匠陳套、且自然に遠かる甚しきものを採つて、當時彼が獨壇とも云ふべき客觀詩  
住の江の岸を松風ふくからに聲うちそふる沖つ白波

を收めず、和泉の

あらざらむ此世の外、思出に今一度の逢ふ事もがな

は凄婉、戀には脆き婦人の病床反側の情、見るが如きも、猶  
いかにせむ、いかにかすべき世の中は、そむけば悲し住めばすみ憂し

の激越の調あるにしかず。はた某俊の  
契り置さしませもが露を命にてあはれ今年の秋も去ぬめり

は徒に字句の末に走つて、その間何等、情緒の迷出を見ず、何ぞ  
夏○の○夜○の○月○待○つ○程○の○手○す○さ○び○に○岩○も○る○清○水○幾○む○す○び○し○つ○  
の傑作をすて、願みざりしや、若し夫れ西行の

嘆けとて月やはものを思はする歎ちがほなる我涙かな

を収むるに至つては吾人は寧ろ百首選者の詩眼を疑はざるを得ず。山家集一卷、琅玕の響あるもの  
の儂指にたへざるに何の所據あつてか、かゝる凡作をとつてわが絶代の大詩人を代表せしめしや。  
あゝ誤用せる勅選によつてその源をすて、各時代の代表作家の什を擇ぶ事、しかく、當を得ざる、  
吾人はこゝに至つてますます百首選者の定家にあらざるを信せずんばあらず。

思ふ、定家は俊成の子なり、俊成嘗て俊慧法師が貴詠中普く世には「おもかけに花の姿をささだ  
て、幾重こえきぬ峯の白雲」と云ふを稱揚するは如何と云ふに答へて、わがおもて歌とするは  
夕されは野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里

なりと云へりき、子なる定家にして此一佳語を知らざる理あらんや、しかも、百首載する處は  
世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿をなくなり

の如き理屈せめの歌にしてもより俊成が得意の作ならざるや必せり。更に思ふ、實朝は定家の  
弟子なり、定家常に彼を評して剛健よく萬葉の壘を摩すと稱す、而して

世の中は常にも、かまな落こぐ蟹の小舟の綱手かなしも、  
を収む、この詠や徒に古語を使用せるのみにて、蒼古の趣に乏しく、かの

○○○○ふが矢並つくろふ小手の上に霞たばしる奈須の篠原  
と到底日を同うして語るべきの作にあらず

百人一首果して定家の選とせん乎、定家豈によくこの愚をなさんや。往々説をなすものあり、百  
人一首の一日に成れるは明月記の言へるところ、其選の杜撰なる亦已むを得ざるのみと、あゝこ  
れ何の言ぞや、定家は鎌倉歌人の巨擘なり、且や古歌に精通する彼の右に出づるものなしと稱せ  
らる、たとへ彼れ、一日を以て百首を選ぶと雖も孟浪かくの如き歌集を編む、理に於て然るべか  
らざる也。

四

試に一卉の百合花に見よ。四曼不離の行業に一切衆縁と絶ちて行ひすま世捨人は、こゝに盛者  
必衰の面影を觀すべく、まゝならぬ思ひに結ばれて、春の恨を解くよしもなき少女は、ふるれば  
落ちなん白露を情の玉と眺むべく。はた吾人は以てソロモンの榮華に比べ、理學者は以て造化の  
巧妙を認むべし。人各々見る處あり、廬山の向背、或は巒となり或は峰となる、一にその立脚地  
の如何にあるのみ。吾人の百人一首に於ける亦此感なくんばあらず、然らば定家の和歌觀と百首  
との關係は如何。

彼れは其和歌庭訓に於て曰く「想を主とすべしと言はん乎、則ち外形を無視するに似たり、詞を  
主とすべしと説かん乎、則、内容を度外するに似たり、所詮和歌の極致は花實の兼備にあり」と、こ  
れ和歌の内容外形は同價の下にありて何等の軒輊なしとの意に外ならず、而して彼は語古意新の

主義を標榜し、清新の想を包むに古語を以てせん事を唱導したり、これに依つてこれを見れば、彼れは外形に偏せず、内容に傾かず想華の融合即詩歌の理想也模型也、本領也と思惟せるもの、如く、言や太だ佳し。されど理想と現實とは恒に相反乖するを如何にせむ。彼れは庭訓中、有心躰を鼓吹して内容美を奨勵し乍ら、尙外形を過重して和歌の大事、言語の用捨にありと云へる、を見ては吾人は彼れの真意の那邊に存するかを捕捉するに苦まらずんはあらざる也。果然彼れの選にかゝる新古今は、豊麗なる叙景詩と共に粉黛の氣充滿せる戀愛詩とを以て充たされたり、新勅選亦僅かに艶芳の域を脱すると雖も終に嬌態を排するを得ず、洵に彼れが幽玄体の標置は管に二條家繼承者として、の理想に過ぎずして、その嗜好は彼れを驅つて詞華の末に趨らしめたりき、此傾向は彼が歌合せの判に於て特に明かなるを覺ゆ、乃ち

## 仙洞歌合、三十三番、題山嵐

秋はまた花に紅葉を染めかへて嵐にこゆる志賀の山越

建保六年八月十五日、歌合、十一番、秋月

秋はまた憂きに袂を包みけり晴れぬる月の露のかごと

光明峰寺攝政家歌合、二十二番

かゝりける秋の今宵の月よりや浦を明石となに定めけむ

に於て彼は、「花に紅葉を染めかへて」に巧みありと云ひ、「憂きを袂に」の一句に讚辭を捧げ、「浦を明石」とせるを妙思なりとせしが如き彼れが形式を重んせし跡、歴然として見るべきにあらずや、

且また、彼の作品に就て見るも此好尚は容易に指摘するを得べし

梅の花匂ひをうつす袖の上に、のきばの月の影ぞあらしふ

いづくにか、今宵は宿をかり衣、ひも夕暮の峯のあらしよ

の如き、或は百首に收むる

來ぬ人をまつほの浦の夕風にやくや藻しほの身も焦れつゝ

の什、一として形式美の發現に外ならざるなく、着想の妙は即ち索然として空し。されど技巧の極、人をして恍惚たらしむる詠も亦少なからず

駒どめて袖うち拂ふ陰もなし佐野の渡りの雪の夕暮

は即是れなり。畢竟綺詞を弄して天真流露の趣なきは彼れが和歌の缺陷ならむのみ、

翻て百人一首を見るに過半はこれ細膩濃艶の詩、風格頗る定家の好尚と符を合するもの、如し、然りと雖も形式美を過重せしは鎌倉歌壇の通弊にして、獨り定家に限れるに非ず、今假りに當代の歌人をして選ばしむるも西行を除くの外、誰かまた小倉百首の胡盧を描かざるものぞ、此一事以て百首の選、定家となすに足らざるの證となすべき乎。

更に説をなすものあり曰く順徳、後鳥羽二院の作、百首中に收められしは以て定家の選にあらざるの證左也と、姑く其意を祖述して勅宰の論をやらんか。その意蓋し百首の選、主として代々の勅選に依れるは千古の確論也、而して兩院の詠は共に續後選集に出づ、續後選たる定家没後十年にして初めて成りしもの年代の矛盾以て百首の定家の選ならざるを語るもの、如し、

思ふに、二院世にあるや、定家その眷遇を蒙る事頗る篤く、仙洞雲深き處共に落花を詠じ、水無瀬宮裏、漣漪清き邊、共に秋月に嘯く。さればたとへ選集によらずとも二院の錦腸は風に定家の耳にせる所、定家もし百首を選びたりとするも二院の付を收むる必ずしも難事にあらざるべし。然りと雖も、こゝに一團の疑惑あり。他なし、二院が回天の壯圖空しく破れて沖の小島に巡狩し給ふや、定家の陋劣なる心情は極端に發揮せられたり、彼は年來の寵遇を弊履の如く棄て、鎌倉に媚び、權勢に阿り一門の榮利に汲々として他を顧みざりし也。あゝ、醜劣かくの如き彼をして詩歌を選ばしむ、累の一族に及ばん事を恐れて二院の作を録せざる火を暗るよりも明かならずや。説をなす者更に曰く、明月記の天智以來家隆雅經に及ぶと記せるに、現存の百首、二院を以て終れるは如何、これ定家の後裔、私かにこの二首を加へて定家の選と偽稱せしに歸因せる也。初め定家新勅選を編纂するや、二院の作を收めず、一世ために囂々として謗議百出、罵詈雑らざるなし、これ定家の子孫の耐ふる所に非ず、點計を以て曩祖の過失を補綴せんとす、時なるかな、小倉山莊、定家染筆の色紙あり、世人の未だ知らざる處、こゝに於てか二院の作を加へて定家選と偽稱し僅かに一時の嘲笑を避く。

然れども吾人にしてこれを見る明月記の文は揮毫の序次に非ずして年代を概括せるものなり、現存の百首は二院の作、その尾をなせども、これに隣れるものは雅經にあらすして家隆なり、家隆に先づるは定家、定家、公經と伍し次々に慈圓、雅經を以てす。さればよし二院の詠を定家の後裔の附加と見るも、未だ俄かに定家説否定を斷言するを得ず、色紙の貼付、會々以て順次の不同

を來せしやもはかるべからざる也。

翻て思ふ、二院の御製、明月記の文辭のみを以てして定家の選ならずとするは餘りに論據薄弱なり、されど彼は二條家の繼承者として俊成の相續者として、はた、日本詩歌史上の俊傑として令名當時の詩壇を震撼する事既に久し矣、しかも百首の選次の粗笨なる、採選の蕪雜なる、吾人は斷乎として定家肯定説に左袒する能はざるもの也。

## 五、

然らば百人一首の詩的價值如何。

「實を主として華を兼ねたり、花三實七、和歌の骨髓こゝにありと云へる玄旨の説、信すべきか」「艶麗の一言以て之を盡す」と云へる頓阿の言、肯すべき乎。契沖は「百首元來秀逸中の秀逸を選びたるに非ず、まめやかなる歌中、佳なるものを抜けるなり」と唱へ、眞淵は「此集、細心精緻の餘に成りたるに非ず往々首肯し難きものあり」と稱す、思ふに室町歌人の説は偏に定家尊崇の結果にして妄見とるに足らず、江戸時代の論客未だ百首の真相を觀破して、これに三十棒を加ふるに至らず、猶、世俗の風尚に従つて價值あり情趣あるものとすすが如し。吾人嘗て百人一首の傳誦せらるゝは一に集の傑出せるためにして、百首皆これ金石の響あるものと信せり、されど今にしてこれを思へばむしろ自らその迂愚を感せずんばあらず。

こゝに於て吾人は百首の形式、内容の二方面に就て觀察する處なかるべからず、百首を繙く者誰かまた其戀愛詩の多きに一驚を喫せざるものぞ、然り抒情詩は實にその大半を占め叙景詩の如き

は僅々七八首に過ぎず、これ何によつて然るか、乃ち吾人は百首の什、その五六を除けば悉く平安朝時代の作品なるに着眼せざるべからず。藤岡博士、嘗て平安朝文學史に於て該時代の縮圖を示して曰く、

春たつと云ふばかりにや霞たち、雪にまがふ梅が枝に鶯の聲ぞ香れる、花を見すて、歸る雁、風につれなき櫻の影もなし。池の藤浪、籬の卯の花、山時鳥おとづれて、沼の菖蒲ひく頃は、五月雨遠く降りくらす、六月被はてぬれば秋風はやく身に秘みて機織女に衣かさむ、女さびする女郎花、招く袂の糸すゝき、露をく野邊の千種に虫の音ぬれて、秋も今宵は望の月、霜とまがへる菊の花、紅葉の色は花にまさりぬ。霧たち時雨すぎ、年の瀬は飛鳥の川も數ならず過ぐるも早き夢の世に、待つ宵の涙、後朝の思、空蟬の身のとゞめ難きは戀なりけり  
と更に曰く

若殿上人の晝は懶げに眺め暮し夜に入りてぞ妹がり通ふ、久しく逢はざりし恨いづれか勝れると競ふ思、喜び、歎きさまゝにかき口説きて、しばしもまどろまぬに鶏鳴に驚き朝霧をふみて立出づるめり、あるは盗人のやうに嘯きて築地の壞れなどより覗ひて灯の影に美しき人もがなど、覺束なき獲物を探すもあり、何時も自然を學ぶ世に夜は休むもの寝るものとの定のみは守られずして、當時の人は光より陰、晝よりも夜を喜びたり

かゝる世にありて和歌は實に彼等が唯一の武器なりき。月卿雲客は詩歌管絃に日もこれ足らず後宮に出入し袖をひかへて相唱和し、互に才を競ひ、學を争ふ。あゝ萍草に果實は生らず、輕跳の

世は浮薄の詩歌を生ず、百首脂粉に富むまた偶然にあらざる也

住の江の岸による波よるさへや夢の通路人目よくらむ

敏 行

浪華瀉、短きあしのふしの間も逢はで此の世を過してよとや

伊 勢

我袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ見えぬ乾く間もなし

讚 岐

御垣守、衛士のたく火の夜はもえて晝は消わつゝ物をこそ思へ

能 宣

有馬山猪那の笹原風ふけばいでそよ人を忘れやはする

大貳三位

なにはえのあしのかりねの一夜故、みをつくしてや戀わたるべき

皇嘉門院別當

かくの如きは百首に多く散見する所、粉黛妖冶、修辭の巧みはあれを情を假り、眞を去つて、直ちに人の肺腑に迫るの趣きを見ず。却て一見何等の巧緻なき

君がため惜しからざりし命さへ長くもかなと思ひけるかな

義 孝

忘れじの行末まではかたければ今日を限りの命ともかな

儀同三司母

わすらるゝ身をば思はで誓ひてし人の命の惜しくもあるかな

右 近

の惻々として人を動かすを見よ

而して集中の大部分を占むるものは歌序なり、かけ詞なり、枕詞なり、修辭の形式こゝに至つて極まる

立わかれいなばの山の峯に生ふるまつとし聞かは今歸り來む

行 平

はその尤なるもの、そもゝ歌序たり、懸詞たるや、全然無意義なるものに非ず、情を寓するに景

を以てし、景を描くに情を寄せ、吾人の聯想を喚起して想像を富贍ならしむ、唯恐るその弊、時に感興を阻礙するの甚しきを

花誘ふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわか身なりけり

公 經

あさちふの小野の篠原忍ぶれどあまりてなごか人の戀しき

參 議 等

名にし負はゞ逢さか山のさねかづら人にしられてくるよしもがな

三條右大臣

の如き即ち然り、而して

わが庵は都のたつみ鹿ぞすむ世をうち山と人は云ふなり

喜 撰

筑波根の峯より落つるみな川の戀ぞつもりて淵となりぬる

陽 成 院

かくとだにえやは伊吹のさしもぐさ、さしも知らしな燃ゆる思を

實 方

は風尚、極めて淺露、意趣平凡にして云ふに足らず。

されど抒情詩中、猶優秀なるものを求むれば

長からむ心もしらす黒髪のみだれて今朝は物をこそ思へ

待賢門院堀川

春夢空しく破れては鶴髪亂れて糸の如し、花蝶長しへに相倚るとの誓はあれど白雨豫め期し難きを如何せんや。はた一朝相離れては孤寂日に切に往年の歡語又交ふるに由なく徒らに悶々の情を

懷いて輾轉するのみ、

今は唯思ひたえなむと計りを人づてならで云ふよしもかな

道 雅

而して比喩剗切なるものに

由良のどを渡る舟人梶緒絶え行衛もしらぬ戀の道かな

好 忠

あり、花鳥、春蘭ならざるを思ひては痛切なる

逢ふ事のたえてしなくはなかく人に身をも恨みさらまし

朝 忠

あり、然れども天徳の歌合に一命を賭せしと傳ふる

戀すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしが

忠 見

忍ぶれと色に出にけりわが戀はものや思ふと人の問ふまで

兼 盛

の如きは畢竟凡庸の作ならむのみ。かの千載の下吾人が衷心を焼くの慨ある萬葉の

戀草を力車に七車つみて戀ふらく我心から

廣河女王

君がゆく道の長手をくりたみ焼き亡ぼさん天の火もかも

茅上娘子

に比べては管に宵壤の差のみにして止むべけんや。

若し夫れ景情融合の詠に至つては特に情致掬すべきものあり

諸共に哀れと思へ山ざくら花より外に知る人もなし

行 尊

の悽婉なる、

みよし野の山の秋風小夜ふけて故郷さむく衣うつなり

雅 經

の清絶なる。はた、虫聲唧々たり、滿庭の霜、雪よりも白き悽涼の夜を、われや薄幸の人、室に

芬蘭の香ひなし

きりくす鳴くや霜夜の小庭に衣かたしきひとりかもねむ

後京極攝政

須磨の浦曲の夜深うして、千鳥の啼く音しきりなり、防人半宵の夢破れて戸を推せば、江山蒼涼として弦月雲を縫ふて走る、あゝ郷を離れて幾百里、涙滂沱として双頬を濕す、かくの如きもの連夜

淡路島通ふ千鳥のなく聲に幾夜寝さめぬ須磨の關守 兼 昌

防人の旅愁亦思ふべきにあらすや。而して 淋しさに宿を立ちいでて眺むればいづこも同じ秋の夕暮 良 暹

には大原山上の沙門、孤影孑然として晚秋に佇むの風手を忍ばしめ 小 町

花の色は移にけりな徒らにわが身世にふるながめせしまに 小 町

には暮れゆく春を明鏡に惜しむ絶世の佳人を想見すべし。然りと雖も、 康 秀

ふくからに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしと云ふらん 康 秀

の如きは詩にあらず、歌にあらず、賦にあらず、頌にあらず、三十一文字の組合を以て字義を解釋せるに過ぎざるもの、乞ふ去つて八公熊公の鼻歌に聞け、猶その中に多少の詩趣は存するなり。吾人は百首が、かゝの如き千古の愚作を收めたるを深く惜まざるはあらず。

目を轉して叙景詩を一瞥せんか、これや洵に晨星寥寥、巧拙同じからざれど、旨ね婉約楚楚として頗る唸誦に値するものあり。かの赤人が「田子の浦」の高雅なる家持が「鵲のわたせる橋」の明麗なるは、措く云はず、 是 則

朝ばらけ有明の月と見るまでによし野の里にふれる白雪 是 則

は清迥の氣、骨に徹し

夕されば門田の稻葉音つれてあしのまろやかに秋風ぞふく 經 信

は稻波颯々の響、耳底にあるが如し、また

和田の原漕きいで、見れば久方の雲井にまかふ沖つ白波 法性寺入道

の豪快なるは

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ 友 則

の雍和と兩々相待つて更に一段の光彩を添へ

朝ばらけ宇治の川霧たえ／＼にあらはれわたるせいの網代木、 定 頼

村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧たちのぼる秋の夕暮 寂 蓮

は、共に名工水墨の畫、尙遠く及はざるもの、吾人は百首中に二名吟と推稱するに躊躇せず、殊

に後者に至つては神韻長へにつきず楚辭の所謂山峻高以蔽兮、下幽晦以多雨の概あり洵に千古の

絶唱と謂ふべし、百首の叙景詩はその抒情詩に比して、かく秀逸を收めたれど、なほ

山河に風のたけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり 列 樹

白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける 朝 康

高砂の尾上の櫻ちりにけり外山の霞たゝすもあらなむ 匡 房

の如き剪裁にあらざれば理致、勃窣にあらざれば巧緻、共に風韻の秀雋を以てゆるすべからざるものあり

今、前述の外に吾人が讀過の際多少の感興をひきしものを試に列擧すれば

わたの原八十島かけて漕きいでぬと人には告げよあまの釣舟

篁

夏の夜はまた宵なから明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ

深養父

巡り合ひて見しやそれともわかぬ間に雲かくれにし夜半の月かな

紫式部

逢ひ見ての後の心にくらぶればむかしは物を思はざりけり

敦忠

時鳥なきつる方を眺むれば唯有明の月を殘れる

實定

八重むくら茂れる宿の淋しきに人こそ見えぬ秋は來にけり

惠慶

の數首に過ぎざるのみ。

吾人は本章を結ぶに先だつて、百首收むるところの薄命の三至尊の御製に就て一言する所なかるべからず

藤氏、權を弄して主上徒らに虚器を擁するのみ、悶々の情、中に凝つて病を發し、孤憤やるに所なし、半夜欄に凭つて沈思し、こゝに悲愁の一絶をなす

心にもあらで浮世にながらへは戀しかるべき夜半の月かな

三條院

思ふに帝の讓位は長和五年正月にあり、これや萬乘の位をすて、緇徒桑門に入るに際し、鳳闕の月に對して哀惜の情を吐露せしもの、吾人また何をか云はんや。

政權一度關東に歸して紫宸殿前、秋風寒く簷前の葱草徒らに昔を憶はしむるのみ、

百しきや古き軒端のしのぶにもなほ餘りある昔なりけり

順徳院

傷ましい哉、宮掖の花落ちつくして、未央の月露に愁ふ、吟誦一番、誰か卷を擲て武臣の專横を憤らざるものぞ。然り而して、後鳥羽院の

人も惜し人も恨めしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は、  
に至つては吾人多く云ふに忍びざるなり

陪臣政を恣にして王室の事日に非なり、帝が鬱勃たる意氣の發する處、錦旗一度東に搖きたれども一敗地に泥れては復起たす。「新島守」の哀歌は今も吾人が耳に響けども、壯圖空しうして絶海の孤島に玉体を埋め玉ふ、あゝ政治史に於ける帝は失意の人なりき、されど詩歌史上の帝は誠に千古稀有の成功者なりき。見よ

鶯のなげごもいまだふる雪に杉の葉白し逢坂の關

秋ふけぬ、鳴けや霜夜のきりくすや、影さむし蓬生の月

の如きは到底群小作家の企及し能はざるの詠にあらすや。

要するに小倉百首の吟咏たるや、その叙景詩と數首の抒情詩とを除いては、悉くこれ凡庸の作、云ふに足らざるの仕のみ。思ふに詩歌の優秀なるものは修辭、思想の二方面に於て傑出する所なかるべからず、修辭即形式美は思想即内容美と相和し相合し、發しては絶大の詩賦となり、開いては稀世の歌頌となる。然らば修辭とは何ぞや、その言ふ所をして有効ならしむるにあり、その意を深くし、その韻を長くし以て思想感情をして聽者讀者に適合せしむるにあり、縁語、序詞、比喩、對句、は茲に於て萌芽す、詩人これに依つて駢儷の句を列ね、對比の語を排し、其調を曲にし、



その意を婉にし、以て思想を活動せしめ、感情を躍如たらしむ、然れども弊は往々にして理路に導き剪裁に陥る、百首の抒情詩の如きその極端なるものなり、然り而して徒らに外形美に耽溺して内容を忘却せんか、腐肉を錦袍に包むが如し、言辭の美、美は乃ち美なりと雖も、思想にして猥雑ならんか、何ぞ獨りその美を保つを得んや。再び云ふ、詩歌の要諦は思想、修辭の融合に在り焉。

## 六、

吾人は今や所論を終へたり。嗟峨の厭離庵、寒草鎖す古墳の下に詩人、形骸を横たへてより、頓阿、兼好の輩が詩名と恣にせし室町の世は倏忽として逝き、次で復古學の氣運はこゝに滔天の浪をあげて眞淵の蒼勁となり景樹の幽婉となり、典雅なる諸平の詠、清逸たる曙覽の作、彼此相錯綜して藝園の花、亂れ咲き、かくして世は西歐の思潮を交へて明治の御代に流れ入りぬ。御歌所の一派は古今以後の舊壘に據りて僅かに餘喘を保ち、竹柏會は新舊を折衷して清新の調を奏で、はた新詩社は奔放の情をやるに瑰麗の辭を以てし、柴舟薫園の諸氏、また一方の雄鎮たり、これ宛然たる群雄割據の世、金葉詞花時代の再現也、誰か復、俊成となつて歌壇の霸を掌握するものぞ、觀し來れば明治の詩壇、洋々乎として夫れ多趣なるかな、

詩人ケルネル歌つて曰く

うたは、烈しきいたみにて、はげしき惱みのそのために  
燃えぬる人のむねよりぞ、まことの歌はいで來なる

ど、嗚呼吾人の要求するは眞の聲なり、心靈の響なり、よしその聲は呐々たるもわれに反響すべき心靈あるあり。靈は唯靈を知る。かの理致言筈、鏤刻百端、その辭を艶にし、その句を麗にしたりる詩賦歌謡は吾人の多く堪ふる所にあらざる也。

(丁)

## 荒 野

(ツルゲ子フ)

上

## 渡 邊 庸 三

頃は七月の、日和續きの時なぞによくある様な日であつた。空は夜明けから、はれて居て、曉の空は大火事の時のやうに眞赤にはてるんではなうて、極めて微妙な、紫がうつた色でぼかされて居る。太陽は大早の時分のやうに眞赤な火の球に見えもしない、又、嵐が吹く前のやうに炎の様な色合をしても居ない。唯さらさら短く輝いて、細い長い雲の間から静々と昇つて二三分間もちか／＼と照つてから紫が、つた朝霧の中へまぎれ込んで仕舞ふのである。例の雲の上の方、境目の透明つた所が、一面に小さいきら／＼する銀のあやで覆はれる。とやがて、太陽の光線が迸り始めて、偉大な御來光が圓く嚴そかに現はれる。それがまるで、空の中へかつき入れた様に見えるのである。晝頃になると、大抵は、うすい白いへりの付いた金色を帯んだ灰色の丸形の雲が澤山に高く／＼現はれる、丁度清い透明つた碧い波を立て、川の真中に散らばつて居る島み

たいに動きそうもない。が、段々交情よくなる、お互に押し合ふ、雲と雲を隔て、居る碧い帯が少しづつ見えなくなつた。どうも、空と同じで、雲も矢張、光と熱をすつかり孕んで居る様である。地平線のあたりは例の蒼白い紫丁香花色で、此紋切形の色合を目がな一日此儘で居る。嵐の吹きそうな徴候つたら少しもない、唯、所々に碧みが、つた光線が空から真直に落ちて居る、のは、殆んど見えない位細かい雨がしとくと土を濡ほして居るのである。夕方になると雲と云ふ雲が一つく見えなくなる、煙の雲の様なぼうつとした黒ずんだ輪廓の一番後の雲が小さな薔薇色の片破雲になつて沈む夕日のあたりに廣がる。日の出の時みたいに和やかに夕日がもう見えなくなつた所、そこに、紫が、つた光が、二三分間も、段々暗くなる地面の上に、湧き出て居る。間もなく夕の明星が少し高く顔を出す、さらつと光る、突然にぶる、と復きらつとすると、念を入れて動かした燈火をつくりである。こんな日には、一番鮮やかな色でも一向見ばえがしない、物に角がない、で、一種かうしとやかな趣が含まれて居る。又、随分熱くなることもある、悪くするとまるで火の様な靄が山の端に立登る事もある。がしかし、それも風の爲に遠くへ吹き遣られてしまふので、お天氣が續く其證據に、旋風の奴がまつしぐらに野と云ふ野、路と云ふ路を白い柱をたて、突進んで行くのである。大氣は清らかで、田舎では苦蓬、刈つたライ麥、蕎麥などの入混つた臭ひがする。日の入り一時間前でも空中に濕りつ氣の痕もない位である。斯んな天氣は刈入れをやらうとする折に農夫どもが待ちに待つ天氣である。

わたしがトウラ領内のチエルンと云ふあたりで松鷄獵をやつてた日は丁度こんな日であつた。獵

は随分澤山あつた、獲物囊は充満いっぱんになつて、肩が切れるかと思ふ程であつた。もう黄昏も漸く盡きんとして、暗の色は益々冷やかに益々みちちりと、早や太陽の光線は一筋も來ないが、でもまだ明るい大氣の中へ廣がり出して來た。わたしは家路につくことにした。葦だらけの平原を大急ぎで通り抜けて、鳥渡した小さな丘に登つた、所が、これ迄幾度かさまよい歩いたあの右手の方にちよつとした檜林があつて左手の方には白塗の小さな教會がある、あの平原へは出ないで、全く見知らずの所へ出て仕舞つた。脚下は、さうつと狭い谷で、真正面には房々とした白楊の森が壁の様に突立つて居た。わたしはあつげにとられて立すくんた。「やあ、こいつお此方へ來るんぢやなかつた、右へ來すきたぞ」とわたしは此所は一体何所だらとかう考へながら獨り言を言つた。斯んなぶまをやつたのが癪にさはつて、急いで丘を降りた。すると忽ち不快な感じがした、空氣はまるで穴藏の中みたいに重く苦しくつて濕つて居た、谷の底を覆ふて居る生え茂つた丈の高い草がじめついて、シートの様に白く見えた、そんな中へ踏み込んだがいやな氣がした。出來る丈急いで其所を通り抜けて、左の方へ曲つて、森を突切つて行つた。蝙蝠がはや梢の上の方で深い味のある輪を描いて居た、して、其波形になつて飛ぶのが、早や暗の色に侵されて居た空の背景の中に浮き出した様に現はれて居た。歸り後れた小さい鷹が一匹眞一文字に森の上を通つた、彼も急いで自分の巢へ戻る所であつた。「平原のあつち側へ出りや」とわたしは獨り言を云つた「そすりや路があるだらう、こいつあ少くとも十町位は損をした」。

居た叢であつた、すうつと、向う、すうつと、遠くへ行けば荒野へ出るさう考へた。わたしは再び立止まつた。「これは怪しいぞ、すると一体此所は何所になるんだらう」。朝から通つて来た所を心の中でまたすうつと通つてみた。「あゝ、わかつた」とわたしは獨りで怒鳴つた「あそこがバラキノの森だ。すると、あれがシンダアイヴォーの森に違ひない。如何して斯んなに道を間違へたんだらう。不思議だなあ。こうつと、こりや此方へ行かなきやあるまい」。

わたしは叢に沿うて曲つて右の方へ行つた。何しろ夜は段々暗うなつて来た、暗の影が夕霧と一緒にになつて四方へ又上の方からも廣がり出している様であつた。やつとの事で、狭い寂びれた小徑へ出た、後世大事にこれをたどつて行つた。暗さの増すに連れてあたりはいよいよ森々と寂びれて行つた。折々、鶉の鳴くのが靜かに聞えた。小さな鼻が低く飛んでわたしに觸れたのもう非常に魂消げたと見えて向う側の方へそれて行つた。叢から野へ出た。もう、少し離れてる物でも見分けがつかなくなつた。前の方に白い様な平原の面てがぼうつと廣がつて居た、向うの方で、躍り懸つてくる様な黒い影の一團が、むら／＼つと湧き立つ雲の様に四方へ疾風の如くに進んで居た。地をふむ毎に足音がぶく反響をした、涼しい風が段々冷やかになりだした。青白かつた空が少しづつ、色づいて来て最早碧みが、つた夜の色を帯びて居た。二つ三つ、小さい星がきら／＼と所々に現はれた。

わたしは森だと思つたのは黒ずんだ丘であつた。「ちや何所へ来たのかな」とかうわたしは是で三度止まつて黄褐色と白色の斑の英吉利種の獵犬ダイアナを何か尋ねる様な風態をして眺めながら、聲を出してみた。わたしの犬は全体なか／＼鳥渡はない利巧な奴であつた、所が、此物知りの奴さん、唯もう、尾を振つて疲れた様な顔付をしてごんよりと自分の方を見るばかりで、智慧をかしてくれる所ではなかつた。わたしは今云つた様な絶体絶命の仕合せ、もう自暴氣味になつた、で、さも行手でも急に解つた様に、急ぎ足で復懸けた。丘について行つたら、開墾地に圍まれて居るあまり深くもない谷へ出た。すぐ、一種妙な感じかした。谷に殆だ／＼つ廣い釜ボウルの様な形をして居た。底の方に大きな白い石が幾つか立つて居つた、何か秘密な相談でもしに此處へ這ひこんで居るといふ体であつた。上の方には空がもの哀れにかぶさつて居る、此ひとつそりとした息のつまる様な場所、こんな有様だから氣が減入つてしまつた。獸か何かのもの悲しい鳴き聲が例の石の間からもれてきた。急いで丘の上へ戻つた。此時までは道へ出る望みを全然なくなしはしなかつた、今と云ふ今は、もう迷子になつたものとかう觀念をした、もう、全く暗に埋もれて居るあたり近所を一々何所か何所かと氣をもむのはやめて、星をしるべに矢鱈に歩いて行つた。非常に疲れた足を引すつて凡そ半時間も斯う云ふ具合に歩いて行つた。まだ斯んな寂びれた片田舎は見たことがない様な氣がした、あたり近所には音一つしない、遠くの方に火影一つあるじやなし、丘と丘とが續き合つて、野はだらしなく廣がつて居た、突然に叢がつい鼻の下でによさつと突つ立つた。暫らく歩いてから、まゝよ、何處だつて構はん、夜の白む迄横になつて居やうと思つて見ると、其處は絶壁の端であつた。

わたしは足早に後すざりしてよく／＼自分の圍りの薄暗闇をすかしてみた。量り知れない平原

がぼんやりと目の前に見えた。その平原はうね／＼と流れて居る大きな川でしきられて居て、川の面は、所々、銀の様な反射光線をその行方が鮮やかにわかる位にはつきりと投げて居た。わたしが居た高地はすうつと下まで殆垂直で、空の碧い様な背景の中に雲つくばかりの側面圖のやうに突出つて居た。向うの方の、あの静かな流が黒い鏡の様に見える邊のあの平原の隅の方で、丘の麓の所に二つの小さい火影が見えた、二つの火はお互に少し離れて燃えて居た、燻つて居た。周圍には人が幾人が居た、影法師がじつかに彼方此方と動いて居た、時々小さいちり毛の頭が突然に照されることもあつた。

やつとの事で勝手かわかつて来た、此所は此地方で俗にアレ、ベジネと云つてる所だ。其晩家へ歸るなんて到底不可能であつた、が疲れ切つて、今にもめりさうであつた。わたしはあの火の見える側へ行つてあの人達——自分は家畜追ひだとはばかり思つて居たが、あの人達と一緒に夜の明けるのを待たうと斯うきめた。無事で高地を降りた。所が、つかまつた枝を離すか離さない内にさ／＼の毛の白犬が二匹わたし目懸けて躍び出して猛烈に吠え付いて来た。焚火のあたりで鋭い聲が二聲三聲反響した、すると少年が二三人突立ち上つた。わたしは少年の怒鳴る聲に返答をした。少年はわたしの方へ驅けて来てすぐと犬を呼び戻した。その犬の奴、私のダイアナが突然に飛び出した影をみて殊に吃驚して居つた。わたしは少年達の居る方へ行つた。

遠くから見て家畜を追ふ奴だと思つたのは飛んだ勘違ひ、隣村から来て居る無邪氣な年のゆかない農夫が一群の馬の張番をして居る所であつた。全体、わたしの國では非常に暑い時分には馬を一晚の間つて云ふもの、大きな野原へおつ放して置く、若しこれが晝間ならこれこそどだの蠅だのに大苦しめに苦しめられて溜つたもんぢやない。小供共は皆して夕方になると馬を追つて出て行つて朝になると復つて戻つてくると云ふまあお祭みたいな事をやる。坊主頭をふりたて、古ばけたフロックを着て、一等疾い若駒にゆらりと乗つて、わつわと怒鳴る、はつはと笑ふ、乗り出す、足をふる、手をふる、往來には長い／＼柱を横にした様に黄い塵が立つ、その中でもつて空へ跳ね上る、蹴りまはすと云ふ騒ぎ。此樂しそうな騒動は國中に廣まるので、馬と云ふ馬は耳を突立て、走る、真先きに毛の／＼の馬が薊だらけの鬣をして、尻尾を空へ向けて足を互ちがひにおろして飛んで行く。

わたしは少年達に自分が迷子になつた譯を話してから皆の側にどつかと坐り込んだ。皆は何所から来たのかと尋いたから、かう／＼だと話したら、皆はだんまりになつて少し遠退いた。それから又お互に二言三言話した。それからわたしは、もう大方葉が落ちて居た叢の下の所で長くなつて四邊を見まはした。其景色つたらしいものであつた、焚火の上の方には絶えずゆらめいて居る輝いた輪が一つ鳥羽玉の暗の中に浮彫の様になつて浮き出て居る。合間／＼に炎が起つては向うの方へ光をちらつ／＼と投げて居る、のが、まるで可愛らしい焚火の舌みたいで、圍りの枝をなめそうにしては殆すぐと消えて仕舞つた。折々、すらつとした影が立上つて焚火のへりの所まで廣がつた。光は暗と押し合をして居た。炎の色がにぶつて來ると、焚火を取巻いてる光の輪が段々狭くなつて、暗が段々側へ寄つて來る。すると、不意に赤褐色なのか褐色なのかはた

白馬なのか鳥渡見別けのつき兼ねる馬の頭が暗闇からにゆうつと出てどんよりとした眼付でじいつと皆の方をみなながら長い房々とした草をがつゝいてばさゝと食つて居たが、やがて頭を垂らして復みえなくなつた。草を食つたり鼻息をしたりする音許りが矢張聞えた。焚火の近くでは到底暗闇の中にあるものは一つも見別けがつかかなかつた、けれども、少し離れて見るとぼうつと黒い様なものが眼にはいる、これは皆ちよつとした丘だの森だったのであつた。圓天井の様な大空は清く深く、天の戸はずうつと嚴そかに開かれて居て、高いく所からあの深いく寂びれた光がもれてくる。人は皆樂しげに此さはやかな匂やかな夜の氣―露西亞の夏の夜の氣を吸ふて居た。音ど云ふ音の寂寞を破るものは無かつた。唯、折々、我々の近くを流れて行く川に大きな魚がはねる音や、堤に當る川の流が、堤の所へ殘して來たあのさゞ波にゆるやかにゆられながら響かす音が、かすかなさわ／＼と云ふ音をたて、居た。焚火はなほ燃えて居た、もうパチ／＼と云ふ音は殆ど聞えなかつた。

少年達は例の既の事でわたしを食ひ盡さうとしたあの二匹の犬と一諸に焚火のまはりに陣取つた。此二匹の犬がわたしに慣れるまでには大分暇がかゝつた。其間、畜生、焚火の方を横目でちら／＼と見ちやあ眠そくな面をしながら、必定自分が偉いつもりで折々うなつて見せた、うなると今度は到底自分たちの願ひも叶ひそうもないのが悔しいと云はんばかりに低いうめき聲をもらした。少年は都合五人―フエディア、バヴロークカ、イリオークカ、コスティア、ヴァヴィアであつた。皆の名前は子供同志のお話しを聞いて居る内にわかつたので、わたしは此所で讀者に其お話なる

ものをお目に懸け様と思ふ。

一番始めのフエディア、これは一番年長で十四位らしい、様子のよい、少しきやしや過る方であつたけれど快活な、髪は長いちりちりとした、唇のあたりには始終ぼうつとしたおどけた様な笑みを含んで居る子であつた。見た所、さうしても良家の息子に違ひなかつた。此所へ來て居るのはお務でちやなくて、好きでと云ふ譯であつた。着物は、黄ばんだキャラコのシャツを着てアーミアークを羽織つて居た、が、肩が狭いのでうまきは乗つて居なかつた。碧い緋草に角笛がくつ着いて居た。足につけてた長靴は此子の足に合はして造らせたもので、私の國によくある様に親父の足に合はして造らせた様なものではなかつた。二番目のハヴロークカは黒い突出つた髪の毛の球の灰色な、頬骨の高い、痘瘡の跡のある青い顔の、口が大きくつて整つて居る、非常に大きな頭の、身体に似合はない細い脚の、十人並の顔立の子であつた、が、私には非常に氣に入つた。人なつっこそな利巧そな顔で、聲の調子がいかに元氣そうであつた。服装はさわ／＼したシャツと地の出て居るリンネルのズボンとで、餘り小さくつぱりとしても居なかつた。三番目の子は顔だちが格別目に立たぬ子であつたが、鉤の様に曲つた鼻の、長い眠そな顔した子で、顔色一体に洗んだ病身らしい所があつた、唯さい狭い唇を堅く閉ぢて、眉根をよせて、始終焚火の上を視つめてると云つた風情で、いつもすつぱりと耳の邊までかぶつて居る小さい毛皮帽の下から尖つた様な房になつて黄ばんだもう大方白い髪がはみ出て居た。彼のラプティと新しいオノウトキを着けて居た。体をぐる／＼と三度まいてる厚い帯を小奇麗な黒い布の上衣

の上にしめて居た。年は、バヴロークカもさうだが十二より上とはどうも見えなかつた。四番目のコステア、年は十二で、悲しそうな沈んだ顔付はわたしの好奇心を呼び起した。顔立の小さい方で、ひねつこけた、赤味が、つた點のある、栗鼠みたいに下の方へきてこけて居る顔であつた。唇は殆見えない位で、露を含んで居るあの大きな黒い輝いてる眼は見る人に一種妙な印象を與へた。丁度どうしても語では現はせない様な或ものを表はそうとして居る様であつた。彼は全体に小さい弱そうな体格の子で衣物も貧しさうであつた。最後のヴァヴィアつて云へばわたしは始めの内は彼を見掛けなかつた。彼はちいつとして荒ぶりの下へもぐり込んでその栗色の渦巻頭は滅多に見せずに地面の上に寝そびつて居たのであつた。見た所、七つより上なことはないらしかつた。

叢の下で皆と少し離れて寝轉びながら、わたしは小供達のやる所をちつと視て居た。一つの焚火には小さな湯沸しがかゝつて居た、中には馬鈴薯がはいつて居た。バヴロークカは煮加減をみて居た。膝をつきながら、木片を携えて、それを沸かして居る水の中へ投込んで居た。フェディアは開いて居るアトミアークの上へ兩腕をもたらせて、地面の上に長くなつて居た。イリオークカはコステアの側に居て態とらしく眼ばたきをして居た。コステアは横を向いて、どつか遠くの方を見て居た。ヴァヴィアは全く身動きもしないで吳座の下に居た。わたしは眠て居るふりをして居た。子供達はぼつりく〜とお互同志で話しをやりだした。自分たちの翌日の仕事の事だの、馬の事だの、それからそれへとべちやつきだした。すると、フ

エディアは不意にイリオークカの方を向いて、其様子がどうもわたしに来たので止めになつてた話の續きらしい話を始めた。

「ちや、君はデモヴィを見たのかへ」。

「いや、僕見やしない、見えるもんぢやないんだ」とイリオークカが顔付相當な調子の弱々しい愉快そうな聲で云つた「音だけ聞いたんだ、僕ばかり聞いたんぢやないよ」。

「どつから其奴が出たんだい」。

「あの古い貯水桶のあんな中だ」。

「君は工場で仕事をするんかい」。

「うん、そうだ。兄貴のヴァイディオークカと僕と二人、光澤つけをやるんだ」。

「そう！君は職人だね！で、どんな音がきこれたんだい？」とフェディアが尋ねた。

「まあ斯うなんだ、或時ね、僕達、僕と僕の兄貴とさ、それから又、ミカイヴォーのフェダーと亂視のイヴァン、それからあと、ほら、ベルスコリンスのもう一人のイヴァンね、それから、枯つ手のイヴァクカとまだ他の子も居たつけ、何でも皆で十人余りになるが、こんなことがあつたんだ。其日はね、皆して光澤つけする室で夜を明かすことになつたんだがね！偶然斯うなつたんぢやないんだ、あの、ほら、監督のナサロフね、彼奴の命令でだ。「え、おい、お前達は如何して家へなんか歸れるい、明日の仕事がうんとあるぞ、だからなあ、お前達、家へ歸らん方が良いぞ」斯う云ふんだらう。だからみんな泊つたんだ、皆で床の上へ一緒に横になつた。すると不意

にアヴデイオークカが「デモヴィでも出たら如何うだらう」とかう皆に云つたんだ。と云ふが早いか、君、二階で丁度皆の居る上の所で、水車のあたりで誰か歩き出したんだ。皆はちいつと耳を澄した。そいつが歩くと床がしなつてみしく云ふんだ。丁度、皆の居る上の所を通つて、それから水がざはしく云ひだし。すると水車が廻つて、ぐるぐるやりだしたんだ。だが水門はおりて居たんだ。皆は誰が一体水門をわけて水をあんな風に通すんだらうと思ひ議に思つた。水車は廻つてから止まつちまつた。皆んなの頭の上で歩く音がして、階子段を降りだして、急ぎもしない様に降りて来た。足音がみしりくと云ふんだ。戸の方へ近づいて来る、それから立ち止まつて待つて居た。不意に戸がすうつと開いた。皆はぞうつとして縮まつた。顔を上げたら、もう妖怪は行つてしまつた。見ると釜の飾が一つ動き出して、段々高く上つて、まるで誰か動かして居る様に宙でゆれて、復舊の所へかへつて来た。すると、今度は、もう一つの釜の鉤形の栓がほんと抜けて舊の所へ落ちて戻つた。復、誰か戸の側へ来る足音がして急に咳嗽をしたら、羊みたいな咳嗽をした。そりやほんどうなんだよ。皆はもう密着くっくいて小さくなつて居た。一晩でものわ、ほんとに良い思をしたよ」

「さうかへ！」とバヴロークカが云つた「何うして其奴が咳嗽をしたらんだらう」

「僕あ分らん。多分濕つてた爲せいだらう」

少年達はひつそりとして仕舞つた。

「馬鈴薯はゆだつたかい」とフエディアが尋ねた。

「いや、まだ固いよ。やあ、どうだい、あんな畜生の跳ねるのわ」と彼は川の方を向いて云つた

「さつと梭魚かますだせ。やあ、流れ星が！」

「諸君みんな!! 僕、いゝ話があるから聞けよ」とコステアが金切聲で云つた「よく聞いてくれ、これやお父おとうさんがこないだ、僕に話してきかしたんだ」

「僕等よく聴くよ」とフエディアが主人顔して云つた。

「皆は、ほら、あのスラポータの大工の、ガヅリラを知つて居るかい。」

「うん、うん、知つてるとも」

「ぢや、あいつが何時でも不機嫌な顔して何時でも黙つて居る譯を知つてるかい。僕、その譯を話さう。彼奴が或る日のこと何んでもお父つあんの話によるとね、胡桃をさがしに森ん中へ行たんだとさ。うん、胡桃拾ひに出かけたんだ。處が、迷子になつちまつたんだ。何處へつて、そりや君。で、まあ、彼奴はずん／＼歩いて行つたんだとよ。處が、どうしても道が知れないのだ。そのうちもう暗くなつて來たんだつて。仕方がないから木の下に坐りこんで「夜の明けるのを待たう」と思つたんだ。坐つて寢込んでしまつたんだ。そんな風にして其時寢るといふと、不意に彼奴を呼ぶ聲が聞えたんだらう。見て見た。何も居やしない。復、寢入つたそうだと復、誰れかい自分を呼んでるんだらう。また、四邊を視まはして見た。長い間見て見た處が、彼奴おにいの前の木に、森の精ロウサルカのどまつてるのが見えたんだ。大きな聲で笑ひながら、彼方此方ぶらんとして居たそうだと、うん、笑つて居たそうだよ。何しる月は十五夜であかくと照つてるんだらう、何でも

見えるさ。森の精は彼奴を手招きしてね、枝の上に来るで可愛らしい小さい白楊魚カササギみたいにと云つたら好いか銀色をして居るカラシンとでも云はうか、鬼に角、眞白できらくとしてね、枝の上に静じつと坐まつてるんだらう。大工のガヴリラの奴、もう全然すっか參まつちやつてねー君、そこへ持つてきて君、彼女はだ、矢張、笑ひ顔をしてさ、彼奴を呼んでる様に此方こなたを向いて手を動かしてんだらう。ガヴリラは既すでう起きて行かうとした。森の精にうんと云ふ所存しよんだつたんだねー君、所がね君、僕等はさう思はんさやなるまいが、神様がお告つげを下くださつたんだ。思ひ切りにくかつたんだが、彼奴は虫に抑へちまつたんだつて。手がもうねー、大理石の様になつてね、動かせない程だつたつて彼奴が云つてたつて。君等、此事をどう考るい、え、皆。だが笑ふのをよして不意に森の精が泣き出した時には腹の虫がもう抑へきれない位だつたさうだよ。まあ、大變泣いたさうだよ。森の精の泣いた時にはねー君、髪毛で眼を拭つたさうだが、髪毛は大麻の様に繰りだつたさうだ。それから、ガヴリラの奴、女をじつとよく／＼視て一体どうしてその、そんなに泣くんです」とかう訊きひたんださうだ。すると森の女は「あなたいやだなんて思ひなさらなきやい、いんてすのに。そすりや、貴君あなたは一生楽しく嬉しく妾めかけと一緒に暮らせたのに。あなたが泣くのも、あなたが歎くのも、みんな、貴君がいやだと思ひなすつた爲です。あたしだつてわたし獨りで歎きたかないから、あたし貴君を一生もう心配ばかりさして暮らさせます。と云つたかと思ふと君、女は見えなくなつて、ガヴリラは直ぐと森から出る道を思ひ出したさうだ。其日からつて云ふものは始終彼奴は悲しそうな顔をして居るんだつて」。

「成程!!」とフエディアは鳥渡してから云つた、「だけごどうしてそんな魔女なんか、基督教徒クリスチャンの精神しんを損こなふとが出来るんだらうか、おまけに言ふとをさかなかつたんだらう。『あ、さうだねー、どうも僕にや少しも判らん』とコステアが云つた『それからね、ガヴリラは女の聲はいかにもやさしい、いかにも哀れつばい、蛙の様な聲だつたと云つてたよ』」

「君のお父つあんがさう云つたんかへ」とフエディアが尋ねた。

「うん。僕屋根のちぎ下の部屋で横になつて、すつかり聞いたんだ」

「そりや呆れちまう。如何して彼奴はそんなに悲しいんだらう。だが、女に名を呼ばれてからつてものは、彼奴はさうも女を好いちやつたらしいよ」

「うん、好いちやつた、成程」とイリオークカが口を出した。「あ、さうだ、さうだ、女は彼奴を標めり殺す所存しよんだつたんだ、さう爲しやうと思つたんだ。ロウサルカはみんなそれが商賣しょうばいなんだもの」。

「だけと、こゝにも必定きつてい、ロウサルカが居るよ」とフエディアが注意した。

「なあに」とコステアが答へて「此所はからつとしてみるもの。だが川は遠くはないなあ」。

(ロウサルカは森又は川にすむ妖女なり) 「獵人日記」の一節



# 武人の文事

其月生

神州の武人は由來文事にも疎からず。義家頼政等の韻事は姑く措くも、近く日清日露の戦時、新聞雜誌などに散見せし名將勇卒の吟詠中、徃々吾人をして三嘆せしむるものありき。しかも武人の作や一種奪ふべからざる稜骨のあるありて、纖巧浮華なる文字の多き今日、頗る人意を強からしむる概あり。頃日伊豆羅山の「征戰餘音」に接して予は愈々此の感を深うす。同冊子憾むらくは非賣品なるが故に、茲に其の内容の一斑を紹介して諸士の一讀を煩はさん。

羅山名は凡夫、陸軍歩兵大佐にして目下大坂某聯隊に長たり。嘗て日清戦役の際陣中横笛を弄して風流大尉の雅名を博せし事あり、以て其の性の一部を知るべく、戦後同戦史の編纂に従ひし事あり、以て文筆に疎からざるを察すべし。筑前宗像の人にして予が同郷の先輩なり。

開卷先づ新橋出發の狀を記し、次に和歌あり――

この度はうらるの山の巔に旭の櫻移し植ゑなん

と、決心の程勇ましくもまた優しからずや。

故近衛公の愛馬徵發馬匹中にありしが、鬪取の結果伊豆中佐(當時なほ中佐なりき)の乗用となる。さて愈々廣島を發せんとするや一書を裁して友人に與へ、公爵夫人への傳言を以てす。文に曰く――

故公爵ノ愛馬ハ第一師團ノ高級參謀伊豆中佐鳥拉ト命名シテ愛乗出征致候若シ凱旋シテ公ノ靈前ニ騎シテ參拜スルヲ得ザレバ此馬ト俱ニ斃レタルモノト御承知被下度云々

昔は佐々木高綱、名馬生駿を得、賴朝に誓つて曰く「宇治川の先陣勿論に候高綱若し軍以前に死にぬと聞召さば先陣は早や人に渡されけりと思召さるべし」(源平盛衰記)と。あはれ今昔の佳話、佐野天徳寺ならでも感泣すべき事實ならずや。

船關門海峡を過ぐ、郷里の山々双眸の中に在り。人誰か涙なからん、況んや古稀の老父の彼處にあるをや。

舳艫相銜大江間、占得風光赤間關、眼底有、浪人、識否、舷頭坐見故郷山。

坐見の二字いたく予が心を動かしぬ、曾て見し「加藤清正遙に富岳を望むの圖」の清正も、やさしや兜は從者に持たせたりしよ。

いくさ船赤間の關を出で行けば霧立ち迷ふ故郷の山

當時の第一師團長は長くも伏見宮殿下にておはしき。御上陸後御宿營の不完全なりしと、御行軍に塵埃の強かりしとは中佐の恐察に餘りありければ、其の御情態を記し奉りて當時の大本營副官に送られしが、該陣中鉛筆の走り書きは、岡澤侍從武官長の手を経て、恐れ多くも乙夜の覽に供せられたりしとか！至誠神の如しとは眞に斯の如きをや云ふべき、中佐の光榮何物か之に過ぎんや。

南山の戦後、伏見宮殿下には御榮進御歸朝ありけり。殿下の幕僚たること二年、公私共に優渥な

る御愛願を蒙りし中佐、豈に惜別追慕の情に堪ふべけん。

奉送ノ將卒肅然堵列シ君カ代ノ譜響キ巨レル間ヲ徐々騎行セラル將卒一トシテ仰ギ拜スルヲ得ル者ナク殿下モ途ニハンカチーフヲ御顔ニ當テサセラレタルヲ拜シタル時ハ隨行奉送セル予ハ殆ンド馬上ニ堪ヘザラントセリ。

語簡意長、まさに是れ一幅の畫圖たり。當日中佐の所詠——

さばへなす仇を恐れぬものゝふも今日の別れに袖しぼるなり

まめなれど残し給へる言の葉に盡きぬ情のこもる悲しさ

彈丸の雨ものどもせざる大丈夫の今日の送りのしめり勝ちなる

君もまた残り惜しくやおぼすらん駒のわがきの遅き御姿

この仇を今までのあたり控へずば君の船路に待らんものを

渡つ海しこの仇浪心せよ今日我が君は歸りますなり

くにたみは喜びよばひ迎ふらん動し高き君の歸りを

いづれも真情直露、惻々人を動かすものあり。

水師營は久しく攻防兩軍の間に夾まりて、慘澹の光景目も當てられざりきと。中佐之を寫して二十八字あり、

老幼負擔又竄奔、屋牆莫一不彈痕、荒涼滿目秋風裏、瘦狗聲悲戰後村。

又三十一文字あり、

たゝかひの過ぎにし村のあととへば秋風寒く瘦犬の吠ゆ

旅順總攻撃の前日、一鷲彈丸に觸れて陣中に墜つ。松村師團長之を乃木軍司令官に贈り、添ふるに和歌を以てせり。

大柿を獲しふるごども偲ばれて明日の軍の瑞祥と知る

乃木將軍返歌を寄せらる。

思ひさや十とせのむかし龍を斬り今またこゝに鷲をうつとは

鈴木參謀、

時ぞ來ぬ天翔りつる大鳥も我がみいくさの手に落るべき

伊豆中佐、

龍を斬る大和男の兒のかひなもてなぞ荒鷲のうち得ざるべき

右四首いづれも當意即妙、何等技巧を構へざる所に一種抜くべからざる氣魄の磅礴せるあり、予が曩に武人の吟詠に取るべきものありといひしは即ち是なり。いづれの國か斯く容易に所懐を其の國風に發表し得る將卒あるぞ。

旅順の攻撃も漸次に進捗し、十一月に至りては「鐵壁の金城も次第に收まり十年の功業もまさに雲烟に附せられん」とす。而も敵は猶ほ屈せず、援兵到來の目途なきに關はらず頑として防戦を繼續す。蘿山この境遇を寫さんとして俗謠「わるどめせずと」の換歌を作る。

わる意地張らずとも降れ、他からたすけが來るじやない、攻むる我等の辛苦より、守る

そなたはどんなにくつらからう、

詩歌俗謡之く所として可ならざるなし。風流士官の雅名空しからずといふべし。

松樹山の堡壘攻撃中、工兵大隊長大木大佐戦歿す。吊うて曰く――

松樹山大木の幹の枯れしより淋しまさる冬の夜の月

源氏物語桐壺の巻に出でく古來幾百の婦女子を泣かしたる更衣の母北の方の換歌「荒き風ふせ  
ざし蔭の枯れしより小萩が上ぞしづ心なき」に似て哀深し。

二百三高地の力功守は激戦中の激戦、苦戦中の苦戦なりき。我軍遂に之を奪略するや、乃木將  
軍、

備靈山嶮豈難攀、 男子功名期克艱、 鐵血蔽山山形改、 萬人齊仰備靈山。

思へ將軍の第二子は此の戦に歿したるなり。伊豆中佐之に和して、

王師向處不看艱、 峻嶽嶮峰皆可攀、 旭旆紅飄淚如霰、 三千積屍備靈山。

得意満面の裡に赤涙の滂沱たるを見すや。宜なり凱旋の日に於ける將軍の作にも中佐の作にも各  
々此の種の涙潜める。將軍、

王師百万征強虜、 野戰攻城屍作山、 愧我何顔看父老、 凱旋今日幾人還。

伊豆中佐

百戰攻魯歸舊營、 旭旗高颺熾歡迎、 陣亡將卒今何處、 萬歲聲中淚數行。

みいくさのかへりを祝ふこの聲をいかに聞くらん亡き友の妻

旅順陥落後わが中佐は歩兵第四十八聯隊長に補せられて北進遼陽に向ひぬ。沙河の會戰、奉天の  
會戰等に參加し、構和成りて凱旋せしまでの拾有五ヶ月、その間の陣中雜詠、これまた前記のも  
のに劣らず興多かれど、さりととも茲には略しつ。凱旋の歌(軍歌)の一節を掲げて此の文を結ば  
ん。

萬歳の聲いさましく、

凱旋門を過ぐる時

思ふは亡せし战友の

榮ある今日の凱旋に

國の光を擔ひつゝ

我が亡き友の同胞が

國譽揚げたる戦争の

ゆめな忘れそ共々に

これぞ我等の心なる

歡迎うくる身のほまれ

嬉し涙の其の中に

八百餘人今いづこ

我が隊長は歌ふらく

勇みて歸る御軍を

迎ふる心いかならん

譽は死者の功なるぞ

永く祀らん死者の靈

これぞ我等の心なる

嗚呼この心ありてこそ昔も今も我が神州の兵は世界に比類あらぬなれ。嗚呼この心ありてこそ此  
の「征戰餘音」の詩歌に凡て生氣ほとばしるなれ。嗚呼この心ありてこそ「肉彈」うた日記「從軍三  
年」に泣かせられし予は四たび此の冊子に泣かせられ、從て之を紹介して茲に誌友諸士の清き涙  
をも請求したるなれ。(終)

## 爾に反れ

たかき

大覺世尊逝き給ひてより、春風秋雨茲に三千年、世は末法となりて、人々文明の濁波に漂ひ、清き源泉に歸るを忘る。此時に當りて彼が一言に耳傾け彼が一行に意を注ぐも、必ずしも贅事にあらざるべし。

偉人の追懷は吾人にとりて力なれば也、信念なれば也、以て吾人を導く雲の柱たり以て吾人を照す火の柱たれば也。

倏ち視る、一大光明の宇宙を射破り來つて日輪爲に其光を没せしを、倏ち聽く天鼓地樂相和して六合に遍ねく万川爲に其流を停めしを、我が太子悉達多の叫んで生れ給ひしは此時にぞある、  
「天上天下唯我獨尊」也。

嗚呼是れ彼が將に救はんとする衆生に對し、劈頭與へし一大福音にあらす耶、彼が五十有餘年の一切説法は無みするも可也、唯此一句は、人類と共に永へに空す可らざる也。

吾人は彼に學んで妻を捨つるを要せず、彼に倣ひて雪山六年の苦行に及ばず、只吾人の「内の人」亦彼と同じ靈泉より湧き出でたる法流に淨化されつゝあるを知らば足る、

吾人の衷に一個獨尊なる至靈者の存するあり、吾人の衷に天上天下を擧ぐるも代へ難き目醒め

る自覺者の在るあり、實に吾人が小き胸奥の極る所、斯れ直に涯なき宇宙心靈の法海に聯るに非ず耶、命に至るの途は窄く、其門は小し、見て以て小とし窄とせる吾人の胸奥是れ眞に命に至る途に非ずして何ぞ。

然かも人は今や、此の眞道なる自家心頭を顧みずして徒に他家門前の乞食兒として蓬々路頭に救を求めんとす、求めて得、叩いて開かるゝに至りては尙忍ぶべし、其與へられざるを如何せんその會はれざるを如何せん。

富か、富を須彌山より高く蓄へて其内に臥するも、汝の心臓は刻々、墓場に向つて鳴り行く進軍ラツパの如き其鼓動を分秒も停めざるなり、且富の慾樹やその幹高くその枝多し、能くその成果を食つて飽ける者果して幾人かある、何ぞ其本の大にして人目を惹くの甚しき、されど悲しい哉葉のみ徒に繁くして慾果は誠に饅貝中の眞珠よりも寥々たるを。

名か名か、如何に青春の血をして踴躍せしむるよ、我が剛健なる祖先は歌つて曰く「男の子やも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立たずして」然れども星遷り代變りては或は百年にして空しかるべきあり、千年にして人耳を去るべきあり、譽る人失せ、傳へ聞かん人亦去りやがて時の囓り殫す所とならん、富は蠅蛄の如く名は煙の如し、蠅蛄は夕を待たずして失せ名は空に騰りながら消ゆ。

唯夫れ快樂か、月淡き春宵正に是れ一刻千金、變巖たる芳雲の中一盃の不老酒は千載の憂を解くに足る、然も其はげに一盃なり一瞬なり、曾て劇しく傾け盡したる快樂の酒は今何處にある、

試にそが殘滴を嘗むれば其味腐酢の如し、曾て手折りて吾人の頭上を飾りし花宴の一輪試に其花を探し求むれば色褪せ形萎みて、徒だ惡氣を吐く。

斯くて一切の富も、萬代の名も、最大の快樂も遂に汝を救ふに足らざる也、汝は汝を救ふべき或物を見出さんとて、他家路頭を彷徨せり、而して彼等は唯一瞬汝を酔はしめき、迷はしめき、遂に汝を救ふ能はざりき、カイザルの物はカイザルに歸さる可らず、他家の物は遂に他家に歸さざる可らず、外なる一切物は遂に汝方寸の衷を充す能はざるを如何、汝は何所に向つて汝の救主を求めんとする。茲に至りて残れる所唯一つ。

醒めよ人々、立てよ人々、汝を救ふの鍵は只「爾」にのみ與へられたる也。汝光榮ある人の子よ。

吾人は到底百年遂に死を免かる可らず、而してそは明日をも測る能はざるが故に吾人の此世にあるや、問題は、生存の長短にあらずして其意義に在り、如何にして此短生涯然り實に此短生涯を有意義に過すかにあり、而して意義ある人生とは畢竟最も價値ある生活に外ならざる也、人生の歸趣は價値の進化也、向上也、誰か其價値を附するものぞ。

科學は是が爲に精確なる智を提げて宇宙の幽を探り微を闡くべく進みぬ、戸は遂に破られぬ、伏魔殿は果然開かれぬ、地もゆすらむ喝采の裡に伏魔殿は其本跡を徐ろに現はしぬ「萬有は引斥の力によりて維がれ万象は進化の則によりて動く」動搖めき渡る凱歌は暫し鳴りも息まず、凡ての觀者高く稱へて曰く「眞理は茲に在り、眞理は茲に在り、」と然り是れ或は眞理ならん、果して人生に

價値を與ふるを得たるか、將又、全人格の要求を充すを得たるか。乞ひ問はむ、人生其物を外にして又眞理てふものありや、眞理の權威なるものありや、眞理とは、全人格の要求に根ざして華咲けるものにあらず耶。

花紅柳綠之れ事實也、何故に眞なるか、何故に善なるか、將た何故に美なるか、此れ一に吾人の評價力につなかるにあらずる歟、科學は其所に、事物の冷やかに横はるを知るのみ、とは存在の眞理を教ゆ、其意義に至りては漠として知る所にあらず、宇宙の一切物は來りて一に「爾」の評價を待つ、故に曰く、爾は生きてあらん限り最も價値ある生活を遂げざる可らず而して價値ある生活を送るの前に先づ、一切價値の尺度たる「爾」自身を知らざる可らず、究めざる可らず、高めざる可らず。爾は智にあらず、情にあらず、意にあらず「一個全人格の自覺」也、凡ての物必ず價値を有す、凡ての物皆手段たり只「爾」のみは是れ無價の至寶にして常に目的たる者、一個万物の王者たり。

一個王者の徳、然れども今ある「爾」は能く一切を評價し得る程至醇なりや、至粹なりや、嘗ては「爾」玲瓏一翳を著けざる鏡の如く、澄徹一波を揚げざる池水の如く、物來りて映さざるなく映して眞を得ざるなかりき、然も今や「爾」は如何、文明の潮は逆巻き來りて、其明を蔽ひ其聰を閉ざしぬ、其の智は事物の形式的觀念の貯蓄場たり、其の情は世紀末の過敏に亂る、

唯見る世浪荒く横さまに打てる慾海徒に浮動しつゝあるを。

深沈なる法海は茲にその偉大を傷けられぬ、平和なる「爾」は茲にその尊貴を破られぬ。一度激せし潮は何時その深沈に歸らんとする、一度沒了せられたる「爾」は何時その至醇に歸らんとする。

人よ時代は既に禁園を追放せられてより茲に幾千載、汝は既に成長せり、成人せり止めよ無識の盲動。

時は呼べり、「爾正に自覺せよ然らずんば文明の波に没了せられん」と、

宇宙は一なり、内は外なり、東は西なり、高さの無窮に達する時、厚さの無限に對する時、幅の無涯に達する時、其所に高なく厚なく又幅なし、たゞ一無窮躰。知れよ人々高長厚幅是れ假の世の假名たるを、内外表裏亦假稱に外ならざる也。

宇宙は遂に一躰なり、古今來の三世を一串し遠近彼此を一貫す「爾」の衷の極る所大自然の縁に達す、汝が外物を追うて窮る所忽焉として汝の像を見む、其時「爾」は叫ばん「我茲に在りき」と。

天真の爾、赤裸々の天地と相角立す、完全なる宇宙は此所に生じ、唯一なる神彼處に顯はる、人一度此境にあつて再び濁波中に没す得たる富に光生じ求めし名に香を放つ、何をか嫌ひ、何をか厭はむ。

醉生夢死的生活にありては鏡に映る自己の像を以て、其本躰を見ざるも可也、求むる我と共に走りて、求むる本躰を知らざるも可也、されど心身一度離れて復再來の我なき此の五十年の此身幸にして愚となつて生きずして賢となつて生き、遑々たる不安の裡に住せずして、泰然たる安住の裡に過ごすを得は是れ吾人にとりて光榮の極に非ずや、大覺世尊の生涯、孔子、クリストの一生之れ人類の大標石、彼等の生存は北斗と共に吾人を導くもの、彼等を仰いで向上の階を登るは誠に人の子の特權にあらずや、之れ豈に醉生夢死者流の能く解する所ならんや、

人は須く生くるに足る底の大理想を双手に抱かざる可らず、而してそは唯凡ての源泉たる己れ自身を省みるによりて認むるを得ん、果して然らば汝は必ず「爾」の衷に孟子の所謂「我」万物皆備はる底に於て大なる功徳を發見すべし。

男子豈に空しく死す可けん哉。

汝を救ふは一に「爾」の衷にあり、世界の救も先づ「爾」の救を、待たざる可らず。

願はくは「爾」をして先づ光あらしめよ、先づ光あるを覺らしめよ、然らば世は自ら光を受けん。救の鍵は自ら光を放つて現出せん。

## 自信の價値

### 高宮 儀助

茲に英雄あり。困難は前後左右より彼を侵し、或時は蟠根錯節交々起りて之を所置するの策に窮し、或時は反對者の凶刃に危く一命を捨てんとする場合に立到りても巍然として屈せず、よく自己のベストを盡すは何故ぞや。曰はく他なし、彼に確乎たる自信あり、セルフコンフィデンス「我は、よく斯の如き困難に打ち勝ち優勝と云ふ月桂冠を戴くを得べし」と云ふ確乎たる信念あればなり。

抑々自信とは何ぞや。自信とは自己の天賦の才能を鑑識し之を確持するを云ふ。既に自己の價値

を知る以上は身を處する事決して輕々たらず故に往々世人は之を自<sup>セルフレスペクト</sup>重或は自<sup>セルフコンシト</sup>惚と混同す然れども再考せよ夫れ自重とは、何の根據も無く、たゞ漠然自己を重んずる事にて丁度自棄に對する辭なれば之を自己の才能に頼るといふ根據ある自信に比すれば其間の差違一目瞭然たり又自惚とは自己の才能を恃むと云ふ點に於ては自信より一步進みて實在せる才能以上の才能を恃むを云ふ。されば自信を實際的のものとすれば自惚は正に空想的のものなり。又自惚を以て自信を擴張せるものと解する人有れども、そは謬見のみ、自信も自惚も自己の才能を恃むといふことは異ならずれど、上述せる如く自惚とは過重に自己の才を恃む謂にて、この點に於ては既に實際的なる自信の域を脱して空想界に入り頗る漠然たるものなり。

扱て頃者は日一日と人口増加し數年前までは四千餘萬と稱せし我が日本國民は今や五千萬を越へ、而も年々數十萬の人口増加の形勢より考ふれば將來果して幾億人に達すべきか豫め計り知る可らず。

斯の如きは眇たる日本國に於ける現状のみ更に歩を進めて世界の人口を見よ未開人民の人口の如き殆んど想像的計算に過ぎざれば尙世界人口統計表は十五億五千五百萬人を示せり。以上の如き多數の人類は、この小なる地球上に活動し尙年々歳々人口の増加を來たすため、二物同時に同所を占むる能はざる真理よりして、こゝに競争を生じ適者生存劣者廢滅なる生存競争を生ず。而して人口過増の處分は社會的大問題にして從來殖民或は人工人口調節法など説かれたれど、餘り策を得たりと云ふ能はず、これに就き吾人も意見を有すれば岐路に入るの思あれば他日を期して發

表せん。

さて、上述の生存競争は近頃頗る激烈となり。かつては全米國に擴がりし銅色印度人も生存競争の敗者となりて僅に「ネバダ」全州に散在するのみ、加ふるに年々人口の自然的減少を來たし行く行く全種族滅亡の期至らんかと思へば、同情の涙絶えざるなり。

我が、アイヌ人及び臺灣の生蠻人も亦アメリカインディアンと同境遇に立てるは讀者諸君の熟知せる所とす。

個人に於ても尙然り。この生存競争場裡に臨みて、何等の自信なく、只其日暮しの感念を懷き「どうか成るならん」と思ひて此間に處せば永遠に人後に落ち遂に其身の滅亡を來たさん。

諸君の知れる通り今の米國グレートノーザンレールウエー會社長ゼームス、ゼヒル氏は波戸場の人足より身を起し非難の聲嘲笑の響轟々たるに屈せず西部に大鐵道を布設し偉大なる成效を博せり。氏は一方に於ては非常に忍耐強き人なるが、又非常なる自信を有せる人なるは疑を容れず。自信を有せる人は亦樂天家たり、何となれば、他人如何に云ふとも勝算は其人の胸中にあり、かくの如くすれば、かく成るは當然の事にて愚劣輩の關知せざるは彼等の沒眼識なるによる。何ぞ彼等の言に従はんや。從て胸中頗る光明晴月の感あり樂天の氣常に滿つ。而してこの樂天の氣たるや事業成功上極めて必要なるは言を待たず、故に知る自信は事業成功上に缺く可らざるものにて自信の有無如何により成功と不成功の別るゝ所なるを。

米國の大雄辯家ダニエル、ウエブスター氏曰はく

汝の食ふパンをして獨立の麵包たらしめよ。

人に依頼して生活する勿れ。汝の職業に勵精なれ

天地間恐るゝに足るものなし。

(樂天的處世法一四二頁)

見るべし丈夫大自信を有して此世に處せば廣茫たる天地間の事もその人の自由たるべし。自信の價値も豈に偉大ならずや、

世の青年輩を見るに薄志弱行にして何等の自信なく一難にあひて意氣沮喪し或は酒色に沈溺して前途を誤る者少なからず。彼の投瀑青年の如きも哲學的影響を受けたる爲めとは云ひながら一方より觀察すれば餘りに意志の薄弱なるに驚かすんばあるべからず。

我が有爲なる四高の青年諸君よ。願はくは大自信を有して國家の爲め社會の爲めに大に盡されんことを望む。

## 犬

### 田中無限

雪がチラ／＼降る日であつたように記憶する。學校の歸り途に、石崎から赤(犬の名)の子を一疋

貰らつて、懷に入れて歸つてきた。

赤は此冬四疋兒をもつたが、一疋はもう貰はれて行つてしまつた僕は眼のあかぬ中に、札をつけて皮の小さい頸巻をさせて、鉛の鈴をつけて置いた。勿論男犬だ。黒の班の配合はよく行き渡つて艶々しい毛に、一種の美を添へてゐた。鼻のあたまでは白ろかつたが、熊で云へば、月の輪のところか、黒と白で本統によく配合されてあつた。豚の兒のやうに、ふく／＼した<sup>かた</sup>絆を嬉しそうに動かして母の乳を捜るときは、犬か喜んで囁く聲が總身に泌々と感じて、幼ない時の記憶が當時繰り返された。今日懷に入れて、此幼ない西も東もわからぬ、餌も搜り得ぬ犬の子を自分の家へつれて歸るまでは毎日學校が放課するとすぐ水鼻液<sup>みづはな</sup>をすゝりながら石崎の家へ驅け込んで、チリン／＼となる鈴の音を聞いて赤の懷に抱かれてゐるブチを見るのを何よりの樂しみにしてゐた。小さい犬小屋の藁の堅いのは寒からうと、叩き藁を祖母から、ねだつて貰つた二錢を投じて買つて来て、敷いてやつた事もある。今日はもうブチをつれて行こうと決心して石崎の家へゆくと、石崎はもう粥なら大丈夫だと云ふし菊ちゃんとおばさんは、まだ二三日置けと云ふ。然し僕はもう慕しさで可愛さで、今日はどうしても家へつれて歸り度くてたまらん。成程石崎の家に置けば、毎日の放課の時間が待ち遠しい、日曜には愛はしい戀人もまつてゐてくれるかもしれないが、子供心には一も二もなく早く自分のものにし度くて、し度くてたまらなんだ。菊ちゃんやおばさんの止めるのも聞かずに、連れてゆく事にして、赤の懷がら、そろりと取つた、赤が怒つて食いつこうとした時には、もう僕の懷にブチは靜かに眠つてゐた。母の暖かい懷から放れて、寒むか



らうと思ふてシャツのボタンをはづして肌につけて上からそうと著物で蓋ふて、手をさへて外套を菊ちゃんから、著せてもらつたとき、ヒン／＼とないた。ねんねでも抱えてゐる母のやうに本統に可愛いかつた。寒さに赤くなつた左の手に書物の風呂敷包をもつて右の手で静かに胸のブチを外套の外から抑へて、雪を踏んで石崎の黒い門をくゞつて松原へ出たとき、玄關に見送つてゐた菊ちゃんか

「鳴いたら、持つていらつしやいな、御粥をあけても食はなかつたらすぐね、つれていらしやいなよ」

すき透る聲は、繪に見る常盤御前よろしくの僕をしばし松原に行き惱ました。

「え、」

一寸振り向いて松原の雪道を辿つて家へと急いだ。菊ちゃんは石崎の姉さんで、當時十歳で僕より三つ少なかつた。色の白い、おさげに投げた髪は飽く迄黒く、背の高い細形の兒であつた。松を吹く、冬がれの風は寒いにきまつてゐる。狂ふ音から何んもなく物凄、昨晩から降り積んだ雪は風にふり落されて、時々僕の頭の上に妙な響き、松の枝を渡る、物うさそうな雪の、なだれが濱からぐる、時々嵐のあい間／＼に聞える。白紙の上に幾本もなく鉛筆を立てた、間を縫ふてゆく蟻は、あちこちと彷徨するだらう。一本の細い道も雪に埋れて、白紙のやうな樹の下を、黒い幹の鱗を逆立て、突き立つてゐる。松原は中々長い、毎日今頃ブチを見て辿つた此道、今日に限つて中々盡きぬ、心の置き場所が違ふのだ。切な思をブチに移して、快をやつた後は我家を思

ふ心に燃えてくる。これは昨日までの経歴だ、今日は其思の目的物を身につけて、松原をゆくのだから、松原は長い。さうにかこうにか松原の雪道を踏み終つて山蔭の道に入つた。追ふてくるかのやうな松吹く風は東に聞える。山の彼方ちかかの日本の波の音は雷のやうに底に響く。とほと心か身に添はぬ感を抱いて、僕は山蔭の道から、やう／＼街へ入つたころはもう町々は灯時であつた。風あたりの弱い街の中を歩み出してからブチの動くのを感じた。胸の暖かいのを感じた。手と鼻は滅法に冷たいのを感じ出した。家はもうぢきだ、近よると妙なものだ、色々の事を考へ出してくる。父は無頓着だが母は犬を好きだ、然し口癖のやうに近所の迷惑だから、迷惑だからと平生云ふて居られたのだ、まだ父母の耳へはブチの事は一遍も通して置かぬ、もしや叱れはしまいか、と思ひ出すと可愛さと怖さどで無意味な思をつゞけて、もう家の門をくゞつてゐる。

雪が降つてゐるのに氣がついた。

玄關から歸ろうか、厨房の方へ廻つて、おそよ婆さんに、見せようかと一寸躊躇したが玄關から、入る事にした。自分の家だが今日は何んだか嚴かな氣がしてなりなかつた。敷石に足駄の雪を落して、新しい格子戸を開けて、

「只今」

確かに常のやうに云ふた。奥から例の如く、おそよ婆さんが出てきた。

「お歸りなさいまし、お寒いことでしたらう」

婆さんは外套を脱がせに、近かよつてくる。僕は依然として常盤御前よろしくの姿で突き立つてゐる。書物の風呂敷包を敷臺に置いて、後をむいて、外套を脱がして貰らつてから、懐から、静かにブチを出して。両手で抱えて眺めた。ヒン／＼と、ひもじそうに鳴いた。

「オヤまあ、坊ちゃん、それお見せなさい」

婆さんは驚いたが。犬が好きらしい口吻であつたので僕は元氣づいた。

「いゝブチだろう」

両手でブチを渡しながら、

「お母さんは」と聞いて見た。

「奥に待つておいで、す、今日は遅いつて心配していらつしやいますよ、早くおいでなさい」  
婆さんは、愛し<sup>いと</sup>そうに抱えてる。僕は書物をもつて、御座敷へ行つた。母は縫物をしてゐる。

「只今」

例に依つて例のやうに挨拶した。

「遅かつたね、道草してゐたの」

母は聞いた。

「いゝえ、寒むかつたから、石崎さんに遊んできました」

単に遊んできたと言ふた。

「寒いでしょう、室へ行つておあたり」

僕は室へ歸らうとした時に、向ふの襖があいた。僕は父が歸つたのかしらと思ふて廊下を傳ふて歩み出すと、

「まあ、可愛いこと」

母の感高い調子が洩れてくると、

「可愛いもので御座んすの」

訛のある言葉は確かに、おそよの聲で、こう聞えた僕はもう占めたとと思ふた。可愛い無垢のものには敵のあろう筈はないのである。

此話は僕のまだ高等小學校に通ふてゐたときの事だ、或は記憶の相違はあるかもしれないが、今に考へても深い印象と感慨を催させる。興にふれ、感に訴へられるまゝに話してゆく、當時の感興がつくれば、話は縁が遠くなる。長い／＼記憶を辿れば盡きぬ譯だ。

(中)

僕は明治二十三年の寅歳の生れた。そこから割り出して、ブチを虎と命名した。

「虎ですが、坊ちゃんと同じに喧嘩好きになりますよ」

おそよ婆さんに、命名した日、虎を抱えて厨房へ行つたら、こんなことを云ふて冷語かされて来た。成程考へて見ると僕は毎日のやうに喧嘩して来た、生疵の絶え間がなかつたのだ。石崎の菊ちゃん泣いて諫めてくれたこともあるし、おそよ婆さんが加勢してくれた事もある。どうせ犬を持つたら、他の犬にいちめられるはあまり感服せぬ。町内一の腕白者が鎖につないだ以上は町

内一の強い犬にせねばならぬ。おそよ婆さんに願つて煮て貰つた牛肉の雑炊を日に幾度となく犬小屋へ持つて行つた。犬小屋は厨房の物置に置かれた、トラがもしも猫や他の犬に、人のぬないどき、いぢめられないやうに、又寒くないやうにこんな處へ持つて行つたのだ。それに僕の室から、すぐそこだから至極僕の満足を得るによかつた。

日曜の午後だ、雪は降らぬが寒い事は北國の二月を遺憾なく表はしてゐた。炬燵に少年界を讀んでゐると、おそよが石崎と菊ちやんが來たと云ふてきた。玄關へ飛んでゆくと誰れもゐない。方々捜し廻はつたが居なかつたんで、おそよの室へその不平を訴へにゆくと、おそよの室の炬燵に石崎と菊ちやんが、おそよの話聞いてゐる、おそよに不平を鳴らすことより菊ちやんがゐたので嬉しがつた。おそよは虎の命名の事や、家へつれてきてから苦心して育てゝゐる事を聞かせてゐた。菊ちやんと石崎は嬉しそうな顔をしたり心配そうな顔をして聞いている。僕も釣り込まれて、不平を云ふ元氣もなく炬燵の人となつた。

「よかつたはね、私心配してゐてよ」

泌々と菊ちやんは云ふた。犬でも自分の家から手放すと可愛いものだに見える。

「家中が可愛がつてね、今ぢやもうトラ〜と呼ぶと尾を振つてくるよ」  
僕も喜ばしいので得意になつて饒舌つた。

「何處にゐるんだ」

石崎が聞くので僕が案内して、昔に變るトラを見せてやつた。

「大きくなつたこと、仕合せだわ」

菊ちやんが頭を一つ撫でた。トラは尾を振つて菊ちやんの足に戯れ出した。寒さを忘れて三人で散々、弄んだので牛肉を叩いてやつて、室へ返つた。

「大きくなりましたでしょう」

おそよが笑つて云ふた。

「大きくなつたね、一番よいのになつた、赤よりよい」

石崎は頻りに感心した体ではめた。三人でおそよの室を出て僕の室へくる。障子をあけるとパーカー

大きな聲で、大きな人がのそりと出た。父だつた。

「ハ、ハ、ハ、ようおいでたね」

父は室を出る僕等は室へはいつた。菊ちやんは怖かつたのか僕に確かりつかまつて後にゐた。其日は三人で繪をかいいたり雙語六や、人形角力をして遊んだ。早夕飯を戴いて石崎と菊ちやんは歸つて行つた。

トラは日一日と大きくなつてきた。母親の赤は英國のポインター種なそうだが、トラは父親に似てゐるのだらう。顔や貌は似てゐない事もないが、第一色と毛の種類が違つてゐた、赤のやうに長い房々した、巻いた毛ではなかつた、洋犬の血統は血統だらうが、毛の長さは短く密生してゐた。耳は垂れて眼は黒褐色でころ／＼肥えてゐた。大きくなるにつれて瘦せたが足は細く、尾

は常に巻いて居つた。兎に角トラ〜と呼べば危いながら、トボ〜と走つてくる位までになつて、近所の子供にまで、トラ〜と云ふて愛さるゝやうになつた。或時は無邪氣に吠える事もある。僕の愛は益々加はつてきた。おそよ婆さんなんか買物にゆくときは屹度鎖を握つた。つれ〜ゆくと時間がかゝると口説きながら矢張り出るときは鎖を棄て〜ゆかぬ。

僕もトラが來てから、石崎の家はあれから一遍も寄らぬ。もう、トラを懐にして松原を通つてから、かれこれ一ヶ月になつた。可愛いトラは此一ヶ月の後に悲惨なる運命を齎らして來た。

今に思ひ返せば、かへす程残念さと口惜しさで、可愛い虎の姿から、飛ぶ容様、尾をふつて食をねだる其眼の光りや、甘いるやうに吠ゆる、吠え方まで一々、こゝろ眼をどちて想ひ出すと、知らず〜に涙が浮んでくる。少年の時如何に深く、此愛が小さい胸に彫り込まれたものか、廿歳近い今に猶こればかりは、少年時代の心の曲者として忘れる事が出來ないのだ。

何事にかけても少年の思は、一徹だ、思ひ込んだらそれに身を委ねる、利害の關係がどうの云ふやうな事は少しも心に起つてこぬ。犬を愛すると云ふ觀念が當時起つてゐる時は、石崎は親友だし、菊ちゃんも子供心になつたかしかつたが、犬の方に今から見れば愛が傾いて居つたらしい。

學校から上つて來て自分の室へ靴をほうり込んだまゝ、夕食の催促をうけるまで、物置で虎と遊んだ、時にはいくら夕飯の催促を受けても、食卓へ行かんで母に叱られて、飯を食はせぬと云はれて、我儘と意地で飯も食はずに、室の中へ虎をつれてきて、眠つたがるのを、此方から挑ん

で遊んだ事もあつた。其時だおそよが、そつと、すしを持つてきて置いて行つたので、意地も飢にはかなはず、おそよを感謝して食つて寝た。これ位可愛いかつたから、虎の來ぬ前までは玄關で、おそよに——お母さんは？——と聞くのを例として居た僕が、虎がきてから、虎は？——と聞くやうになつたと云ふて、おそよに幾度となく笑はれて、僕の話が出る毎に、おそよはこの事を持ち出すので、遂に怒つて、或晩、おそよ婆さんの居眠りして居るとき黒々と墨で髯をつけてやつた事もあつた。而して母から鞭を頂戴した。

子供心の一徹の愛は一心不亂に、一疋の犬の虎にそゝがれたものだ。尤も兄弟とてない僕は情に熱し易かつたかもしれないが、子供心の愛もこゝ迄熱すれば、今から思へば虎の事なら何事も辭さなかつたかもしれない。

僅か一ヶ月の間に僕の事をこんなに熱しさせた虎が身の上に容易ならぬ事柄が持ち上つたものだから、僕の心配と落膽は熱した度と正反對の結果に烈しいのは勿論の事である。

この落膽させた虎に對する悲惨な運命とは何んだらう、今に謎のやうになつてゐる。解決し難い原因で宇宙の何處へか持ち去られた事だ。宇宙は廣い、色々の學者が駄法螺と屁理屈で解決しようとしてゐる其水のやうな空氣のやうな宇宙の一方へ隠されたのだから、今に僕には解決し難いのだ。

虎の形骸は、當時正しく、空氣を呼吸する力もなく、四肢はこわばり、眼は閉ぢて「生」の面影はなかつた。即ち世の所謂「死」に到達したのだらう。然し謎のやうに解けぬ死の原因は如何なる醫

者も診断し難い。如何なる法律家も訴へる餘地がない。如何なる文士も此條は書く材料を見出されぬ。實に虎の死に到達した原因は不可思議だ。人は誰れも恐らく知らぬだろう。只一人運命と云ふ人が知つてゐるのだ。運命は何處にゐるか僕はしらん只毎日其人の厄介になつてゐるのだと云ふ事から考へると、虎と運命とは同一人であるらしい。従つて僕と運命とも同一人であろう。虎は運命と云ふものに中毒したのだ。と今に解決して置くより外に方法はない。

謎は容易き難いから、更らに當時の記憶に移つて、其死態しじたま當時の事を話そう。只虎は謎の死に運命を委ねたのだと一寸覚えてゐて、貰らば、其當時の事が謎の死と、世に顯はれた死態との區別がつく事だろう。

## (下)

今日は朝から雪が降つて、滅法に寒い。日曜は十一時起きと相場のさまつてゐる僕は、矢張り起きたのが十一時少し前だった。

衾の中で幾度となく、起き上つて坐つても見たが矢張り寒い。又寝た。おそよが雑巾がけにきたのも知つてゐたが眼を閉ちて眠りを装ふた。日曜は十一時起きと定期になつて居る僕を、起しにきてくれるものもなかつた。又起しにきたとて起きぬだろう。寒いので猶更床の暖かさを棄て難かつた。子供の行動も矢張り理屈と情に支配されてゐるものだ。雪が降つてゐるのか、至極静かである。室の中は依然として暗い。

手水鉢の薄氷を握つたときはとび立つ程冷たかつたので、お座敷の火鉢にしがみついた。側にゐる母が笑ふて見てゐられる。

「子供と犬は雪が好きだのに、此子は相變らずさむがりだよ」  
遂に云はれた。黙つて、しがみついてゐると、おそよが

「坊ちゃん、御飯!!」と云ふて、こいつも笑つてゐる。十一時の定則を今更に思ひ出して笑つてゐるやうだ。

「ウン」と云つたきり、室へ駆け込んだ。大好物の豆腐の味噌汁はあつかつた。おそよは側に櫃を擁してゐる。櫃からは湯気が立つてる。

「坊ちゃん日曜はお楽しみですね」

おそよは、愛憎がよい。僕は味噌汁を飢えてゐるので黙つて啜つてゐる。何んでもウンくと云ふてゐると虎がヒン／＼と飢を訴へるやうの聲がした。忘れてゐた虎が心の中に吠え出した。

「虎に飯をやつたの」

御椀を置きながら問ふた。

「えい、やりました」

おそよは物置の方へむきなをつた。

「どうしてなくんだろう」

早く會うと飯を急いだ。——御早——と云ふんでもない一疋の犬が何故にこんな戀しいのだらう。

婆さんは又僕の方をむいて云ふた。

「坊ちゃんにお目にからんからなでしよう」と云ふて微笑した。

僕もそうだと思はないでもなかつた。僕が思ふてゐるだけ、犬も畜生とは云へ、幾分かは思ふてゐるだらう。こゝろ云はれると猶更早く虎に會ひ度くなつた。飯も粒のまゝに、ほうり込まれたかもしれない、思ひ出したら子供は一徹だ。勿々にして物置へ飛んで行つた。

外は雪で眩しい程明るい、茗荷畠に積んだ雪でお隣りの高ちやんと近所の君ちやんと雪玉を造つてゐた。竹の戸をわけて僕の家の中に侵入してゐたのだ、僕が物置へはいる時この事を認めた。常なら叱るんだが虎の愛にひかされて、叱る氣もなく一途に物置へ飛び込んでしまふた。高ちやんと君ちやんとは僕の姿を見ると又叱られる事だろうと思ふたのか、戸を閉ぢて自分の家へ逃げこんだらしい。僕は物置の中でコソコソと雪を踏み音を聞いたが、虎は無上に喜んで戯れて来た。實に可愛いものだ。頭を撫で、抱き上げた。今朝火鉢に噓りついた寒さは依然として變りはしまいが、今は全く忘れてゐる。虎を抱えて、物置の戸をわけたら、隣りの女子おまが又茗荷畠の雪を握つて、踏み荒らしてゐる。

「誰だ」大聲で怒鳴つた。

高ちやんと君ちやんはわはて、家へ逃げ込んだ。僕は立つて見てゐると、君ちやんが暫くして

斥候に一寸顔を出して。又引き込んだ。又一寸顔を出して、今度は、

「馬鹿ッ!!」と云ふて又引つこんだ、しばらくして二人で顔を出して、一緒に

「犬馬鹿ッ!!」と云ふたので、僕は虎を下へおろして、

「阿魔ッ子」と云ひなり、竹垣で、雪を蹴つて行つたがゆく事が出来ず、空しく家の中を覗いた、二人は奥深く逃げて行つた。暫く立つてゐたが、ヒン／＼となく聲に又物置へ歸つた。二人は又出て來たらしい。囁く聲がした。

虎を相手にチン／＼だのワン／＼だのをさせてゐると母屋で母が、伏見さん(友人の名)がきたと呼べられたので虎を犬小屋の藁をしきなほして入れて、

「さよなら——と云ふて物置を離れた。母屋へゆこうとしたら

「犬馬鹿!!」又二人が罵つた。高ちやんと君ちやんだ。

「野郎ッ!!」と云ふて立ち止まつて睨めて、追ひかける眞似をしたら、二人はキャツ／＼と云ふて奥へ逃げ込んだ。雪はちら／＼と、雪催ひしてゐる。

僕と高ちやんとは毎日犬と猿である。又泣かしてやるのが面白ろいやうだ。

母屋へはいつたとき、犬が退屈そうになく、例のヒン／＼が聞えた。後で思へば物置を出るとき、云ふた——さよなら——は、あれが虎と話をした最後の言葉であつたのだ。

僕は、伏見さんと紙を買ひに行つて、石崎の處で遊んで夕方漸く歸つてきた。菊ちやんは音楽會へ行つたとかでゐなかつた。歸つて御飯をいだけいたらもう眠くなつたので床を延べてもらつて

枕をして、眼をつぶつたら又物置の方でヒン／＼となく聲がしたが、起きて見ようと思ふたより早かつたか眠の支配の中に、陥つた。昨晚の僕の夢は平靜であつた。

靴をかづいて學校へ行つて、歸つてきた。これは平生の通りだ。學校へ行つてゐる間は毎日同じ事を繰り返すのだ。常のやうに母の座敷へ——只今——を云ひに行つた。

これからが、先きに記憶して貰つた謎の解決の表面である。今母から始めて今朝虎が死んでゐたと愁然として聞かされた。僕は信じなかつたが、母があまゝ眞面目なので少々、嘘だ／＼の取消しも本統げになつてきたので、泣き出しそゝな心持で、ひきさがつて室へ靴を、ほうり込んで厨屋へ行つたら、おそよが僕の顔を見ると

「坊ちゃん虎が死にましたよ」と云ふて、シク／＼あの大きな痘瘡面から涙が油のやうに泌み出したので、本統か嘘か確かめぬ僕も、此處でもう泣き出した。何んだか悲しくなつたのさう。泣きやんで僕は物置へ駆け込んだ。

物置は窓がしめてあるので暗い。大小屋には常になく、戸がしめてある。急いで戸をあけたら虎は靜かに眠つてゐる。相變らず罪のない無邪氣の顔だ。これで死んでゐるのさうか。さはつて見た。

あゝ、冷くて、固くこわばつてゐる。其刹那に子供の弱い能力で恐るべき死を見出した。忽ち涙が聲と共に出てきた。威の強い僕は喧嘩しても叩かれても聲をあげて泣いた事のない此少年が遂

微かなから聲をあげて泣いた。僕の生涯で恐らく珍らしい泣き方であつたらう。それだけ悲しみは深い、獻<sup>すくなく</sup>して、茫然立つてゐると、母が來た。僕はもう、此戀人の死態を再び檢する氣はなかつた。小舎から出して見る氣もなかつた。

「どうして死んだんだか本統に不思議だよ、泣かんであきらめなさいよ」  
母の聲もおろ／＼であつた。

「本統にどうしたんでしよう」

こう云ふたのはおそよだ、おそよもゐる。鼻聲であつた。僕は悲みを去つて泣き飽きたと思ふてもどうしたのか自然に泣く。色々母になだめられて僕の室へ歸つて、机の上で限りなく泣いた、終りには無意味に泣いたやうだ。悲しい觀念はなく只涙ほい。

どうしたのか此日は雪が晴れて、夕の色は美しかつた。鉛色の空も赤みを帯びた雲が、眼の中の赤線のやうに走つて居つた。此夕の色の美しいだけ僕の胸には此夕が深く胸を去らぬ。寂寞と美を包んだ其日／＼の夕方の景色が如何にこれ以後に於て僕に影響するだらう。

この夕方だ。おそよが、虎の柩にと蜜柑箱を一ツ買つて來た。一ヶ月あまり、虎が起き伏した小舎から、あの可愛らしい虎が固い冷たい遺骸となつて、蜜柑箱の中へ移された。箱の底には、僕が嘗つて、虎がまだ石崎にゐたとき買つてやつたやうな軟かい藁が敷いてあつた。虎がもし生きてゐたら、どんなに喜ぶだらう。今は冷えた体には暖かみも感じまい。小舎から箱に移されるとさ死んだ虎に始めて、泌々とお目もじした。もう此時は何事も涙であつた。

あの艶のある毛は、かすれて光はないが手と足は屈めて、眼は閉ぢてゐる。どう見ても寝てゐる姿だ。只冷く、固くこわばつてゐるばかりが相違のある所で他はそつくり生きて寝てゐる姿だ。これで死んでゐるのかと思ふたが死と云ふ思でもう悲しかった。

世がうす暗くなつて雪の白さが彌々判明になつてくるころ、おそよは箱を風呂敷に包んで、手に提げて、寂しく海へ葬りに行つた。日本海の怒濤は如何なる態度で、死の遺骸を迎へるだろう。僕は門邊で再び泣き出した。母も愁に閉されて静かに昇送つた。

此日から夜は冬の寒さをひどく感じ出した。

此晩だ!! 此晩だ!! 今に忘れぬ床の中に

「虎は若死だつた」と肺肝から吐息と共に只一言云ふた。夜着は涙でしめつてゐる。永劫に言葉は短いが此言は忘れぬだろう。

今にこの記憶を辿れば綿々として思の糸は繰り出される。虎の死は家内とした家の人に嘆かれたばかりでなく、石崎は本統にしなかつた。

菊ちやんは聲を立て、泣いた。

死は謎だ。死は謎だ。どうして死んだのだろう。寒さと飢だろうと人は云ふた。病氣だろうと人は云ふた。否々運命だ。

死は謎だ。

要するに解決は運命だつた。

死は運命に相違ない。十餘年を通過した今日の僕は、此悲しい記憶をくり返すと共に、當時の人であつた。しかも、どうしても忘れぬ菊ちやんも今から二年前の春、謎の人になつた。謎は女の性格ばかりでない肺に死んだ菊ちやんの死にやうも主觀的に見れば謎だ。運命と一致して、死んだ虎は早かつた。菊ちやんは、少し晩かつたばかりで、結極死は人の間を絶えず襲ふてゐる。虎の死と菊ちやんの死で今日の僕は性格に確かに、不平均な發達を來してゐるのだ。犬の愛も人の戀も行く道は同じだ。

「虎は若死だつた」

「菊ちやんは虎より少し遅かつた」

この二語は今でも胸に時々思ひ浮べる。思ひ浮べれば限りなき當時の感慨と経過のあとが、それからそれへと移つてゆくのだ。運命は菊ちやんも奪ひ去つた。其悲は今に新らしくて辛い。

—— 事實は十年前の事である ——

(終)

月

伊多嘉儀

(一)



たらちねはかゝれどてもしもなでづやありけん黒髪を跡なく剃りて都をよそなる嵯峨の政勝院に後世を念する一人の尼あり、今は蓮の名のゆかしくも朝な夕な事務めまめなれば誰しも天晴來世は淨土の人と思ふらんもその世にありし頃は名もつやめける紫と呼びて紅粉薫香に身をやつし京なれども人の目をひくばかりなりしがそれに群れ來る胡蝶の中に執念く艶文よする士二人ありけり、

何れに立てん松の操のはかなや時ならぬ木枯に落花雪と亂れてとてもこの世には立てん顔もなしとて母たる人を伴ひてこの政勝院が尼となりしが母はあくる年寄る年波とこの世ならぬ業とに心も疲れて春の泡雪と消えて未だ一月とはたぬ中に蓮は誰の胤とも知れぬ翠り子を生みて浮さは尼の手に餘る計りなり、かくて女の盛はいつ早く過ぎて日頃誦する讀經の聲もみだれたり、

## (二)

光星一夜地の一角に落ちて狐狸時を得顔に漂ふ、今や蓋世の英雄秀吉は病に死して餘類また振はず、正にこれ光茫その光を失ひて群星暗天に輝き一朶の雲の龍を呼ぶの時ならずや、文祿の夢いと淡く消えて世は慶長となり家康はこゝに宿昔の渴望を醫さんとして手に唾して立てり、沙上の樓閣は傾き易し、基堅からざれば長久の謀なし難し、かねてその驥足を屈して大いに伸びんとせし家康は臣下の心服を得るに心を用ゐたりき、  
今や秀吉は逝きて大坂方に集まる雲の去來暗愴として雨か雪か未だ知るべからず、關東の空萬里雲はれて瑠璃の一天拭ふが如し、

家康はまづ大坂方に對しての重鎮としての京都の鎮護に誰をや置かんとその人選に心を碎きし末遂に鳥井元忠こそその人として一日彼を傍近く呼びていふやう、乃公卿の精忠無比なるを思ひて今度卿をして伏見城の守りに當らしめんとす、大坂方を亡ぼすはたゞ一擧手一投足の勞にすぎざるも弱虫苦めて却つて刺さるゝも得策ならねば今暫くの餘脈を保たしめんとす、石田等の輩何時事を擧げんも知るべからず、事急なる時は敢えて乃公の命を待つつの要なし、卿の心に任せて戦へ、卿の精忠をれよく必ずや乃公の意にそはんとに元忠は身に余る名譽を荷ひて堅く決する色を面に表はしてその前を退けり、大雨將にいたらんとして風堂に滿つる伏見城に一門を集めてさて上座に高く構えし鳥井元忠咳一咳して叫ぶらく、主君より元忠に伏見城を守るべしとのその仰せは元忠一門の至大の榮譽たり、この上はたゞ身命をなげ打ちてもこの城を守り堅く大坂方を防ぐべきなり、元忠今は餘命幾程もなし、たゞ汝等一同の助力によりて潔く元忠の後年を飾らんとす、いかにくといへば固より二心なき一門の事として深くその仰せをかしこみてやがてめぐる盃にくも酒の香も色もいと高し、  
天下の機運は漸く熟し風聲鶴唳にも心ゆるさぬ伏見城中の兵者共が築き上げしその城は蟻蜂一匹も逃るべからずなりぬ、

## (三)

慶長五年夏七月十七日夜のくれつ方より伏見城下は東に西に大火起れり、漲る雲烟凄く天を焦し地を拂ひてこゝ地獄下界の有様をまのあたり見るが如し、これ元忠が籠城の策として殊更に火

を放てるにてこれがために伏見の町は一夜の中に灰燼となりたるなり、居待の月は燃ゆる町の火に烟に薄暗く空にかゝる十七日の子の刻に鳥井元忠は緋緘の鎧きつとひきしめて嫡子新太郎忠政を従へて本城の大廣間の上の座にとつさり座をしめて一堂に集まる家人郎黨數百人を睥睨し「明日とはいはす今夜の中にも敵の寄せ来るべければ各々その本分を盡すべし、見るが如く多からぬ味方なれば此處彼處と助け合ふ事叶ふべからず、たゞ己の守るべきを守れよ、今生に於ての汝等との見參これを限りとす、いざや共に最後の酒宴を開かん」といふ言葉は一々聞く兵者共は胸を刺さるる心地してけり、

飲むや騒ぐの酒宴の様はとも明日知らぬ者の所作とは覺えざりき、

どかくする間に明け易き夏の空東は紅に染みし頃は町も大方焼け終て上る十八日の旭日老松にかゝるほとり老將軍元忠は一人力なくその下にたゞすみたり、

生々の徳を備ふる大空の下に生れし人間なれば武士とはいへ誰か捨つる命の惜からぬ事やある、さるを見限り主のためと早くも北南西東各々その部署につきて敵や遅しと待ちたり、

日は千古色變らぬ城守の堤上の松にかゝりて遠く狼火は上りぬ、城内は寂たり、元忠は城樓に上り床几に軍配團扇もてよれり、風なし、空はれたり、

## (四)

備はなれり敵早く御參なれど待つ鳥井勢、一矢に屠らんとあせる大坂勢、何れか龍、何れが虎、

慶長五年七月晦日九萬三千七百人よりなる大坂勢夜の暗に城を巻き込みて蟻一匹も城を遁がすまじ、城中の者は一人も残さず打ち殺さんと猛り狂ひし同勢軍馬の嘶ぎをひそめて敵は如何にと待ち設けたり、

今や遅しと待ち焦れたる鳥井勢、明くる八月朔日の夜まだきに嘶く敵の駒を聞きとがめて早くも銃丸を送るれば矢繼ぎ早やに弓をひくもあり、皆これ一騎當千の勇者、その戦の勇ましき、

いかにせん多勢に無勢の鳥井方の旗色振はずなりしも亦詮なし、年寒うして松柏あらはる、さはれをもあらはるる松柏の数は幾ぞぞ、

吹く風の冷たきに堪えかねて落葉幾片秋をかこつは世のならひ、酒宴の時こそ頼母しげなる言の葉もいひつれ漸く城危うしては己が一身を計る不貞奴の出づるぞ詮なき、

八月朔日の戦酣なる時に當りて本城に火をかけたる者あり、敵勢さへ凌ぎかぬるに今かゝる返忠の者いで、はこれまでなり、

「元忠の股肱と頼む兵百三十八人は見る間に血烟の中に斃れて残るは手勢僅かに四十八名とはなり、この手勢もて雲霞の敵を守り味方の返忠の者を防ぐは到底元忠の勇その謀を以つてもなし得べきの業に非ざりき、どかくする中に城愈々危うく見えてければ生き残りし家人郎黨元忠に勧めらるる最早や城を支ふる術もなし御自害あるべし」

ど、かねて決せし元忠この時に及んで何條慮すべき、からくと打ち笑つて答へらく「いやいや汝等の勧めを聞きて死ぬまでの元忠ならず、今は思ふ旨あれば自害は暫く思ひ止めん、老い

の身に傷手多ければこの上のかけひきは自在をかくべけれどもいざこれよりこの世の最後の軍して汝等に見せんぞ」とて緋緘鎧に黄金作りの鍬形打つたる兜の緒をしめ城をいで當るを幸ひと若年より鍛へに鍛へし腕もて振ふ鎗の切先き照る日に輝かして敵勢にわり入る様の夜叉もかくやと道開かぬはなかりけり、

當るを拂ひ障るを打ちて數十人を束の間に斃せしが目に餘る敵勢のつきん果もなければ空しく荒れ狂ふ中に大坂軍の足輕大將雜賀重次の太刀先きの露とは空しく消えてけり、年積つてこゝに六十二、千軍万馬の間に鍛へし元忠の身はかくもはかなく足輕大將のために恨みを吞みて斃れしがこれより伏見城は見る間に燃ゆる砲火につままれて西方軍の圍の聲天地に伝よめきて血烟漲り城樓やけ老松さげ人馬斃れ濠はあけに染み石垣は肉に飽きて無慘や堅城と誇りし伏見の城も八月朔日のくれつ方には見る影もなく荒れはて、照る月もなく鳴く虫もなく寂然として城さびたり、

## (五)

士は己を知るものゝために死すとかや、片田舎の草深き草庵にてはしなくも捧ぐる白湯數杯に秀吉に拔んでられし石田三成、今や主家漸く傾くに際してたてん忠義の道はたゞ一條と秀吉の薨せし後は幼主秀頼を助けて身を粉にしても骨を碎きても豊臣家を元にかへし六十余州の民草をして秀頼を天晴の主君と仰がしめんと遂に家康の關東に忙がはしきを見計らひて兵を擧げしがこれが最初の手合とまて先づ伏見城を攻めしなり、兎角の事なくして伏見城の落ちしどの注進に及びて三成手を打つて喜び「これを物初めよし」とてかはらけを取りての酒宴を催せしが猶ほ使を味方に

に送りて其の功を犒ふとて灘波江に取りし鮮魚十幾臺に伊丹の酒幾十樽を添へてこれを賑はしけり、勝ち誇れる大坂軍は今や酒肴の馳走を得て月三更に至るまでも露天の宴を張りて喜びつゝも皆「物始めよし、いざ鳥井が頭をかけん」とごよめきてあくる日は元忠が首を京橋にかけたなり、京橋は京にて最も人の往々來るさの繁き所なり、そこに幾百年を経たりけんと覺しき老柳二株立てり、幹は老い朽ちて洞穴怪やしき形しけるが夏の盛りなればふき出せし若枝いと茂り合ひて吹く風に動く様も晝なればさすがに足とむむる人もなし、

鳥井元忠が首はその二株ある柳の下に曝されたるなり、雨に曝され風に梳られて目をそばたて、見るものもなければましてや深更老犬肉に飢えてその下に漂ふを知る人はなかるべし、驍將の末路又哀れる哉、

## (六)

稻にみのりせんとて閃めくてふ稻妻に盆を覆へすが如き雨に天地もさけん計りの雷、夜は未だ成の刻なれども絶えて道行く人もなし、ましてや晝さへ人の通ふ事の少なき京橋あたりは今は漂ふ犬もなし、

今しも天の一方よりひらめき渡りし稻妻の一片にちらりと見えしは京橋々上に動く人の影なり、この深夜にこの雷雨ある日に伴とてもなくこゝら漂ふはそも夜叉か、非ず二度と輝きし電光にはしかと人影とは知られけり、

降る夕立の降りつくさば晴れて後は涼しき夏の月、

子の刻に至りて電光收まり大雨やみ風死して磨き出でし十三日の上弦の月は流るゝ加茂川に寫りて千波万波黄と染み岸に立つ柳を照らしては葉末に結ぶ露の玉あざやかに滴々としたり落ちては玉を拾ふべし、通ふ人影は早やとたえて死せるが如き町並み千家万家そとの音もなし、柳の下にひそみし夜叉と見えしは顔白く頭は青一髪も残さず剃りて無絞の墨染の衣をつけし尼なり、右手に珠數つまぐりつゝそこに立ち空打ち眺め思ひに堪えかねし様して呆然と佇めり、世を捨てし身の今更の述懐もをこがましけれども言ひ甲斐なきわが身かな、武士の情をあくまでもうけつゝも秋毫も酬いかねて今又その後世を葬らんとせめても首ばかりにても得んと思ひしをそも犬狼のわざかそれさへ見えず、空しく残る血痕の点々たる杭、生前の洪恩をかへす事もなくてこの様とは女とはいへ尼とはいへ餘りの不甲斐もなき、捨てんこの身は惜しからねど後に残りし嬰子もあり猶ほこの上に道を求めてその墓參をもして吊らはん、思ひに沈み考にくれて一夜はその下にあかして明くる朝絞りもあへぬ墨染の袖を拂ひつゝ三衣一鉢の尼姿は政勝院の中にとかくれたり、

山や昔の山ならぬ、川や昔の川ならぬ、變らぬものはわが身一つとかこつ人に比べてはさても蓮の身の變遷は世にも稀なるものならん、

また紫と呼びし頃は都踊りの歸るさ思ふ人と喃喃語りし京橋柳下に今は姿を變へ名を新ためて首をあさるうたてさ、

## (七)

今日を名残りの夕陽は響き渡る入相の鐘に送られて西天を茜に染めてかくれぬ、

晝さへ人の通ふ事の稀なる京都北端の智恩院の境内は夕をかつこ蟬すら聲をおさめてたゞ蟋々となき叢の虫のみを獨りこの寂涼を破るなり、智恩院なる長源院が鳥井元忠の墓前に辿りつきし蓮母子は闕伽捧げ花手向け香焚きて珠數つまぐりつゝ讀經を始めぬ、教へられて暫し紅葉の手を合せし子はいつとはなく今買ひ求め來りし京人形抱きつゝそこにすやくと眠りにつきぬ、

照り渡る月木の間を洩れて白木の卒塔婆黒衣の尼は物哀れに、蠱と立ち上る香烟の香もしめやかに時は子の三つをすぎたり、續經も終へければそこに眠れるわが子を差し抱き見れば朦ろの月光にもしるきそのかはゆき姿、あはれ三つ四つの頑是なき子を法衣につゝみて行末をむざとばかり切り捨てしわれはそも罪の親か、われは今は何一つこの世に望みもなく幸もなし、生き延びて果して何の喜び何の樂がある、しかしこの子をさきだてわれも同じ刀の下に伏して母上の膝下にいたり同じ蓮の下露にうるほはんには、思へば短かゝりし余が一生哉、戀の夢にあこがれて京橋の柳に吹く風にたるゝ枝のかくては思ふ男を戀死させんと怖すてわれは花に蝶、呼びもし答もして遂に鳥井家に身を托して送りし三年四年は東の間、春は花見に嵐山、夏は涼みど加茂川に、月に思ひを糸にひける秋も、比叡にふる雪を歌によりし冬も思へば灘渡江に生ふ葦の節間よりも短かし、鳥の森の茸狩りに思はぬ浮き名を流しては再びこの世に生きん術もなければやむなく嵯峨野に世を忍び道を修めしも浮き無常の風は柴の庵にすら荒れすさびて母にはさきだゝれ今又洪恩身に餘る鳥井元忠ぬしにゆかれては何味氣なきこの世の樂しき、鶴の齡を重ねたりとて父や母と群れ立

ちて天に上りてこそ千代八千代と樂しきも獨り姥捨山の月を眺めたりとて何せんものぞ、罪もなき胸にこの眠るわが子を刺すはつられどもさりとしてその後に残りての憂さは又いかに、遅れ先だつ倣ひなる世に諸共に捨つるこの身こそなんほう嬉れしからん、時もやすとしてはどかく觀じかく決して墨染の衣の下より取り出せし九寸五分の切物ひらりと鞘をばらひてぐざとその咽喉笛をつきかへす刀にわれどわがこれも咽喉笛を透れど計りに刺しつめて蓮母子はこゝに諸共に死出の旅路につきにけり、

月は元の如く輝けど虫は元の如く鳴けど最早や二人はその息通はずなり了んぬ、嬰子を見守る京人形も元のごと、

世に味氣なきをかこちてあたらし三十路を越えかねて恩人の前に不義の胤なる子と共に蓮の紫匂ふ夏の盛も知らで京都智恩院内なる長源院にその最後を遂げにけり、

さと吹く風は未だ秋ならぬに散らす木の葉の幾片、月も今やたなびく雲にその姿をかくしぬ、折りしもなる遠寺の鐘、寂滅爲樂と餘音長くひびきけり、

(完)

## 蛙の述懐

の も と

第壹におことわりして置かなければならないのは我輩が此誌上で諸君にお目にかゝる一條である、何も不思議な事でもないがどかく人間と云ふ奴は口やかましい代物で小さい事をかれこれ云うて大騒ぎをして居る、青二才が瀧壺へとびこんだと云うてわい／＼云ふ世の中だ、我が輩が突然現れたなら驚くのは必定である、然し猫が洛陽の紙價を貴からしめる時勢ぢやないか、そりや猫は我輩よりもすつと伶俐かかも知れぬ。が我が輩だとして簾の中に許り塾居して居る譯にも行かぬ、時には散歩もして見たくなる、ちつとは歌も歌ひ度くなると云ふ様な譯で一寸顔を出した次第だ。

我が輩は何時生れたか今ですらとんと見當がつかない、何でも生ぬるい溝の中で大勢の同僚とばしや／＼修養した事だけは覺えて居る、最初はこんな不格恰な手足もなく天晴あつぱれ蛙か金魚に立身するだらうと自惚れて居たが時の變遷に連れて手が生ひ足が飛出して遂今の身におちぶれたのだ、居は氣を移すと孟子とやらが云うたさうだが實に其の通りだ、今も思出す毎に癩の種である、あんなどぶ川に生れたのが抑身を誤るの初かと思へば甚だ口惜い次第だ、然し悲觀はして居ない。我が輩の住で居る簾に近く一軒の家が在る、そこには學生が三人居る、主人は何を營で居るのか毎日のらくらして遊で居る様だ、おそらくは妻君の働きて喰うて居るのかも知れない、此の學生

の中に虎驚狼こしやうと云ふ奴は高等學校の二部とかをやつて我が輩と同じく御饒舌になるのださうだ、今一人の痴郎と云ふ奴は同じ學校の二部とかをやつて芋作りとなり我が輩の敵になるのださうだ、けしからぬ奴だ、今二人は今もつて名が知れぬ、臍の緒切ると親から貰た名をとくにどこかへ棄てたものと見えて今では胡麻鹽と云はれて居る、三部とかをやつて我が輩に縁のある敷醫者になるのだと云ふ事だが何でも非常な勉強家で朝の六時から夜の十一時まで兀々とやつて居る、それが爲め頭が白いのだらうと我が輩は思ふ、まさかあんな生れそこなひが人間の腹から飛び出した譯でもあるまい、然し此の男三年鳴かず飛ばす自重の風に身を持って大に斯道の造詣を深うし鳴かば大に鳴き飛ばし、大に飛ばんとするのだらう、感心な奴だ、虎驚狼は人氣者の醫者にならうと云ふものがあのだまも虫の本喰虫のかじ付きめが何が出来るかと云うて馬鹿にして居る、痴郎はえらいと云うて褒めて居る、さて此の痴郎と云ふ奴はなかくの氣まぐれ者で此の家の次男孝ちやんを煽動して時々我が輩を訪問に来る、末はさんざあばれ廻り引き上げる、初めはまさか天下の知己を求めに来るのもあるまい、士は己を知る者の爲めに死すと云ふ事があるけれど憚ながらあんな氣まぐれと生死を共にする程老耄れて居らぬ、一體何が目的なのだらうといくら考へても一向合點が參らぬ、よくよく探究して見たら動物實驗の爲めとかに我が輩を犠牲にするのださうだ、實に濟度し難い奴だ、そして自分で捕へるは易いけれど氣味が悪いから孝ちやんに命じた方がよいと自分の御面相を棚へ上げて勝手な氣焔を吐いて居る、あまつさへ此の男の細長い事と來たらすさまじいなんぞ云ふばかりなしで雨の降る時など傘もさゝずに孝ちやんを引率して我が輩

を攻撃にやつてくる時などはまるで雨と雨の間を通して行くのかと怪まれる程だ、こんな奴は人間並に二人二人と勘定するのは勿體ない、一本二本とやつた方が餘程適當だ、ゲジヒトの雜作や細長いくらゐるな事は男の事だから我慢もするが其上大喰と來たからたまらない、飯などは優に二人前は平げる、それでもまだ足りないので一週間に三四度は石川屋へ出かける、そして月末には金がないのでびり／＼云てるのに學校は何の遠慮もあらばこそ閻魔帳の大太刀を眞向に振りかざして攻めたてる、二丁飛車に追はれるか鉈に頭を剃られるかは此の事だ、韓退之の所謂食飽かざれば力足らず才の美外に表れずだとしきりにこぼして居る、馬と人間は大違だ、麒麟も食物が十分でなければ驚馬に劣るかも知れんが無藝にして大食痴郎の如きに至ては實に度し難い代物だ、然しかう云ふ時に限て手ひどく我が輩及び我が輩の朋輩をいじめめるのだ、江戸の敵を長崎で取るとは不了見千萬の話ぢやないか、深川の古池にさびしき音を聞かせて翁の夢をさました大功ある者をこんなにいじめてはさうせろくな死に様もすまい、それでは親父も金を送る意氣張があるまいと思ふ人もあらうが彼がそれに對する言草は常にかうだ、遊で暮らすは天理に背くと云ふけれどそれは働く奴の勝手に付けた理屈に相違ない、なに粟飯の吹上がるのも待たないでやがて醒め様とする世の中だ、苦しむも一生楽しむも一生、よく考へて見るとなんのかのど意地を起してさはがなくともよい、自分の好きな事をやつて死ねば極樂往生疑ない、とかく人間は僕の様な喰一方な人間を穢い様に思ひ胡麻鹽の様なかじりつきを非常によい事に思ふから困る、人生を楽しむ一手段として見れば格別な軒輕も在るまい、喰うて胃病になる、勉強して肺病になる、同じく孔子

様の孝道第壹則に反いて居る、だからあんまり僕を馬鹿にしないでくれ、伯夷叔齊が何と云うても主を殺し國を奪うても武王は依然として聖主たるを失はない、文學者が何と云うても王を追ひ人を殺してもクロンウエルはやはり大偉人だ、百萬の悪業を積でも目指して進む所にさへ靈光あれば黒暗の鬼窟と雖もまた不夜城ならんのみだ、僕も他日風雲に際會して雄飛したら僕の今日の行は皆逸話に成て僕の墳墓に錦繡を飾るのだ、とは云ふもの、下駄の齒と人の心は一度曲たら一代愈らないもの一生喰うて飲で過すかねは、……と後は笑にまぎらす、なる程痴郎は痴郎相當の卓論を吐く、雄飛どころかこんな奴が農學士に爲て意張り出したら大變だ、それでなくても百姓は二百十日をこはがつてろく、眠らずに御祈禱の何のと焦て居る、痴郎の様な奴が鐵持つ術も知らぬくせに頭から吹き立て、居ては米の取れ様筈がない、これでは皆人間がミイラに成てしまうのは必定である。

さて虎鷲狼は痴郎が喰うて居る間に孜孜として讀書して居る、然し横文字の本は一向讀めないのださうだ、それでも何だかひか／＼したものを四五冊有て居るが實は友だちに法螺を吹く材料で其實赤線ひとつ引ばられてないと云ふ事だ、これも氣まぐれの一人かも知れない、又天下廣しと雖もこれ程大きな法螺を吹く奴もまたとあるまい、五大洲を丸呑みにした様な事を云ふかと思へば時事問題を所嫌はず喋々とかさひすり出す、何でも萬朝の電報欄を切りぬいて藏て置くと云ふ事だ、彼は We should know something of everything and everything of something. と云ふ誰やらの云うた事を實行して何でも手あたり次第天ふらでも贈でもカステラでも大福餅でもさやれ御座

れだから思想も至て雜駁である、文學も談すれば政治も經濟も論すると云ふ妙な奴だ、先づ精々出世して郡長様が關の山さ。或る晩の事だ、我が輩が軒近く働きに行くとき蚯蚓君がしきりに陽氣な歌を歌て居るからひとつこれをおびやかしてくれ様とぬき足さし足伺ひよると室と中で虎鷲狼と痴郎とがべら／＼我が輩の噂をして居る、あんまり癢に觸つたから一聲ぎやく／＼と云うてやると、いきなりがたんと音がして障子が開いたかと思ふと胡麻鹽がぬつと顔を出した、矢庭に猿臂を伸ばして我が輩を捕へ様とする、さすがは多年鍛ひた辣腕ひらりと體をかはして第壹の危機は免れた、やれ嬉しやと思ふ間もあらせす第貳の突撃でもろくも彼の手中に落ちた、胡麻鹽は盛に我が輩を弄だあげくいやと云ふ程地びたへ叩き付けた、此の時の怨は終生忘れる事が出来なない、御影で三日許り穴の中で蟄居した、あんな不了見な奴が醫者になるのだから病人の助る道理がない。

こゝへよく訪問に来る奴に金風と云ふのがあつた、大のハイカラで春夏秋冬足袋を放さない、ひか／＼する絹入りの着物を着て縮緬のへこ帯をだらしなくぐり／＼巻にして赤銅の鎖に七寶入れの銀メダルを付けたのをぶら下げて居る、銀縁眼鏡をかけて頭を少々長くして居るので虎鷲狼の様な皮肉やは陰で五右衛門だとか鶏冠だとか云うて居る、御本人はそれも知らずに今業平とは拙者の事と云はぬ許りな顔をして居る、文學専門家で八犬傳や近松世話物等は彼の愛讀おかざる所、一面には貫一に萬斛の同情をよせ、浪さんには血涙を惜まない、もしそれ西遊記に至ては夜を徹する事三日に及だと云ふ事だ、そして此の頃は高分買ひ度い本が出るけれど高價で母親の臍くり

をまき上げた金では買う氣になれぬ實際世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまじだと思ふ事がまゝあるよなど、こぼして居る所は如何にも文學者然として居るが我が輩を圍轉滑脱だとか破太鼓をなぐりつける様な音を出して彼のインスピレーションをさまたげて困るの蕪村等は日は日くれよ夜は夜明けよと啼く蛙等とやつてるけれど僕は全く蛙の野郎には愛想をつかして居るなど、おてまへのかんべら頭を忘れて罪を我が輩に着せ様とするに至ては其の分にはしておけない、そして此間新體詩を一つ作つたから聞いてくれなど、駄作を憶面もなく犀河の河原を薬罐でも引きする様な塩から聲ふり絞て唸り出す、聞く度に嘔吐を催す次第、憚ながら我が輩のそれに至ては谷の戸出づる鶯も聲を収むる許りなりとまては行かなくても廬山の雨のつれづれに詩人も鼓吹とほめおきて其の聲のたえなるなりと半掃庵也有先生が其著鶉衣に歌てあるぞ、たゞ一本まへらざるを得んのは一茶翁に乙女所を見つかつた事だ、さすが一茶はえらい、見つけたら蛙に臍のなき事をとやつて居る、星華文學者流金風の如きに詠せられなかつたのは此方の幸福だ、あんなにやけた奴に我が輩の様な武骨な精神がわかるものか、我が輩の若い時などは星や葦はおろか蒲公英にさへ近よらなかつたものだ、御乳母日傘で育た奴どもが夢想だも及ぶ所でない、凡て粹をがり通をぶる奴ほど小癢に觸るものはない、思ふ存分横面をはり飛ばして青痰でも吐きかけてやりたい心地がする。

さて此の虎鷲狼痴郎胡麻鹽の三人は何でも同じ年に同じ中學を出て来たとかで頗るながよい、で、一月二回は必ず大コンバと云ふ者をやる、金風居士も時々やつて来て御馳走になる、先づ豚

肉をちゆうくくやつてしきりに飯を平げる、痴郎はあまり澤山喰ふので胃袋が三つあるの反芻をやるのだのと、からかはれて居る、これがすむと柿か密柑が出て雑談に移る、皮肉やに氣取りやに滑稽家にだまり虫のより集りと来て居るから、さ、其の話の奇抜な事全く珍無類だ、これが此の先生達のバラダイスだと云ふ事だ。

時はもう十一時に近い、あんまり辨じたら咽が干いて来た、これからねなくちやならん、かうして手洗鉢の下にちんで居ると、春の夜のおぼろ月が彼方松の梢に懸てほのかに影を地に投じて居る椿の花がぼたりと一つ地に落ちると梅の花の香が夢の様にさらりと頬をかすめる、實際おぼろ月夜にしくものはなした、嗚呼世は實に花の世となつた、我が輩も長らく端然たる態度で冬籠をして居たのだからこれから大に鳴き大に飛ばなければならぬ、まづ活動しなければならぬ段となつた、左様なら。

## 所謂「生存競争」と人道」

鈿 生

衣食足つて禮節を知る。蓋し生存は人慾の極、衣食は之れ生存の基にして禮節は之れ生存の装なればなり。故に生存競争の嵐荒む所、そこに刻薄の行、殘虐の擧、悲愁の嘆、但物の聲滿ち、



世は之れ混沌の闇に閉されん。誠やその前に天道なし。況んや人道をや宗教をや。試にかの世界史を觀よ。東西幾多邦國の興亡、民族の消長、一として之れ生存競争の跡ならざるなし。翻つて更に現世を觀へ。悲惨なる社會の裡面、その苦惱、一として之れ生存競争の影ならざるなし、嗚呼混沌たるこの魔界、終局の覇者たるべきは抑誰ぞ。嗚呼人道非乎、生存競争非乎。之れ實に△○生の疑問(?)たりしなり。先競争の慘を嘆じて併せて現世を嘗り遂に自ら識の淺きを言つて之を疑ふ。予またこゝに自らその薄識を標榜して少しく述ぶる所あらん。

廣袤萬里、上下八千載、桑田碧海の變移はものかは。かの驚くべき活修羅はこゝに我が現世を生めり。人類と言はず草木といはず。將たまた禽獸蟲魚を論せず、或は屍山或は血河、或は氣清き郊野をさ迷ふといふと雖も、いかでかこの渺茫極み知らぬ我が生存の戰場を踏破しつくせりといふを得べき。嗚呼その慘また説者の言を俟つを要せず、見よ、猛虎一たび飢ゆるに方つてや、王侯を擇ばず匹夫を辭せず、吼哮一搏以てその肉をさかすんば止まず。餓虎の前、そこに帝王の尊なく匹婦の卑なし。唯見る、脆美舌に媚ぶるの好餌己が一嚙を俟つあるが如きを。然り所謂生存競争の前には萬物皆その尊威を有せず。唯之れ一視同位、己が生存慾を満たすべきエトワスに過ぎざるのみ。そこに靈物人ある事なし。唯之れ一の生物に過ぎざるのみ。嗚呼そこに所謂人なし、安ぞ所謂人道の威權あらんや、宗教の尊嚴あらんや。知らずや、人道宗教の尊威は、靈妙犯すべからざる人ありてこそはしめて見はれ得べきものなるを。説者は此大自然の上に横はれる生存競争と人類特殊の人道とを以て、特殊なる靈物、人なる上に於て相戦はしめんとす。疑問は既にこゝに兆せり。乞ふ、予をして少しく人道發達に就いて揣摩せしめよ。而して次にいはんとする所を聞け。

古事記尊からざるに非ず。希臘神話また興なきには非るなり。然れども人皆言はん。人は天より降れるに非ず、地より湧けるに非ずと。然り必ずや親ありて存しき。既に親あり、そこに親子の關係あり。そこに既に親子の愛あり。しかもそは他動物に比して永續的なりき。永續的なるが故にその愛は兄弟を結びつたりき、一族を結びつたりき。加ふに宇宙の不可思議言語ありき。理解力ありき。そこにその長老の賢を悟りこれを敬ふを知りたりき。然れどもその智その慮は極めて幼稚なりき。かの瘴惡なる獸蛇に遭ひ偶々身危きに陥りては堪へかたき恐怖の心に襲はれ、はては畏敬に陥りたり。然れども彼人類には驚くべき智識の潜めるもの有りて存しき。彼等は永久自らを卑とするものには非ざりき。事に觸れ時に遭ひて自ら隠れたる己が力の尊きに驚きしと共に、かのたゞ本能にのみよれる動物の遂に興し易きを知れり。果然彼は池中の物に非りけり。彼等は遂に萬物の靈長を以て自任したり。かの憐むべき動物の生活を見ては、そる侮蔑の情禁する能はず。適々己が同族中親を無みし、子を虐ぐる者を見ては、これを動物に準へて侮蔑したりき。かくて彼等の畏敬と侮蔑とは一つのやはらかなき制裁と化し、是に加味するに愛情を以てし、そこにはじめて人道の初歩を現す。彼等は今や、獸類の域を脱したり。今や全く獸類と區別せらるるを要したりき。然れども思へ、生物皆タイムと共に極みなきかの生存競争を脱するを得ず。原始的本能的生活を距る未だ遠からざる彼等をして、その競争に於て、獸的争闘をとるに至らしめ

し者又止むを得ざる勢のみ。而も人智は駭々たり。現世道義全く地を掃へりと雖も倫理觀の發達の如き上古の比肩すべくもあらず。堯舜の世と雖も我が倫理眼よりすれば難すべきもの少にあらざるべし。彼等にありては所謂良心を欺くの行なかりき。唯その堯舜の民たりし所以のものは一点自ら欺くなきに在りしのみ。史篇に斑々たる血痕を止めし幾多のマサッカー今や漸くその跡をたんとするに至りしもの這般の消息を漏せしものならずとせず。然れどもかの戦争その者の要領に至つては依然獸的なるを免れず。野獸に對せし野獸的争闘は今猶野獸的なり。或は手により或は石により或は銅を以てし或は鐵を以てせしと雖もその要領は依然たり。然り戦争はどこまでも獸的生存競争なり。然れども、人或は問はん。古往幾多の戦争は必ずしも生存の競争に強いられしもののみ止まらず、かの歴山の遠征、那翁の雄圖、誰かこれを生存に強いられし競争といふ。かの思はしきレリジヤスウア、さてはあさましきグイナスチックウア、誰かこれを生存の競争といふ。思へ、攻者の目的は或は生存の爲めに非ざるべしと雖も、一度殺傷の起るあらんが、守勢素より生存の危機に迫れるを知らん。而して攻者のみ何ぞその敗のまた己が生存の危機たるに非ずと言ふを得んや。然り戦争はどこまでも生存競争なり。而も依然獸的生存競争なり。嗚呼一度戦雲亂れ飛ばんか、人道そこに翼を潜め、宗教そこに影を藏む。あゝ然り、戦争の前に宗教なく人道なし。何となれば戦争は實に獸的生存競争なればなり。彼等は既に獸的と比したるなり。彼等は既に人たるの畏敬、人たるの侮蔑、人たるの愛情を抛ちたるなり、彼等は原始の野獸的に立ち返りたるなり。野獸の前に安ぞ人道の尊あらんや、安ぞ宗教の威あらんや。恰もこれ犬

豚に贈に王冠を以てするが如けんのみ。雖然決して予は戦争全廢説をなす者に非ず。予は吾人が獸類を遇するに人を以てすべしと言ひ得ざると共に、獸的生存競争なる戦争に對して所謂宋襄の態度をとるべきを主張するものに非ず。予は勿論生物の生命ある限り、又その生存慾を有する限り、將その生存維持に關して多少の勢力を要する限り生存競争の遂に止むべからざるを知る。而して又人類の各々その禽獸に非るを知りてその尊を自覺し、之を保持して秋毫も傷けざるを保證し得ざる限り、その行動の遂に全く卑劣なる獸的を脱する能はざるを知る。こゝに於てか予は言ふ、かくて戦争は遂に止む可らず。かくて戦争は遂に廢止すべからずと。雖然こは如上の條件の動かし得べからざる場合に於てのみ發し得べし。漫に戦争遂に止む可らずといふ可らず。然らば則ち戦争終に滅却し得べき時ありや。戦争終に滅却すべきものなりや。予思ふ、戦争滅却の説またその憑る所なしとせず。

思ふに地球の滅却と人類の滅却とは未だ計算すべき期に非ざるなり、かの中世モナスチンズムの勢力と現世華嚴病の流行とが如何にすさまじき者なりや未だ詳にせずと雖も、生存慾の人類を亡去するの期また俄に計るべからず。かの國土の不變と人口の増加とを見るに及んでは、何人か生存維持に關する勢力を否定するものあらん。是を以て觀ればかの生存競争は遂に避け得べからざるを知ると雖も、我か人類が全く獸的卑劣を脱するの点に關しては、未だ必しも顧みるの餘地なしと言ふを得ず、かの發達せる倫理觀の普遍と、權利的觀念の發達とはこゝに暗黙的制裁を作り行く／＼見るべきの跡を垂れつゝあるに非ずや。かの戦争そのもの、減少はマサッカーの減少と

相並びて側かに這般の消息を傳ふるものに非ずして何ぞ。

人或は言はん、今増加限りなきの人を以て、之を限りあるの國土に住ましむ。その結果知るべきのみ。今や特に此の世界は人を以て盡く滿され、果ては食ふに食なく、着るに衣なからんとす。この時に方り、己が生存の必要に迫られ、人々各々獸的たらざらんとするも豈に得べけんや。げにこの勢たる、時の流れと共に、駸々として進みつゝあるに非らずや。然らば則ちかのかすかに響く刻一刻、これ實に來らんとする、獸的生活、より殘虐極まりなかるべき生活に、歩一歩近づくかんとするシグナルサウンドに外ならざる也と。然ども、之れ實に一を知つて未だ二を知らざる者の言のみ。試に思へ、人若し人生の目的を解して人類の増殖に在りとなし、而もその増殖の果てに於て、敢て獸的たるを嫌はずといはゞ、誰かその言の奇にして其の事の愚なるに驚かざらん。然り吾人は人類なるが故にその愚をなさず。人類は須く高尚なる天職を自覺すべき也。かくて初めて所有人道的世界改善の策は行はれ、かの前誌所載「社會改良と人口論」の如きは大に人の頭腦を仕配するに至らんか。且つ夫れ工業の進歩都市の發達等の如きは所有する点に於て人の生存期及繁殖に關して、一のバランスをなすものに非ざるなきか。觀じてこゝに至れば人口の事敢て介意すべきに非ざるなり。

抑々吾人人類の目的は、人たるの天職を發揮するに在り。世或は人生の目的を以て一つ生存を安固にするに在りといふ者ありと雖もそは又學者の迂説に止まらんのみ。夫れ人の生を享くるや、必ずや己れ之を待んとする物無る可ず。而もそを以て全然得べからずとなさば人また生を樂まざるに至らん。時に誤認ありと雖も、認めてこれを得んと勉む、これ既に天職の光を捉へたるなり。然りこの天職を自覺して初めていよく其の生存の重んずべきを知る。彼の己が天職を自覺せざる無類の徒に至ては、生命を以て蔽履の如く觀するものあり。或は亂に居て自ら慣るゝが如き者ありと雖も、そはまた潔き死滅を以て己が天職と思惟せし輩ならんのみ。かくの如く所謂天職の自覺は生存の慾を起さしめ、その逸去又は不可能はまた生存の慾を抛たしむ。思ふに生存の慾は本能的なりと雖も、天職の自覺は一度これを破壊し更にそこに人化したる生存の慾を生せしむるに至る。かくて始て尊むべき人たるを得るなり。然れども這般の經路は頗る複雑にして迷霧に彷徨し遂にその天職を誤認し、或は之を没却す。かくて彼等は遂に不徳に陥りまたかの獸域に復歸するに至る。かの戦争の如きは既にその獸的なるを言ひしと雖も、なほこれを以て生存を安固にするべき最良手段と思惟するものなきを保せず。然れども依然戦争は獸的にして依然馬鹿氣たる手段なり。その僥倖は時に大利を齎すが如き事ありと雖も、その民力を疲弊せしむるは言を俟たず。思ふに將來生存競争の勝利は、決してこの戦争によりて期すべきに非ず。然り、戦争は明に墮落なり。たゞ向上の一路のみ吾人生存の競争を托するを得ん。然らば則ち向上とは何ぞや。天職を自覺し人道を辿りて自ら得んとする所の努力は即ち之なり。高尚なる權利はその賚なり。名譽徳望はその報酬なり。獨立進守の氣象はその附屬物なり。國利民福はこれによりて得らるゝなり。思ふに人類の傾向に二途あり。墮落向上即ち之なり。墮落は一面獸的生存競争の應報にして向上は即人道的生存競争の勝利を意味す。説者は世界の慘憺たる光景に戰慄してその墮落に驚き、

遂に生存競争の殘虐を絶叫してその一面に賞すべき向上あるを等閑に附したり。且つかの所謂弱肉強食的勇者の跋扈を見て人道のたのむ可らざるを嘆じ遂に終局の勝者如何を疑へり。乞ふ之を今世列國の内に見よ。人誰かかの國の所謂外交的狡猾の惡むべきを知らざらん。或は他の苦境を察知して以て乗すべきの機會となし、脅嚇實に至らざるなし。或は盛に離間の策を廻らし、爲めに漫に黃禍を唱ふ。時あれば則ち禍雲に給するに毒霧を以てす。實に列國の指彈する所なるに非ずや。幸にも、その國科學の進歩と工業の隆昌とは國民に一種の氣力を興へ、漸く諸國に對してその信その威を繋ぐに足る。而もその重きをなす所以のものは此に在りて彼に存せず。かの謫詐極りなき外交、言はゞ人道を無視したるが如き對外策は、彼をして生存競争の勇者たらしむるものに非ずして寧ろ彼をして死地に陥らしむるなくば幸たらんのみ。その物質的進歩こそ彼の有せる人道的生存競争の唯一勢力を示すものなれ。

要するに。生存競争は人道のモデファイヤーたるを得ずと雖も、人道は明に生存競争のモデファイヤーたるを得べきものなり。説者が人道を以て人類の理想を言ひしが如きは抑々失言なり。然り人道は實に生存競争と調和し得べきものなるのみならず、實に世界結局の勝者はかの人道もてモデファイセラれたる生存競争の勝者それ自身に外ならざるべし。



## 文學者

み つ を

「僕は文學者だ」

これは武田君の、いつもの口癖だ。

武田君は四高の生徒で、文科の二年生である。金澤の東方、一帯の高味になつたところ、小立野と云へば、同じ金澤でも別天地の觀がある。武田君は、その或家に下宿して居る。高等學校からは、どんなに急いでも廿分はかゝるので、友達などが、よく聞いてみる。

「小立野じやあまり遠いぢやないか！」

「文學者だからな、……………早起きをすれば何でもなし」

いつでもかう答へる。ほんとうに、何とも思つて居ないらしい。と云つて朝は、あまり早起きでもないど見えて、時々學校は遅刻する。しかし、武田君は、一向平氣なものだ。

「僕は文學者だ」

武田君が口を開くと、きつと、之で始まる。

それから、滔々文學論となるのだ。即今流行の自然主義などは、敢て排斥するわけでもない。勿論ほめもしないが、言文一致だけは、大反對を稱へる。

武田君のかいたのを見ると、言文一致は、決して使はない。しきりに昔風の文章を戀しがり、

紅葉全集などは大々好だ。友達の中には、之に反対するものもある。

「今から十年も経つて見給へ、きつと言文一致ばかりになるから」  
そうすると武田君は、いつでも、頭を一寸なでる。

「僕は文學者だ、今の言葉では、文章はかゝない」  
これきりだ。

武田君の下宿は、小立野の中でも、殊に見晴しの好い所にある。

「石川縣第二中學校」の門標のある、中學には不似合なハイカラ建物の前から、右へ入る路があつて、そこを入ると、中鷹匠町とか云つて、さびしいやうな通りがある。小立野の練兵場は、すぐ後に當るので、下宿の二階から、喇叭の音が、きこえる事もある。

武田君の室は、南向の二階の六疊で、午後になると、眞向から日が指して來る。

「オイ、武田君」

ガラリと襖を明けて入る。武田君はいつになく、眞面目に机に對して、何か書いて居る。

「文學者！ 休みでも勉強じややりきれないよ」

「ヤア君か、入り給へ、至急親展の手紙をかいて居るんだ」

始めて振り向いて顔を擧げた。

「ハハハ、親展はおまけ分だらう」

「馬鹿な、まじめだよ」

ちよいと筆を走らして、止めた。机の抽出しからナイフを出してツーと手際よく、半切を切る。

「一寸待つてくれたまへ」

一度讀み直してから丁寧にたゝんで、状袋に入れる。宛名は武田君の父君宛だ。

「また、金の催促だらう」

自分は口をいれる。

「イヤそうじゃない、大事件が出來たんだ」

武田君は切手を貼り付けながら、自分の方へ向き直つた。袂から、敷島の新しいのを出して口を切る。

「やり給へ、御正月も之じや天氣だらう」

「そうさね、去年よりはよからうよ」

「しかし又、變るかね」

武田君は煙草へ火をつけて、一吹ふいて、そして淋しく笑つた。  
煙の間から、眼鏡が見える。口が動く。

「君、大變なことが出來たよ、一生の大事がさ」

「フン、何だか勿体ぶるね、話し給へ、その一大事をさ、僕も相談に乗らうよ」  
障子がバツと明るくなつて、冬の日が雲の間から指して來た。

「少し明け給へ、うつとうしくて仕方がない、出来たつてのはね、今朝、親父の所から手紙が来たんだよ」

「それがどうしたつて云ふのかね」

「それが僕の一大事さ、文科なんてつまらないから、是非法科へ變るやうにと云ふのだ」

「なんだ、君が法科に變るつて！」

僕も少なからずびっくりした。文學者が法科になるなら、御醫者が豆腐屋になるより外に仕方があるまい。武田君の顔色は、頗る真面目くさつて、しかもいくらか、青白くなつて居る。

「只つまらないと云ふだけなら、君のいつもの議論で説いてやるさ、それが文學者の十八番だらう」

武田君の眼は妙に光つて、自分の方をチラと見た。

チョイと机の下をのぞいて見て、細長く八ツ折にした一枚の新聞紙を引き出した。ズツと擴げて二面のところ、朱で線を引きいた處を指さしながら、僕の方へつき出した。

「君、一所に之も送つて来たんだ、中學の櫻田先生は免職だよ」

新聞の辭令欄には、なるほど依願免職とある。依願でも今はアテにはならぬ。要するに校長に追ひ出だされたに相違ない。

「校長さんもひどいね」

自分は嘆息した。櫻田先生は、中學一云ふのを忘れたが武田君と僕は同じ中學の出身で同期生であ

る一の教頭で文學士だ。若手の常として、ハゲ頭の校長さんとはどうしても合はない。校長さんと云ふのは、古い古い尋常師範出で、年の效で經上つた豪の者だから、縣の御役人とは交際を旨くして、皆手の中に丸めて居る。櫻田先生が、いくらひとりでふんばつても、駄目なのは始めつからわかつて居る。今度のことも當然の結果としかは思はれぬ。それにしても、櫻田先生の免職と、武田君はどんな關係があるのか、自分は少しも知らない。

「これがなんか關係があるのかね」

僕はさいてみた。

武田君は、さびしい中にも愉快そうな笑をしながら、煙草を、今一吹フーとやつて、それを火鉢のふちのところへこすりつけた。

「ないわけでもないさ、だから僕は、親父に反駁することは止めたんだ」

「それじゃ君も變るつもりかね」

「だつて仕方がない、今は出来ないから大學へ行くときに變る」

「仕方がない？ 意氣地がないんだらう、一生の目的が變るんだせ」

「そうさ、一生の幸福のために、一生の目的を變へるのは、不思議がないじやないか」

武田君は、少し怒り氣味の聲でこう云つた。

「じや櫻田先生との關係と云ふのはなにかね」

自分は、少しまごついたが、第一の疑問に對して解釋を求めた。

「君はほんとうに知らんのかね」

「何を……」

「僕の家と櫻田との關係をさ」

「イヤ少しも知らない」

武田君は、一寸首をかたむけた。

「しかし一寸位は氣が付いたらう」

「イヤ、たい、先生がとき／＼君の家へ行くのだけは知つてたよ」

「そ、そ、それだ」

誰にも話すなど云ふのを冒頭に、武田君は語つて聞かせた。

武田君の祖父と云ふのは、全くの無教育だったので、その身の不自由に感じてか、自分の子即武田君の父君と櫻田先生とを、はるばる東京に遊學させたのだ。それからして武田君の父君と櫻田先生との間は、兄弟も同様に、隨つて、武田君と、櫻田先生の女子との間に許嫁の約束があると云ふことだ。

「こう云ふわけさ、親父から云つてきたのも、櫻田の方から云つてきたからに相違ない、僕も彼女のために、僕も斷然目的を變へる、法料だとしてやればやれぬことはない、一生の幸福のために、好きな文學位は犠牲にする」

武田君は、顔赤らめながら、かう云ひ放つてニコリ笑つた。

僕はさしあたり、何の感めの語も持たぬ。

「そうさクラスの者なんか、みんな、君は法料らしい方だと云つてるぜ」

「まアおだてるのはどうでも好いが、今のは、誰にも云つて呉れちや困る」

「何かおこつたら云はないよ」

「ハハ、またか」

一層心地よげに笑つた、兼六せんべいに茶を呑みながら、夕方近く自分は下宿へ歸つてきた。

それから一週間も後のこと、御正月になつて、冬休みも残り二三日と云ふ時、武田君へ行つて見やうと思つて、廣坂通を公園の方へ行つた。坂も半ばに、左に、兼六公園の枯木の間、移轉建築中の博物館が見える。バッタリ行き會つたのは武田君。自分は

「やア、今、君の所へ行くんだつた」

「そう、それは失敬しましたね」

「君もよく出歩くじやないか」

武田君は、いつになく、面白そうな顔付をした。そしてこう云つた。

「僕は法料だからさ」

(終)

おもひ草

たけを

夢

宵の帳の、そと落ちて  
 甘し香に酔ふ、金星の、ときめき歡笑、降り來れば  
 羊飼ふ子の、檻片付けて、小唄交りの逍遙時、  
 合奏や、流にもつる角笛の旋律  
 春の御衣に、肌の香洩る、鬱金香の、襟止め、  
 見よや、霞の輕羅をこぼれ、舞に疲勞れて蝶一つ、  
 含羞む花の細頸、俯身に纏ふ、瑠璃の袖  
 やさしの胸に、白銀の、杵うつ脈の沈むまで  
 暫し憩はせ、夢をかせ。

牧童の歌に、聞き惚れて

眞白き素絹の、襪かゝげ、班入の大理石の、階段に  
 玉履刻む、伶人の、胸そゝのかす、私語に、  
 火盞消せ、古き追懷に憧憬む  
 あてなく迷ふ、露の裾に、花冠の床の、假枕、  
 さやかなる吐息、身に泌めて、醒ませせ醒めぬ、甘し夢、

さらば黄金の、我が小函、借し參らせむ、歡醉に。  
 朝、白光の笑靨して、「勤勉」の御領、召さう時  
 いかなる國に、めざむなるらむ。

湖のほとりの

わかき香みてる  
 湖のほとりに、さまよへば。  
 花摺衣ほのもる、むねを繞りて蝶まいつ、  
 神臺あらましの兄妹が、花つみのせる驟追いて、  
 みづ枝のそよぎ鳥の歌、面ほてりするほそみちに、  
 若き母ますわが里の、夕映空をなつかしみ、  
 和毛にむすぶ白銀の、鈴のひらきのすゞやかに、  
 思ひほこりてかへり行く、睦心のさゞめきに、  
 にたらしましかば  
 湖のほとりの。

ま冬日すさむ



湖のほとりに、さまよへば、  
 憂の髪をふきみだし、遠く家族をはなれきて、  
 あてなくまよふ巡禮の、日もくれあいになりぬれば  
 われ野にふるう古寺の、晩歌のふしに肌寒み、  
 はかなき影をせきたて、墓場の道を彫みゆく、  
 倦怠のいどい、業悪のくい、いまのあたり身を包み、  
 笑も涙もかれはてし、胸にたゞわく寂漠に、  
 湖のほとりの

枯れ 蘆

四高和歌會

其 月

大理石の柱々の中縫ふや緋の衣せし僧正二人  
 徒らに胸焦せとや火の柱抱けどならば抱きもせ  
 んぞ

漸々に氷逼りて明方の濠の真中に群る、水鳥  
 獵夫等が野猪踏み起す聲すなり二荒山の在明月  
 夜  
 君待つと只束の間も居つ立ちつ壁の思はん事も  
 忘れて  
 繞 石

月花に思出多き旅なりき柱につるすホ句古りし

竹 花

笠  
 輪塔も松も雪なる島あり、水鳥居ばと思ふ池か  
 な  
 濠潤れて水鳥居らすなりにけり蘆六尺の風に折  
 れ伏す  
 その人と並べ書かれし白壁の己が名消しに行ま  
 し朧夜  
 閑として音なき山の大伽藍丹塗の柱霧に雫す  
 湖底にわれ立つ心地星々は水の面に浮ぶ藻の花  
 のごと  
 渺茫と眼路きわみなき雪の原雁こそわたれ星を  
 くらりて  
 土蠻等が首狩せんと矛立て、樟の下ゆく朝月夜  
 かな

赤き血を氷を包み水晶の玉といつはり君におく  
 らび  
 壁ぬりの情人の名などを塗り込めし壁ものいは  
 ばをかしからまし  
 城跡や柱のみたつ淋しさを涼月さしぬ水の如く  
 に

白 雪

かじまくら遠荒磯に春潮の底より昇る明星見れ  
 ば

壁に耳徳利に口のありと言へど君におん耳あり

金 柱

や疑ふ  
 壁落ちて屋根の朽ちたる廢屋の草のみ春の雨に  
 茂りぬ

赤壁の賦を學ぶ子は聲あげてたゞ讀みてあれ戀  
 には死せじ  
 大海のもなかに太き圓柱つと立ちてつと消ゆと  
 夢見ぬ

海にうつる夕焼雲の絶間より浮み出でたる浮寐  
鳥かな

蛤 城 雌 泉

悲みの果にふと得し喜びは嵐の後に虹かゝるこ  
と

山小屋や大吉の札張りつけし柱に芽吹く彌生と  
なりぬ

### 四高俳句會選句

竹槍の長きに猪を擔ひけり 繞石

猪狩の村を擧つて吹雪の日 同

冬の雲急く矢走の歸帆哉 同

讀初や朝風く起きて灯の明り 同

書初や書に祿を食む家の子の 同

一枚の水田の上や冬の雲 静池

勅題を我が書初の佳例かな 同

控所やストーブ燃わて人在らず 同

紋服のゆかしき稚兒や筆始 乙贊堂

冬の雲鳥とびかふ江尻かな 同

船室に航路を語る暖爐哉 美鳥

半島のみえぬ幾日や冬の雲 同

書初や試刀の印のあざやかに 雉泉

雪下ろしといふ雷が鳴る冬の雲 同

王といふ猪獲て山の荒び哉 雉泉

讀初や書は朗詠の春の巻 金桂

弟妹の書初嬉し故郷より 白石

手負猪射止めずんばの一矢哉 蛤城

ストーブや水掛論も二人さり 同

書初や墨汁にじむ青墨 藻汐

ストーブに對す聖母の畫像かな 紅桃樓

冬の雲不二にかゝるよ雪とならん 倚窓

書初や一流わるもあらざるも 孤月

猪の跡こゝ迄谷の深雪かな 秋雨

幽囚の身の述懐を試筆哉 同

鮒膾各寒を韻字哉 繞石

鮒膾石山詣歸るさに 同

水車への堰の埃や水温む 同

草芽ぐむ土橋映りぬ水温む 同

溝草に流れぬ水の温みけり 繞石

飯事の貝に汲む水温みけり 同

嘯や弟子僧多き竹林寺 同

比良霞み比叡残る雪鮒膾 芙蓉仙

生州船繫ぐ樓下や鮒膾 同

詩に隠れて湖畔漁翁や鮒膾 同

沼蒼き硫黄の華や水温む 同

吟笻を濯ぐ野水や温みけり 同

嘯も夕映松の高枝かな 同

嘯や樵り木積みたる小舎の前 同

嘯や牛乳桶を置く草の上 同

嘯や晨朝に開く施薬院 雨童

渡し場の赤き小旗や水温む 同

歸帆更に歸帆生む眺や鮒膾 雉泉

帆にまかす湖心の船や鮒膾 同

初虹に多少樓臺の煙雨かな 同

嘯や挽く木定めぬ森廻り 同

嘯や森の祭祠の碑文彫る 雉泉

雨意雲と去つて嘯り姦しき 同

温む水禪洗ふ惟然かな 春夢

水温む客雪隠の手水鉢 同

嘯や石段上る奉幣使 同

嘯や麓に休む女駕 同

嘯や舟酔さむる松の蔭 同

嘯や山を背にして三軒家 墨村

病む子規に嘯る鳥を贈りけり  
 酢加減のつまみ食する鮎膾  
 堀捨てし慈姑も見えて水温む  
 嘯を髻刺つて聞く眠りかな  
 御殿響の木皮洗ふや水温む  
 嘯や大鋸負ふて森に入る  
 柴橋の落ちて渡るや水温む  
 入景の一景の句や鮎膾  
 淺酌に大津竹枝や鮎膾  
 郷俗の振舞酒や鮎膾  
 水車尻鍋釜洗ふ水温む  
 玉人の座右に盥や水温む  
 きれ糸をつなぐ箆間を嘯れり

竹花  
 蛤城  
 秀菜  
 同  
 雨峰  
 同  
 金桂  
 秋雨  
 同  
 秋雨  
 同

塊の光る冬田や霜朝日  
 焚火して冬田に獵の晝餉かな  
 冬ざれば鶴ぞ鳴く狭田長田かな  
 猪除の土手ある冬の裾田かな  
 丘紅葉散りうく冬の裾田かな  
 賣る料に氷らす冬の山田かな  
 初冬の漆塗り代ふ爐邊かな  
 初冬の藁灰作る藁火かな  
 日表に出て藁蔭織るや今朝の冬  
 此の渡しすめば短き日の暮れむ  
 短日や暮れて着きたる仕舞馬車  
 早駕を繼ぐ短日の驛かな  
 汐濱に隣る水田や浮寐鳥  
 葛飾や蓮田に白き浮寐鳥  
 水亭を送らるゝ灯や浮寐鳥  
 沖遠く島火事見ゆる磯邊かな  
 吹雪する小驛に五分停車かな

冬春雜詠

○ 美 嶋

津輕富士晴れて麓の冬田かな

小春日の船虫這ふや磯社

○ 雉 泉

退くを追はぬ戦や日の詰り  
 地圖になき島の踏査や日の詰り

泉

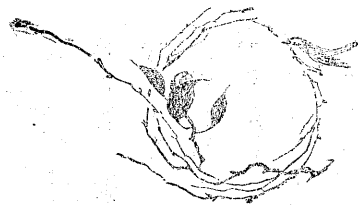
夜をこめて五色の手毬かゝりけり  
 椽をする振袖重ふ手毬かな  
 ありし村の貞女のことを手毬歌  
 三千歳が手毬一念數へけり  
 育たねば此子女装の手毬かな

○ 秋 雨

鳥居岸に社洲中や浮寐鳥  
 湖岸直ぐに築ける城や浮寐鳥  
 流譎の砂に書す懷や鳴く千鳥  
 詩の疑義を説文に解くや水仙花  
 讓る瓶の別に挿すものに水仙花  
 水仙や高士悶情を彈琴す  
 茶色竹聲客無き庵や水仙花  
 軍機霜に熟して陳鼓鳴る夜哉  
 月明の霜にしばなく梟哉  
 篋下ろす木流し唄に霞かな  
 客一人荷船にたのむ小春かな  
 蕃山が政治教化の手毬歌

人しらぬ我知る鴨の下り場かな  
 吹雪く夜の隣家叩くや何の用  
 里の母車で返へす吹雪かな  
 飲む料に足らぬ駄賃や夕吹雪  
 船を家の島商人や小夜千鳥  
 俄か事たのむ人手や日の詰り  
 張板や片乾として日の詰り  
 不時の客あるに米磨ぐ日の詰り  
 茶の木咲く農場技師の官舎かな  
 昔聖左遷の寺や茶の木咲く

茶の花や御師が家の竹の木戸  
 小春日の人お木曳きに装束けり  
 繪草紙に残る頭巾や槍踊り  
 芝能の灯や笛方の片明り  
 畑ともならず空地や露の臺  
 國寶を摸寫に繪師來て春の雲  
 つながれて猫の命婦の晝を在り  
 陽炎に獅子の眠りや檻の中  
 陽炎や土の祠の和御魂



時 評

北辰會誌第五十二號を讀みて

みつを

鳥辭がましけれども僕はこゝで、前號の批評を  
 して見よう。もとより批評眼など、そんな高  
 尙なものは僕にはない。僕はたゞ自分の心に感  
 じたものを其まゝ述べるだけである。北國新聞  
 のハカキ欄に、誰の投書かは知らぬが、思ふ存  
 分に前號をけなしたものがあつた。けなすのは  
 けなしても構はない。此投書者のやうに、馬鹿  
 げて高い標準から見たららざ知らぬこと、僕  
 のやうなものから見ては、北辰會誌はそんなに  
 悲觀したものではないと思ふ。それにしてもか  
 の北國新聞の投書者の堂々たる理想や、お手並  
 を拜見したいものだ。斷つて置くが、僕は文科  
 だからその積で批評する、諸君もその心で、見  
 て貰ひたい。僕は開けてすぐに先づ、  
 「社會改良と人口論」(朝陽生)  
 を讀んだ。僕はこれを見て、その題のあまりに  
 大なるにびつくりしたが、それを一讀してから  
 又、その内容のあまりに題にふさはしからぬに  
 びつくりした。こんな問題を捉へてきたならば、  
 もつと精しくもつと明瞭に、僕等のやうな門外  
 漢―會員の大部分の論者のやうに専門家ではな  
 い―にも、よく分るやうにして貰ひたい。僕は  
 只一讀して、その論旨の大体を會得しただけだ  
 からその論の適否を云ふべきではない。いつか  
 また、讀み直して見たいと思つて居る。  
 「いざや行け藝術の子、我がとる筆は自然なる  
 を」(たけを)  
 僕は此たけを君の平常を知るだけに、一層の興

味を以て之れをよんだ。その題の長さが如く、可なり長い全文を、僕は、息をもつかずによみ終つた。讀み終つてから自分は、眼をどちて靜かに何物かを考へざるをえなかつた。「我がとる筆は自然なるを……」これは、僕の心にひびき

て來る勵しの語であつた。自分は考へながら、かの若き畫工の煩悶に同情して此世をのろつた。一言にして云へば、僕は此文章の美しいのに惚れて、そしてその中に含まるゝことの、我に及ぼしたる感化の偉大なるを感謝した。本號の中で、比較的優れたる作の一として、僕は之を推さざるをえない。

これを讀んだ友達の一人が、「何だか分らないやうだ」と云つたので、僕はかう云つて置いた。「僕等にわからないことをかくだけその人がゑらいんだ」と。もし此作にかゝる欠点(?)があるとするれば、僕は、鏡花の、小説に於けると同様の

「生存競争と人道」(△○生) 僕は未だ、これは讀まないの

で、此文章に對する批評をする權利がない。只此文の上のみで見れば、僕はかゝる忠實なる研究者を、北辰會が有するを喜ぶものである。獨歩の文才には既に世に定評がある。君の所謂「天才」てふ語が當るかどうかは知らぬが、獨歩が、死んで名高くなつたのは事實である。此時にして此文題をとつたのは、たしかに君の手腕であらう。獨歩の死の、余りに早かりしや否やは、彼を

今一度生かして、文壇に活動せしめて見なければ

「萎める花たば」(かけひ) 短歌二十を列べてある。その題の如く、君の常舞をやるやうな事があるならば、僕は敢て「未知數で散り失せた」とは悲しまない。むしろ死して名をなした獨歩の死の、時を得たるを慰むるものである。

「異國草」(青花) 「麗人」は僕には初見參である。「胡蝶の曲」は他の人の譯したのを、二度ばかり見たことがある。異國草を食べただけに、バタ臭い所あるのは、少しくもの足らぬ心地がした。用語までもバタ臭いと今少し作者の勘考を煩したい。「麗人」は短い一番好いと思つた。自分はこれを讀んで、我が故郷に近く、林檎の園を思ひ起した。紅き實の鈴なりした樹の間を行く時、美しい聲で、之を歌つて居るのを聞いて見たいと思つた。「紅薔薇」は好まない。

「智識以外の力」(中村泰治) 僕は先、その堂々と署名したのが氣に入つた。「己れの論に間違があると云ふならいつでも來い、相手にしてやる」と云ふやうな元氣が大好きだ。論文には是非ともかうして欲しい。反對に、

火事場盗人見たやうに、つゝきまはすのは大嫌だ。(第四十二章)なんど、引き出して來たのは、何だかてらふやうな氣がする。北國紙上の

評者は「頭の悪い人」と云ふたが、僕もそう思はぬではない、君の辯舌と聯想するためか、何だか演説の原稿のやうで、更に之に、附け加はる所がなければならぬやうな心地がした。ヒーローは、幾分それが殺がれたと思ふ。

「智識に生れず」して、君の謂ふ所の「それ以外の力」によつて生れることは、僕も双手を舉げて賛成する。我が輩が、これを讀み終つた時、至誠堂の満場、割るゝばかりの拍手のひびきを聞いた。「野菊」(山田龍風)

當世流行の口語詩である。僕は元來口語詩そのものが氣に食はぬ。文章には口語を歓迎し、詩は詩としてあくまでも、詩的の語を用ゐる主義だ。随つて此「野菊」を見るや、余程の割引をしてみたのである。野菊の一枝を手折つて父の墓前に手向けて心ゆくまでに泣いたのである」と之だけの處を三行に切つてゐる。誰れかの云つたやうに、ズラリと書き下しては、原稿料が取

た。四人の家族、夕食の食卓を圍む所は、遙かに四百里のかなた、我が家を思ひ出してなつかしい。僕はその文章を兎や角と云ふ勇氣はない。只そのインハルトを以て非常に満足した。

「徹さん」(田中彌生)  
「徹さん」は美術家だそやな。僕は筆つきにかぶれて、思はず全文をよんだ。君の文名は、君の入學當時から知つて居た。寄宿舎の雑誌でも見た。和歌會でも知つた。「徹さん」の一文、その文に於て一頭角を抜いて居る。「徹さん」の美術家的性格も可也よく、現はれて居るやうだ。僕は「行けや藝術の子」と共に、本號中の佳作として尊重する。此上の願は、君の麗筆を以て、もつと涙のある、もつとたつぷりした所のあるものを、かゝせて見度いことだ。

「冬薔薇」(四高和歌會)  
和歌會振はずの聲を聞いたが此位あれば充分

をくれば「雉泉」は上二「あはた、しうも」が面白。君の作は「つとよりて」「怨言」に成效し、「全き夜の」「磯の松」に比較的失敗して居る。「子馬」(同上)は卷中第一の好調。

俳句は僕には縁遠いから他の人にゆづる。時評以下は之を畧する。

全部の上から云へば、論文の少いのと、前號の批評のないことは、目につく。論文には、法科の大臣や代議士や大審院長(但し未來の)を煩しなく、批評の方は、諸先生の中のごなたかがご思ふ。

僕不肖を以て諸君の名文をけがす、妄言多罪。

これを見よ

みつを

◎幡隨院長兵衛を以て自ら任ずるものあり。或に依つて開かざる。演說會の如きも一度は、全

る人、之をそしつて蠻中の蠻なるものとなす。されど乞ふこれを見よ。惡所に足を入れて平然たるご何れぞや。我は前者の無邪氣にして、むしろ、男らしさを愛し、後者のいやしむべきをかなしむ。

◎風呂に行く。立つて水をきるものあり。沫はとべども知らぬ顔なるを見れば、誰か之を以て傍若無人の振舞となさうらん。されど乞ふこれを見よ。滔々たる世上、我利のために人を呪はざるもの果して幾何ぞ。

◎全校生の三分の一を有し、「堂々四棟を列する時習寮二百の健兒、寢食を共にして超然の主義を戴くや豪なり。されど乞ふこれを見よ。諸君のなすところ、我が目をして見せしむれば、あまりに偏屈なるなきか。その懇親會、その擬國會、諸君は何故に之を諸君の發議を以て、全校に依つて開かざる。演說會の如きも一度は、全

校生に開放するの議ありしときく。而して遂に今に至るも現るゝあるなし。超然の主義立つて既に三年、三年の歲月は、寮の生命の永久なるべきに比しては、或は長しとは云ふべからず。さはれ三年にして未だ啼かずとせば、吾人はその準備の、ツーラングなるの感なくんば非ず。

◎此頃、運動會等に於ける余興を慎しむべきを云ふものあり。きく者、更に説いて曰く「我校の運動會に於ける余興も亦全廢せざるべからず」と。されど乞ふ是を見よ。我校の運動會たるや、國民の最大祝日たる天長節に於てひらかるゝもの、我等の催し物は凡てこれ祝賀の微意の存するに外ならず。そは恰も此佳節に當り、賀意を含めて運動會を開催すると、その意義一般たり。

之を廢せんとするは、即、我等の熱誠を沒却せんとするものにして、國家に對しては不忠の臣、皇室に對しては不敬の兒たらずんば非ず。我が

校の運動會を以て、他と同一視せんとするものは、我校の運動會をば、天長節とは、全く分離したる後にして來り談せよ。

◎美景を見ては「畫の如し」と云ひ、巧なる畫を見ては「實物に對する如し」と云ふ。畫がよきか、實物がすぐれたるか、我は之を知らざる也。されど乞ふこれを見よ。現世幾多の人の相争ふ者、甲をして云はしむれば乙を以て非とし、乙をして云はしむれば甲即非なり。甲是なるか、乙非なるか、我はこれを知らざる也。善惡の別も、只これ數多の人の判斷にすぎず。更に大なる具眼者ありとせば、今日一般善惡の區別は、これに全然顛倒し、昨の善、今日の惡たるやも知るべからず。

◎世に軟文學を排するものあり。「我はこれを見よ。善惡の別も、只これ數多の人の判斷にすぎず。更に大なる具眼者ありとせば、今日一般善惡の區別は、これに全然顛倒し、昨の善、今日の惡たるやも知るべからず。」と。されど乞ふこれを見よ。非軟文學的思想を以て、軟文學を論ずるは、白紙に色

を塗りて、以て黒紙に色を塗るを議するが如きことなきかを。眞の小説家にして、小説を排するならば、我は始めて小説の非なるを覺るものなり。

◎雪の白きは云ふまでもなし。今更の如くに雪の白きを説かば、誰か之を嘲らざるものあらむ。されど乞ふこれを見よ。當然の職務を眞面目に爲したるばかりに、勳記を受くるあるも、人はこれをあやしまざるのみならず、却つて之を名譽となす。故に我や、雪の白きを説いて博士請求論文を提出せむとす。

◎四高より公園に至るも、公園より四高に至るも、その距離に於ては決して異なることあるなし。されど乞ふこれを見よ。湯に水をそゞぐも、水に湯を注ぐも、歸する結果は等しけれども、尚、湯に水を入れて、折角沸したる湯をつめたくせむよりは、水に湯を加へて、冷きをも温く

する方、幾分の得る處あるやうの心地せずや。◎「彼も人なり我も人なり、我れ又大臣たらん」と、されど乞ふこれを見よ。鐵扇は、扇なれども。鐵の字一つ多し鐵の字一つ多きだけに、扇は鐵扇の用をなしがだき也。大臣は、單に、人と云ふ以上は、或る物の加はりあるを知らざるべからず。責任ある大臣の行動は、吾人一人民の行動の如く、しかく容易ならざるは、鐵扇と雖、終に涼風をいづるの用をなさざるが如し。

◎數百の校生中、僅に數名の特待生、世にもてゐること何ぞ斯くの如く甚しきや。されど乞ふこれを見よ。ランプのほやは圓きが常なり。名刺の形は四角が普通なり。さはれ幾年の後、ナミ外れたる、四角なホヤと圓い名刺が、世に流行するの時、あるやも知れず。我は今日よりしてそれ等の專賣權を得置きて、一もうけて見むと思ふ也。

◎「我は天爵を以て足ると。成程天爵も、全く何物も無きよりは勝ること万々也。されど乞ふこれを見よ。天爵に加ふるに人爵あらば、足ること何ぞ之に如かむ。華族廢止論は、非華族の唱ふべきものにして、所謂天爵を以て足る人の吐くべき議論なり。吐く可らざる人にして此論を云ふ、故に立ち消えて跡もなし。華族たらざる時は廢止論を唱へよ。華族たらば直ちに之に反對せよ。賢き世人は皆汝を稱せん。

冷語錄

さ、まさ 生

◎冥想の吾人に必要なるは、糧の缺く可らざるが如し、一日之を廢するは、一日生命の内容を捨つるなり何んとなれば冥想は生命の深を爲せばなり。

◎爾の友とは何の友ぞや、飲食の友か、同趣味の友か、境遇の友か、學の友か、將たまた同窓の友か、是れ凡て不可なり名に伴へる友なればなり、名に伴へる友は常の友にあらず、其の名の亡びん時爾の友は路傍の人のみ。◎吾れと彼れと渾然融合し一身を捨つるも恨みなきの友に命すべき名吾れ是を知らず。◎怒るの悪しきは人を損ふの故にあらず、自らを損へばなり。

◎自ら爲すと人より爲さしめらると賢愚孰れぞや況んや爲さざる可らざるの理一なるに於てをや、彼は君子となり此れは奴隸となる。◎疑ふ事多きものは能く人を欺く、信すること厚きものは屢人に欺かる然れども此の人尊い哉。

◎超然とは俗に居て俗ならざるの謂なり、居る所の然るにあらず、居る人の然るなり豈敢て



居る處の清汚を問はんや。

●自ら禍心を懐かずんば他人の禍を知る能はず。桀紂を愛するは桀紂の徒なり。同は心を知ればなり。

●己の禍心を深く藏して人に強ゆるに禍心あるを以てす、是れ小人なり。更に窮地に陥れて自らを利せんとするは是れ悪人なり、而して他人之を知らずと思へり、其の愚及ぶ可らず。

●己れに出でたるもの己れに歸ると。天に向つて吐きたるつばの歸りて己が面上を汚さずんば幸なる哉。

●多勢の中で己の強き事を表はさんとする者は最も弱き人なり、彼は最も弱き人なりと言はるゝを忍ぶ能はざる人なればなり。

●生は貴し死は重し、一旦の事に生を屠して死を妄りにするは匹夫の勇なり、英雄死を思ふ

て泣くと、生を輕んずるは價值なきの徒のみ。

●死は最後の評價者なり、凡夫と偉人と此の瞬間に於て千里の差を生ず

●死を侮るは匹夫なり、死を恐るゝは怯者なり、死を思ふて肅然襟を正うするは夫れ君子乎。

●壽久しければ耻多しとは匹夫の謂か、死を思ふ時吾人は聖人なり。

●死すべき時に死せざれば死にまさる耻ありと。豈夫れ死のみならんや。宜い所で切り上ぐるが智者なり、死もこゝに至らば生よりも光榮なり。執着の念強きが故に愚者と云ふなり。

●暴を以て利せんとせば暴を以て抗せらるべし、智を以てせば智を以てせらるべし、二者共に自滅の禍をなす。徳を以てするもの獨り久うするを得ん。

●過去に於て辛酸の涙をそゝがざる信仰は畢竟

偽のみ、日々遊惰の中に得たる信仰果して何の價ぞ斯の如き信仰は禍なる哉。

●内に燃ゆる名譽の勃々たるあり、外一度利慾の誘惑に遇ふや忽ち無明の暗の奥底に陥らんとする者は憐むべき哉、斯くの如き者は外界の事物に支配せられ萬の拘束を脱する能はざる者也自己の尊嚴を脚下に蹂躪する者也、斯くの如き者熱烈なる宗教的信念を有せりとは如何にしても信する能はず、憐むべき者よ、汝の本心に歸れ、而して良心の聲に絶体の服従をなせ。

●我を支配する力とは何ぞ曰く偉大なる力のみ言はん、我を支配する力は同時に宇宙を支配する力なり此の力より脱する時は墮落の時なり、此の力の上にある時、我は絶大無限の權威を有し尊嚴を有す、月や花は只我が爲めに飾る自然の意志なり我なければ自然は無意味

なり、宇宙は暗なり、信念はこゝに出でざる可らず、然らざるもの凡て偽なり、然らずとするも一時の出来心たるのみ。

●或る對象に自己を没し依頼して幸福を求め現世の苦患を逃れんとする者は卑怯なり、かくの如き者その對象の亡びんとき凡ての物を喪ふの人なり、佛陀は或る對象に頼托して未來の光榮に憧憬せんが爲めに九五の位を棄てざりき、あゝ自覺なる哉自得なる哉。

●心虚神清と何等高潮の言ぞや、虚清の裡釋迦も孔子も吾れに於て不要也。

●年若き宗教家に最も偽善多し、試に日曜日教會に行きて所謂信者なるもの、面容を見よ、何ぞ其の野卑なる、彼等の心事夫れ知るべきのみ。

●校風發揚を叫ぶ聲は各人の自覺の聲ならざる可らず、一時の出来心は斷じて許さず、而し

て自覺の聲は、掩ふ可らず、摸すべからず。自覺とは自覺なればなり。

### 所謂運動會全廢説

●吾人は自由を愛し壓制を憎む。壓制の下に生きんよりは自由を得て死せん哉、

●近時北辰文壇の振はざるや久しい哉、論壇に於て最となす、一昨年以來勃興したりし校風、發揚の聲は今や果して如何状ぞや、七百の校友は已に忘れたるもの、如し、吾人私かに期したりき、北辰誌上必ずや校風に關する雄篇大作出づべしと、何ぞ圖らん一篇の校風論、一言愛校の文字を寄するもの無からんとは、吾人校友の意氣を疑はざるを得ず、況んや近時詞壇纖弱の文字小説の類甚だ多きをや。稜稜たる意氣、堂々の霸氣、不拔の雄心、何處にか見得べきぞ、嗚呼、吾人甚だ喜ぶ能はず。

曩日運動會全廢説を提出したる者あり。言や嘉すべく、説や誤れりといふべし。かの衛生部云々の如き、吾人その何の謂たるかを解せず。思ふに説者と雖もなほかの監獄を見て、國家が犯罪者の多く來らんを待ちつくるものなりとまではこぢつけ得ざるべし。然れどもその競技者に對する感想の如き、畧々吾人の意を得たるものあるを覺ゆ。方今學生眞摯の風を飲けるや久し。競技の間二三己れに先んずるものあれば既に意氣沮喪の色あり。勝算既に逸せりと見るや直ちに戦列を脱し以て己が先見の明あるを銜ひ、而して敗を知つてしかも奮然猛然技を續くるもの愚を嗤ふ。終始熱誠ベストを盡さんとするもの果して幾人かある。思ふに彼等の眼中に映する所の者は勝敗の末に在つて運動そのも

のに非ず。説者をしてこの言をなさしむる又故なきに非る也。

説者。説者はかの敗徳者多きを見て、直ちに自ら道義そのものを破壊せよと企つる者なるか、抑々また彼等の汚血を一洗し彼等をして道義の澤に浴せしめんと努力するの勇氣を有せざるものなるか。(鈍生)

然れども未だかくの如き理由の下に、我運動會は決して廢止すべきものに非ざる也。何となれば、説者の慨嘆に値するものは、競技者のレヴイーチーに在つて決して運動會の性質そのものに非れば也。いかにかの號砲は心胸に一種の勇ましき響を傳ふる事よ。懦夫は既にそのスタートに於て膽くぢかるゝ也。いかに選手レースは衰へたる志氣を興奮せしむるに力ある事よ。僞なき友愛的援助の聲はこの時を以て最強高音となす。

重て言ふ説者をして運動會を以て婦女兒に諷る慰み物なりと慨せしむるに至りしは運動會の性質そのものに非ずして企會者及び競技者の失ならんのみ。廢止すべきは競技者のレヴイーチーにして我が運動會そのものには非る也。借問す



## 部 報

## 野 球 部 報

回顧せよ追懐オモいで多き昨秋の野球部を、如何に我等が歴史に波瀾あり、曲折ありしか、戸塚原頭トツヅカノハラに鍛へし腕を我は誇りて歸來せしより、一中軍を微塵にし更に富中軍を迎撃せり。三春の行樂、討つて醒まし得ざりし恨は胸底深く刻まれたり。三高討つ可し、時は今にあり、機逸す可らずと、白箭空を飛んで吉田に落つ、我等南天を望みて待つこと久し。時に我校元老の藤崎、海部、石渡、町田、加藤、不破君等諸兄、いで昔執りたる弓矢の腕、若殿原が試めしの刃先に立たばやとグラウンドに砂塵を卷いて攻め寄せらる。敵なくして徒に苦みし吾等が喜をも幾許ぞや、今に諸兄が後輩に厚かりし情、忘るゝ能はざるなり。かくして試合は十一月二十二日を以て決せらる可く定まりぬ。我祖の恨霧らすは、やがて來らん其日なりと、雨降らば降れ、吹かば吹け我等が熱血にして怒るあらば彼等の威力は微塵のみ、朝に夕に南天を望み鐵腕を撫して日の歩の遅きをかこてり。時に我校熱誠の士は選手立つ何ぞ黙する可ならんや、絶叫未だ終らざるに無限の同情の結果は忽にして我等に寄せられぬ。佐藤、堀田、富田三兄に對しては繁劇なる學業の寸暇をもさきて終始周旋せられたる、感謝の辭なきに苦む次第なり。かくて我等の意氣は益々揚れり。更に見る我演説部は其歴々の士を以て我等の行を盛にせられ、熱血の士は突如叫んで云ふ、選手を擁して京洛に向ふ可しと、我等茲に至りてか己に感謝の辭なきなり。かくて數百の健兒に送られて十一月二十日の夜、多大の使命を帯びたる我等は應援隊諸共に歡呼聲

裡に西京に向いて去れり。

もなし。

二十二日午後一時過ぎ、審判に關し彼我議定まらず、或は京大の先輩を煩はし事頗る困難なり。然れ共孤軍遠く敵地にあり云ふ處理あれ共聲小なるを如何にせん、遂に二時、三高出身の白河氏審判の下に見よ戦は開かれたり。刻は刻を追ふて進み、戦境漸く我れに利あらず、應援隊は熱聲を絞りて甚だ勉む。然れ共、嗚呼。敵のバンド急にして、我が秋水空く折る、雲慘として低く垂れ、秋風鎧袖を縫ふて胸奥に徹す。機や去りぬ、機や去りぬ。最後に和智が收めし一點を以て戦終れり。時に日漸く暮る。十四對一。陰風鐵衣に荒み、秋露袂に冷かなり。血涙臍ろに眺めやりし比叡の峰、春や半の夢さめぬ花入相の鐘に驚き散る間より仰ぎ見たりし其峰を、今日は秋風蕭條たる吉田が原の夕まぐれに血刀抱いて再び見んとは切齒瞑目、語る者も問ふ者

二十三日恰も都攻めにありし神戸軍に挑む。然るに不幸にも神戸軍此日三高との戦に捕手傷き遂に刀を交へずして別る。遺憾極りなし。二十三日朝大學の先輩に送られ三度恨を留めて去る。魂や那邊に飛び魂や那邊に迷ふ。歸來、長劍を杖きて尾山の一角に立つ、憂髮亂れて我が思や深し。回顧せよ、回顧せよ、我等は破れたり。過去も破れたり、現在も亦然り、敗れたる過去を背にし破れたる現在に生く。我等は北天徒らに密雲閉さんとするを見て、此處に自己を明にし且つ我等が前途につき確固たる信念を持す可きなり。確固たる信念を抱く可き點につき我等をして少しく思ふ處を言はしめよ。衆口叫んで曰く、我校風を革新せよ我校風を發揚せよと、聲の大なる即可なり然れ共實質の伴はざる時に於ては天下の笑ひをいかにせむ、而

我等の先輩、我等の同儕は果して之れが所謂革新なるものに又發揚なるものに盡せりや、若し之を問ふ者あらば我等赧然たらざるを得ず、然れ共我等の先輩、我等の同儕之を勉むるを怠るに非ず、煩雜なる學業に縛せらるゝありて、他に更に奔命を要求するは、求むる事の大にして應ずるもの、餘りに不自由なるを如何せん、更に思ふ革新とは如何、發揚とは如何、之れ即ち自己の身命の粗上に於て最後の一撃を下さるゝ時、眞性の煥乎として輝くを第一義に活動せしむるのいひに非ざるか。

水滯溜すれば即腐敗す、安寧とは生物にとりて最大の疑問なり、我等熱血の脈管に奔流する青年に極度の安寧を與へんと云ふは最大の疑問なり。「案へしむ」可ならずとせず、我等は尾山城の一角に塵寰を離れて勤儉尙武の氣風の中に道義の大道を濶歩して、穹窿の大なるに一石片の

小なるに萬象の默示を解せんとす、「案へしむ」即最も可なる也、然れ共「案へしむ」之我等に與ふる最初にして又最後の福音たるか、之やがて勇飛跳躍の第一歩に非らざるか、之を汚流に投じて廓清せしむる爲めに與ふ第一歩に非らざるか。

脚下に小流あり、不圖草葉を取りて之に投ず、流れのまゝに去る事瞬時にして遠し、更に小石を投ずれば、小波を裂きて河底に沈む、水面に達する迄は小石も草葉も地球引力の法則に従いて落下したるなり、然れ共一は河流に逆いて沈み他は河流に押されて流る、此差そも何の因ぞ。我等は時代潮流に従ふべく尾城に其歩を入れし者か、時代の潮流可ならば之れに生く敢て不都合に非ず、然れ共自己か潮流と共通性あるや否やを知らずして徒らに浮沈するは我等の欲せざる處又我等を指導する者の求むる處に非らざる

可し。「案へしむ」とはやがて自他を明に辨別せしむるにあり、而自他を辨別せしむるに或は修養の結果知らずく之を得可し、然れ共頭上に一喝を加へ咄嗟の間「汝の位置を」知らしむるを最も簡要なりとす。朝夕心膽を練り日に三省するは一般の部類に向いて齊しく望む可らざる處、故に情氣生ずる曉に革命の大喝は、死の恐怖は忽然として下るなり。

「案へしむ」事をのみ學び、時代の潮流に従ふ事をのみ學ぶ者は此革命の大喝の裏に、死の恐怖の裡に希望の光を認むるを得ずして空しく倒るるなり、即前者は頭腦を有して力無ければなり、後者に至りて頭腦も力もなく人間としての存在を侮辱する者なり、生存の價值全く無き者なり。今我校に革新の聲を聞く、聞く可くして聞くは我等の大に喜ぶ處なり、されど果して之を叫ぶ者革新するの力ありて叫べるか更に進みて革新

後に大河の東天に朝するか如く理想の光に向つて進む可く衆に教ゆるの力ありや、密に恐る其叫の單に「案へしむ」の結果より算出されしに非らざるかを。我か同人よ、過去、現在、未來を一貫せる我等七百の健兒を運ぶ航路を眺むる時兄等は慄然として或る恐怖に打たるゝならん、自己を忘却して一流の黒潮が誘ふがまゝに帆走れる我等の航路は、そも理想の彼岸に向ひつゝありや、今にして之を救はずんば我等の未來は知る可きのみ。以上に革命の大喝を聞く事もなく、死の恐怖をも知る事なくんば流れのまゝに去らんのみ。事茲に至りては「案へしむ」の結果か生みし叫ひのみでは覺醒す可くもあらず。只一法あり、命を粗上に横へて生か死かの何れかを問へ。即ちあらゆる物に於て我等に對外の仕合を與へよ、我等か劍を他の劍に交へしめて而我等は北辰の光

すややかなる尾山城に生く四高の男子なる事を、深く深く心魂に刻ましめよ。故紙堆裡に兀兀として古人の糟粕を嘗むるが我等の使命なりや、大乾坤裡に喝破するか我等の使命なるや。問ふをやめよ、我が行く道を行かしめよ。過渡には拘泥あり、然れ共拘泥の煩を拂はずんば、滔々として墮落の深谷に陥らんのみ、於茲か我真を明かにするの点に於て「下根衆生の迫害何かあらむ」勇猛稱進の志を起す可きのみ。

満校七百の友よ、我等が覺悟は明らかなり。過去も破れたり、現在も破れたり、過去に執着して未來を恐怖するは小人の愚のみ、我等何んぞ其愚を學ばんや。我等は敗を重ねる度に、更により大なる不撓不屈の精神を振り起し南下を續行せん。我等が戦力の輝く限りは、我が若き日本は興國の途に安堵せん。

記憶せよ満校七百の健兒！我等は富嶽の白雪

を、芳野の紅英を天下に誇る大和民族の精髓ぞ。我が祖は男子の恥を知れり、我等はより多く知るを敢言す。

一步の拘泥は一步の墮落を、深うするのみ、兄等乞ふ我言を聞け。(一月六日稿武男)

### 五箇の莊を訪ふ

天の岩戸を開きて常世の闇を破り給ひし手力雄命しづまりましてより、茲に幾千年、五峯突兀として天を刺し、千丈に餘れる白水の瀧、萬古の積雪を流して未だ盡きざる庄川の上流、越中の南端、飛驒と犬牙境を接する處、五箇の莊なる異郷あり、其山水の幽邃なること他に其比を見ず、山は高く、谷は深く、萬年の老杉亭々として山氣自ら送り、猿聲夜鶴水の音に和す、烟霧の癖ある人は、よろしく一遊すべき處なるに。

山嶮しく道細きが故に、往いて觀光の遊を爲すもの殆んど絶無、其の風光の如き未だ文人の筆に上らず、われ五箇莊の爲めに之を惜む。

「村落の數十餘り、戸數九百餘、町村制施行後は別ちて、上平、利賀、平の三村となりたれど、總稱して五箇村又は五箇の莊といふ、傳へいふ、平家の落武者此處に難を避けて今日に至ると、然れども何等確實の根據なきを以て見れば、單に詩的傳説と見做すも妨げざるべきか、住民の語音は多くの山中に於て然るが如く、雅にして正、婦女の容貌も端麗にして自ら京人の風采あり、一家大抵、二三十人の團欒を見る、之れ相續者の外は結婚を許さずして分家の制なきによる、肥後の五箇村に於けるが如く、『自ら平家高貴の人の御末なりと高ぶりて、世の人を輕んずるが如き風情は樂にしたくも見る能はず、この村にありて所謂『平家高貴の人の御末』なるかを

想はしむるものは左の俚歌にありとは、

烏帽子かりぎぬぬぎすて、

越の深山の柚がよひ

あゝ、何等の樸雅、何等の高韻ぞや、昨は後園に蝶を逐ひ、深窓に花を詠せしもの、今は即ち荒村破屋、檜木笠を傾けてこの悲涼の歌に悶を遣る、天下有情の人泣く可き哉、(烏水氏の日本山水論に學ぶ)われ一遊して以爲へらく、此の異郷に遊ばざる者は未だ共に天下の山水を談ずるに足らずと、

明治四十一年十月、我北辰會遠足部は空前の壯舉として、五箇の莊行きを決議す、山は秋を経て景轉々淡く、秋は山に入りて氣益清き時なれば、此行を賛し來り會するもの八十餘名、何れも鐵脚を以て誇る一騎當千の健兒、あらゆる不便と粗食とを覺悟して起つ、夜來の雨の痕、途上の微濕に残りて氣づかひし空幸にはれたる

に、心自ら勇み立ち、午後三時淺野川に向ひ學校を發す、いくら脚が強いからとて、馬の眞似は出來ず、日短かければ、二俣近くに到るに日は情なく暮れはてぬ、茶店に憩ひ、夕食を濟ませて、兼ねて用意の提灯に火を点す、幾拾の紅燈右にゆられ左に動き暗を破つて進む様面白しとも面白し、日頃の雨の名残り、途上は泥濘膝を没し、上り下る坂又坂のはてしなく、一深一步、路は少しも抄取らず、心は脚に先ちて泥濘にすべりて尻餅つくもの少なからず、歩行にはいよいよ困難を覺えぬ、八時頃福光町を通過し、城端ジヨウハナ近くなりしに町はづれに、豊年の満作祝ひの催あり、手拍子揃へて躍る様いかにも面白し、流石は其道にかけて抜け目なき寺崎君の如きは早速スケツテブツク取り出し、「今少しだから待つて呉れ〜」。

今宵は城端町本願寺別院に宿を借る、明日よりは煙草一本求めんとするも能はざる山又山の深山に入る事なれば皆思ひ〜に魚の干物草鞋等を買ひ込む、床に入りしは彼是十二時に近かりき、枕並べたる友の寢像あしく、しば〜足を光武ならぬ我腹に加ふれども寢たる者には罪なれば腹も立てられず、はじめの程こそ拂ひのけたれども遂には手も疲れ果て、拂ひのける勇氣も失せ、いつしか夢路を辿る、

味爽旅装をとのへ天柱石に向ふ、「あはれなる」女郎花、野菊の咲き亂れたる中をかき分け進めば、やうやく爪尖上りの坂路にかゝる、初めの程こそ威勢よくかけ登りたれ、行く事町ならずして途は俄かに峻はしく、一步は一步より苦しく衆疲れて上る事能はず、誤つて頂上かで見あげて上りて見れば頂上にあらず、登る道のはてしなきに失望する事言はん方なし、山は未だ高からねども谷深く、目の及ぶ限りの峯

峯は所謂満山みな紅葉にして四顧應接に違あらず、翠色滴らんばかりの雜木は四面の紅葉との調和を保ち、滿目翠樹ならぬ處は紅葉、紅葉ならぬ處は白雲涌く、何等清絶幽絶の眺めぞや唯あまりに僻地にあるを以て夜の錦のたとへにもれず見る人もなくしてむなしく秋を飾り又空しく散る惜むへき哉

尙ほ登る事幾町、左方にあたつて淙々たる聲を聞く、之れ二條の飛瀑雷の如く震ひて空より下るなり、夫婦瀧メテウタギといふ、思ひがけぬ處に、思ひも寄らぬ景を得て吾も人も心頓に躍りぬ、之より道は益々峻悪、峻路といはんよりも、むしろ天梯といふ可く一行數十人魚貫しつゝ、風に御して空にのぼる、

杉峠の絶巔に近き頃となれば杳か右に千年の雪を以て冠せられたる白山を望むを得て一同思はずフト叫びぬ、左を向けば立山連峯儼然として

雲表に聳立し吾人の前途を祝福するかとも思はる、杉峠を越せば、天柱石迄は二十丁餘り、下梨に一里半と聞いて衆俄かに元氣百倍し、草鞋の紐しめ直して走り出す、天柱石に到る途は頗る不明にして道を失する事一再にして止まらず、辛くも案内者を得て、巖角を踏み、草をわけ下りつ上りつ行く、音に高き天柱石、今や眼前に現はる、かと思へば心何となくうれしく、鼻孔天に朝して上る急坂も何の苦もなく手と足とにて歩き行けば、あら不思議やな、眼前に横はるは魔神か天女か、あらず、萬丈の巨巖天を突いて聳立す、神劔か鬼斧か、奇にして怪、人をして眼を眩せしむ、飢えたる者は天柱石を前にし綺縮繡錯たる景を背とし握飯を食ふ、粗飯悪茶もなほ人をして盡き易さを惜ましめたり

傳へ言ふ、天柱石は今の位置よりも昔は數百丈下の谷底にありしが一日農夫其側を過ぎりし

に、石は聲を擧げて、汝は神の御使なり、われを山上に移し國の柱石とせよと叫びぬ、幾億萬貫の大怪石、いかでか凡夫の之をよくすべき、御石の仰せは奉せんと欲するも空拳を如何せんぞ躊躇するさまを見て、石は再び聲張り擧げて藤蔓もて赤子を背負ふが如くにせよと命じぬ、正直な農夫は命せらるゝが儘に爲せば不思議にも石は安々と動かすを得て今の所に移したるなりと、われ其眞偽を知らず、想ふに天柱石は現今のよりも高かりしが風雨地變の爲めに埋められて現狀の如くなりしを、世の奇を好むの士が有難みを含ませる爲め、斯くの如き孟浪無稽の臆説を爲すに到りしにあらざるなきか、市虎誤傳、信すべからずと雖も、詩的傳説の一としてしばらく記して讀者の參考に供す、

疲れたる者も、元氣な者も共に下梨に集合して休憩す、皆思ひ／＼茶店、農家にプッシングして、柿を咬り、茶をすゝる、郵便局あるが故に知己に向け珍らしき通信を發する者も多かりき、下梨のスタンブ永く記念とするに足る可し、村の者の驚きは一方ならず、中には兵隊さんが來たからと叫びつゝ走り行く稚兒も見受けたら、余が慰ひし家の主、國は何處と尋ねしかば、花のお江戸よと言ひしにお江戸とは北海道の事かと折返して尋ねき、東京の事なりと説明すれば、われも若かりし折一度知人を尋ねて上京せし事ありとて頗る得意顔なるはひとり我に向ひてのみならず、この翁が一生村人に對して誇りの種なる可し、お役は、兵隊ではなし、測量師にてもあるかと問はるゝに、唯の素寒貧の一書生、山水を愛するがまゝ、此の異郷に遊ぶなりと云へど、いや／＼隠し給ふともかくされぬお風体、之れで書生とは受取れずといふ、洋服はエライ人の着るものと心得たるなる可し、翁の如きは

眼中文人なく詩人なく科學者なく政治家なし、收穫し得たる稗を食ひ、釣し得たる魚を酒にかへ、濁聲あげて柚林の月に樵歌唱ふこゝは文明の空氣に遠ざかりし丈け罪もなく無邪氣なり、日は高けれども行手は尙遠きが故こゝを發し庄川を溯り、明治の武陵桃源とも云ふ可き桂、加須良へと急ぐ、小春日和の心地よく、あつからず寒からず小躍りして行く、西赤尾町（町にあらず地名なり）に至る間奇勝甚だ多し、長さ數町に亘れる大磐石の溪中に横はり、幅せまき長溝を餘し全溪の水こゝに縮まりて流れ去る、その流れ駛く水の色碧瑠璃も菅ならず、巖に激しては飛舞盤旋して巨靈咆哮するかと思れば、兩岸直に山に圍まれて屏風を二重にたてたる如く巨巖の起臥するさま溪水の激するさま遊人の目を制せしむるに足る、もし一步誤れば身は忽ち溪谷の鬼となる可し、斯くの如きもの幾十町、特に脚の疲れたる者數名此處に宿る事とせり、

兩岸の雜木林はうすく濃く紅葉して山姫の織れる錦の色はわて見る目もあやなり、あゝ此景を眺めたる時の心地、何とか言ひあらはさん、之れよ、淘淵明が辯せんと欲してすずに言を忘るこの句、千年の前己に我が心情を言へるなり、一行の西赤尾町に着せしは午後三時、食指は頻りに動けども、草鞋さへやうやくにして得た程なれば勿論物估ふ店とては一軒もなし、さりとて食はずに進む事も出來兼ね、餘儀なく寺の住職に依頼して幾斗かの飯をたきて鱈腹つめ込む、宿と定むる桂村迄には未だ三里餘の里程あり、夜になりて多勢の者が押しかけては急に飯の用意も出來まじく、それに平和な村民を騒がせては氣の毒なりと氣をさかせて各々むすびをつくる、行方は途一層峻にして日も暮れなば慣れし者でさへ歩行に困しむと聞いて一行の内の

次の日山毛櫛尾峠に於て本隊と合する事とし健脚家は厚く禮を述べて西赤尾を去る、

西赤尾に於て案外餘計の時を費したれども、それと比例して脚の疲れも去りしかば、南下の歌、

校歌、戦友、二部の歌等交々喉もさげ山もくづれよと計り怒鳴りながら行く、八十の聲に山彦

倍加して元氣益々加はる、滌々たる庄川の流れば亂山を繞り堰かれつゝ流れ行く、未來の追ふ

こと急に、過去の遁ぐるること早く、現在の留まることが短きは水の相なるかな、汗を拭ひつゝ崖

に佇み、水の藍色に惚れて居れば自然の精霊と人間の心魂と融然和合し、羽化して登仙の想ひ

あらしむ、此の境地に立ちし者こそ自然の洗禮を受けたる者といふ可く、此の境地に立たんが

と、浦島太郎の龍宮へ遊びしときの氣持もかくやありけん、行く事里餘にして日は全く暮れて

左右を辨すべからず、乃ち例の提灯取り出して火を点す、道は峯の中腹につくられ石の磨滅によりて人の通行出来るを知る位故ゴロ／＼する

石の爲めに草鞋の紐を切る者幾人なるを知らず、晝ならば定めし奇巖立ち異木横はりて造化

の妙を味ふを得しならんも今更せんなし、右は峯左は崖の細道、かすかなる提灯の光りに僅かに

脚の支へを求め一歩一歩して進む、余が脚場を頼みて踏みし石如何なる機のかガクリと

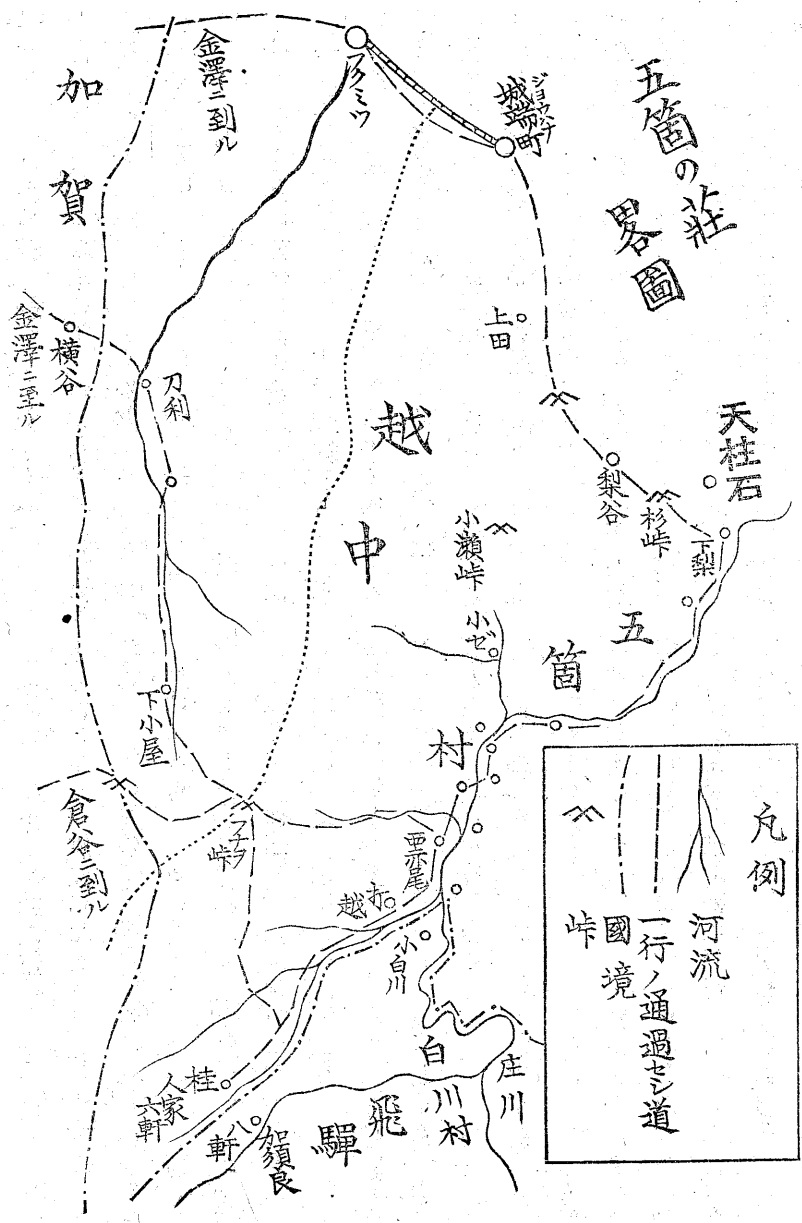
音してゴロ／＼ころがり始めぬ、アット叫びて辛くも隣の友に襟首握られわやうく一命をつなぎ

留めしも、あはれや石に手なし、木につかまる事能はず、見る／＼樹を裂き枝をくだき、すさ

まじき音して下りゆき他の巖と闘ふなど壯烈云はむ方なし、われ始めて生きかへりたる心地し

たれど、口言ふこと能はず、体動くこと能はず、相顧みて茫然として佇立せしが、はては谷低に

五箇の莊畧圖





落ちたるにや岩の響も全く聞えずなりぬ、  
 太古の民さながらなりてふ桂村に着せしは八時、  
 過ぎ、古へより未だ曾てかくの如く大勢の者の  
 押し寄せし事全くなかりし桂村の者共各家より  
 出て来て眼をキョロ／＼させるもおかし、一行を  
 二分し一半は此の桂村に一半は河を渡りて山向  
 ふの飛驒加須良へ宿る事とす、脚絆を解き、草  
 鞋を脱し、足を洗ふより早く座に上り、座に上る  
 より早く横になり、横になるより早く足を撫し、  
 喟然として嘆聲多きは草鞋にくはれて豆の生じ  
 たるを知る可し、即効紙を貼るものあれば、焼  
 火箸をおしつけるものあり、中には桂よりも飛  
 驒の方で一夜を明かした方が面白いから君も行  
 き給へとすゝめても、ヂス、プレス、イズ、ベタ  
 ー、と弱音を吐く者も見受けられき。  
 かくて一半は河を渡り案内せられて飛驒加須良  
 へ行く、木の葉に埋るゝ寛の乗ならで、露音な  
 ふものなき此山里に珍客幾拾人來し事とて歡待  
 至らざるなし、細流に足を洗ひたれど下駄を忘  
 れたりしかば側の婦に其由頼めば自分のよそ行  
 き用のなる可し、また新らしき下駄一足齎らし  
 たれどマサカ濡れた足ではくも氣の毒と思ひ友  
 におぶさり座に上る、西赤尾にて用意したるむ  
 すび取り出し爐を圍んで夕餉を始む、Next morning  
 三三三を覺悟したる事故何も心配に及ばぬと制  
 せども大根の汁を馳走されしはうれしかりき、  
 疲れし者は早や外套引き被りて横になりしが、  
 村の様を知らんとする者、世の狀況を知らんと  
 して尋ぬる村人に答ふる者、共に喃々として語  
 り終る處を知らず、時を見れば早や十時を過ぎ  
 翌日の行程も短からねば名々夜具を覆ひ寢に就  
 く、諸先生及び余等數名有志の者尙ほも爐を圍  
 んで語りつく、興は益々涌き奇談は續出す、  
 平田先生には流石職分がら

「こゝには巡査が何か調べに来る事はあるかね

主人「一年に一度位は来る事もありますが、それ

も来たり来なかつたりです

平「郵便などはどうするんだら

主「郵便ですか、それは配達して呉れません、三

里も先きの村で留置きです、

ちや先日の手紙はどうして見たのだね」とは林

先生の質問、

主「あれは向ふ桂の者が持つて来て呉れまし

た、

越中桂には下梨郵便局より二三日毎に集配人  
 が来れども河一つ離れた此の加須良村の者は未  
 だ文明の利器の使用を許されざるなり、  
 平「盗賊なんども居るかね

主「私が生れてから偷まれた事を聞いた覚えが

ありません、まさか遠方から盗みに来る奴

もありませぬ、ハ、ハ、

平「學校は無かるうが、どうするのかね

主「それには全く困つて居ますが、ご一にも仕

方がありません、唯字の少し見える者が夜

でも教へてやる位のもので迎も充分なわけ

には参りません、それに新聞も来ませんか

ら世間の様子は一向知れませんか、たまに

村の者が金澤か城端へでも行つて聞いて來

る位のもので、かうして、あなた方が來

て下さると色々新しい話も聞かれるし賑

やかで誠に結構です、どうぞ之にこりすに

毎年來て下さい、不充分でも寝る所と食ふ

物には困りません、御覽の通り此の家は五

階ですから二百三百の人が來ても大丈夫で

す

「皆丈夫相だが病人が出來たらどうする」とは市

村先生の質問、

主「之でも腦病もありますし、胃病もあります、

別に醫者とはありませんから買ひ薬でや

つて居ます、奇妙な事には村の者で他の場

所で死ぬ者は一人もありません、町に働き

に出て居ても身体の具合ひが悪くなると

、皆戻つて來ます、コンナ田舎に歸るより

も町に居れば醫者にも雇われて結構なもの

う云ふものか歸つて來ます、きたいなもの

です」

ジョン、ハワード、ペーンの「樂しき家庭」も惚

ばれて思はず、ホームスキートホームと叫び

ぬ。

げにや他郷客遊の士には故郷ほど懐かしきもの

なし、生れて郷土に衣食し未だ郷關を出でざる

ものありては其の關係の餘りに親密にして常

住なるが故に何等の感覺もなく經過するを常と

すれども、一たび郷關を出づれば忽ち懐郷の念

湧然として胸中に迸出す、之れ人情の免るゝ能

はざる所、

青海原ふりさけ見ればかすかなる

三笠の山に出でし月かも 仲 麿

唐朝三代の寵遇を受け、樞要の地位を占めし人

に於て猶ほ且然り況んや其他をや、胡馬は北風

に嘶き、越鳥は南枝に巢くふ、遊子豈望郷の念

なからんや「青ヶ島や、南洋渺茫の間なる一頃の

噴火島爆然轟裂火焰々天日を焼き石を降し灰を

散し島中の人畜殆ど斃れ盡く、僅に十數人の舟

を載して災を八丈島に逃れたる者あるのみ、而

も此十數人竟に其噴火島たる古郷を遺却せず、

火の熄むを待つこと十三年、乃ち八丈を出で、

欣々乎として其多災なる古郷に歸りきシユムシル占守や窮

北不毛の絶島、層氷疊雪の處のみ、後開拓有司

の其土人を南方色丹島に遷徙せしむるや、色丹

の地ラネ棋楠樹青蒼、落葉松濃やかに黒狐、三毛狐

其陰に躍り、流水涓々として處々に駛り、玉蜀

黍獲べく馬鈴薯植うべく、田園を開拓する者は

賞與の典あり、而も遷徙の土人、新樂土を喜ば

ずして歸心督促三々五々時に其窮北不毛の故島

に歸り去る」(日本風景論)

「花は根に鳥は古巢にかへるなり」加須良の民、

秀麗の故山に歸ると雖も何ぞ怪しむに足らん、

時計を見れば早や十二時を過ぐ、話の名残りは

盡きざれども各々床に入る、余は明日の天候如

何にやと戶外に出づれば霜さゆる十月末の星月

夜、銀河一道中天を横断して、北斗七星わが頭

上に高し、夜も更けたれば、人籟地籟全く絶え

て物なく、聲なく、幽又幽、凄又凄、乃ち屋内

に走り入り、うすき、かたき蒲團の中にくるま

りて臥したれど、今夜は暖くも快くも覺えぬ、

晝の疲れの賜物なるべし。

左様なら〜といふ聲に送られて、加須良、桂

の村と別れしは午前七時、之より一行は山毛櫨

尾峠ヲへ向ふ、幸に今日も亦空晴れて全く詭へ向

きの好都合、誰れの顔を見てもうれし相なり、

日頃は閻魔大王が唐辛を舐めた様な顔して字引

を咬りコンパスをひねくる連中も此景の前に

は。まさか苦い顔も出來ざるなるべし、道が有

るのか無いのか一向分からざる細みちを辿る事

なれば道に迷ふこと幾度なるを知らず、古草鞋

のぬぎ捨てたるを見て人の通ふ道なるを知り、

猿の如く木を分け草を踏んで進む、可成り幅廣

き急流を涉ること一回、ズボンも脚絆もズク

〜となれり、山毛櫨尾峠にかゝれば。途はい

よく嶮にして飛鳥哀猿の聲もなく、柴人樵夫

の路絶えて名も知らぬ幽花野草のみ生ひ茂げれ

り、對岸は之れ總べて紅葉、其間に數町に餘れ

る巨岩所々に孤立し、岸勢犬牙差互して盪撃益

暴にして其の涯を齧む、神劔鬼斧を形容せんも

陳腐なり、唯奇絶と叫ぶの外なし、峠の頂に達

せしは十一時、一同食指頻りに催して止まず、平げたる間もなく響く一發の砲聲、先鞭ならで依て腰をおろし三十分餘り休憩、林先生外數名はこゝにて一行に別れ豫定の行動を取る可く倉谷に下る、始めは此の峠を越し倉谷を経て歸校の豫定なりしも土人の話によれば近年倉谷への交通全く絶へ、橋の如きも有るか無きかさへ不明と聞いて、俄かに豫定を變更して下小屋を經、淺野川谷より小立野に向ふ事とせるなり、「大食、をすれば、道を行き難し」とは馬琴の教へたる處、さりとて空腹となりては如何とも爲し難し、山毛櫻尾峠にて食せし晝餉も刀利、横谷村邊りになれば腹中又一物なく、買はんとすれども物賣る家もなし、空腹の爲め飢えて死ぬ者でも出來ては事面倒なりとて委員二名一足先きに石黒俣村に走り甘藷を用意して一行を待つ、芋の量驚く勿れ三十貫、人もわれも舌うち鳴らして飽食す芋喰の大將と聞えたる某の君、幾十本かを

先屁を着けられたりと駄じやる聲も聞えぬ、こゝより金澤までは最早や三里足らず、設令、日は暮るゝも、夜は更けても砥の如き一本道、何のまがひもなきに一同安心して思ふ限り脚を撫で、休む、中には横になりて前後も短らず眠れるもありき、われ俗累を脱して五箇の莊に遊ぶこと二日、靜寂太古の如き山中に風に御して曉に天梯を躡み、雲に伴うて夕に破屋に眠る、王侯に謁して、浮世の外の奇花異卉を摘み、崖上に恍惚として天樂を聞く、この間の消息、人間には傳へ難し、況んや情懷語らんと欲してすでに言を忘れたるをや、凡骨未だ庄川の水に洗ひつくされずして、またも淺野川の流れと共に落ちて人間に下る。(西村眞一郎)

一行が世話になりし人々の家を後に訪ぬる人のよすがにもとて左に記す、

富山縣東礪波郡上平村大字桂、八四、

山田九郎平(區長)

同 八五、

表 興 吉

同 八三、

中谷宅次郎

同 八六、

井 波 六 郎

飛驒國大野郡白川村字加須良

中野清四郎



雜報

叙任

四十一年十二月二十八日

陸軍歩兵中佐 田邊盛親

講師ヲ囑託ス

校長訓辭

今回文部大臣ヨリ接受セル訓令ニヨリ茲ニ親シク其旨趣ヲ傳ヘ特ニ諭告セントス  
大臣訓令ノ旨趣ハ直轄學校學生生徒ノ氣風ハ常ニ全國各地ニ於ケル諸學校生徒ノ模範トナリ其言動ハ恣イテ一般ニ影響ヲ及ホス事尠シトセス故ニ直轄學校學生生徒タルモノハ克ク其本分ヲ

守リ規律ヲ重シ質素勤勉以テ他ノ生徒ノ爲ニ善良ナル模範ヲ示スヘキハ固ヨリ論ヲ俟タザルナリ然ルニ近來直轄學校ニ於テ催ス所ノ講演會記念會又ハ運動會等ニ於テ當日ノ興趣ヲ添ヘンカ爲種々ノ工夫ヲ廻ラシ其結果多數ノ時間ヲ空費スルノミナラス動モスレハ學生生徒ニシテ脂粉ヲ施シ假裝ヲ爲シ往々演劇興行ニ近キモノヲ演スルヲ見ル斯ク如キハ當該學校ノ風紀ヲ弛フシ浮薄ノ弊風ヲ助長スルノミナラス一般ノ學風ヲ廢頹セシムルノ虞ナシトセス故ニ自今右等ノ行爲ナキ様十分注意ヲ加フヘシト云フニ在リ  
抑本校ハ夙ニ教育ニ關スル勅語ヲ奉體シ至誠ヲ以テ校風ノ本領トナシ實質剛健ヲ經トシ勤勉勵精ヲ緯トシ戊申 詔書ニ所謂惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシトノ聖旨ヲ實踐シ淳厚恪勤ノ美風ヲ振起センコトヲ勉メ運動會及其他ノ諸會ニ於テ

近年著シキ弊害ヲ認メスト雖モ此際尙ホ互ニ改ムヘキヲ改メ誠ムヘキヲ誠メスンバ終ニハ浮薄ノ弊風ニ感染シ善良ナル校風ノ弛廢スルニ至ラシモ亦知ルヘカラス諸子宜シク發奮興起シ常ニ此ノ訓令ノ旨趣ヲ體シ益我カ校風ヲ發揮シ以テ諸學校生徒ノ模範タルノ實ヲ舉ケンコトヲ努ムヘシ

寒稽古終矣

萬里續紛たる西比利亞の吹雪、獵々として天地に滿ち、白山の蕨豆大の霰を卷ひて耳朶を打つの時、尾山城のほどり、天地を包む暗を破りて北辰の光突、如としてひらめきぬ憂然として寂寥を劈くは勇士劍を打つ聲、次ひて起るは琴鞞を蹴るの音、叱咤の叫び、相應じて將に天地を撼動せんとす。風も凍り鼠だに動かざりし無聲堂は俄然化して龍鬪虎驤の活劇場となりぬ。

憂々の音、呵呷の響、しばらくも止まず、あゝ是れ北辰の健兒が嚴冬三句の寒稽古にあらすして何ぞや  
何者の痴漢ぞ炬燵を擁して安逸を貪り敢て軟弱の言を爲す、  
あゝ嚴冬何者ぞ、堅氷何者ぞ、飛雪夫れ何者ぞ、  
見よ、赤裸々の壯士鐵腕を撫して雪中に立つを流る、汗を冷水に洗へば全身の血は躍りて蒸氣濛々爲に白嶺の雪や溶けん天を仰ひて熱息を吐けば溟濛爲めに雲霧や生せん。欣然微笑柄杓をかざして一と飲みすれば神氣瀦然已に四海の外にあり。足音勇ましく堅氷を踏んで厲風を叱咤すれば北海の怒濤鳴りを鎮め、眸を決して一睨すれば金龍恐れて北に落ちんとす、かくして三句の鍛練に鐵骨愈々硬く剛益強し。今や、陽氣六合に積みて梅花將に開かんとするの時、三句の苦業は既に終つて燦爛たる賞牌は光輝ある諸

君の胸を飾らんとす。亦悦ばしからずや。

(まさ)

會を以てせば、その力いよ／＼偉大なるものあるべきを信するものなり。

嗚呼久しい哉四高校風の揚らざる事や。嘗て寒潮事件に關して一嘯風雲を生動せしめんとせしより志士相携へ將に爲す所あらんとせしも爾來因循、眞に四高は統一なき一集合となり終らんとす。校風發揚を自任し呼號して立てる論壇、徒らに論鋒を競はんとせしも、やゝすれば實踐に輕きの弊あり、かの二部三部會の如きその設立日淺しと雖も各自誠意之に當らば四高の前途に、一新生面を開くべきや疑を容れず。然れども之を以て直ちに我が校風問題を解決せんとするは、靴を隔て、痒きをかくの感なくんばあらず。予輩は實に我論壇の銳を以て、臨むにこの

予輩はこの見地よりして我が時習寮大茶話會の隆盛を祈るものなり。然れどもその方法宜きを得ざればその効の大部分は滅却せらるべきや論なし。予は此の大茶話會に於ける主客の數が相半ばするは、最も兩者の間に於て誠意を交換する上に、都合よき状態を有する所以なるを知る。而も予は曰ふ。斯會の効果は唯兩者誠意の交換によりてのみ、其の効果を收め得べきものなりと。

一日雪清く日鮮かなる朝、黒質穢かに滿腔の誠意をほのめかせる一椀は本校掲示場に閃めき渡りぬ。曰はく

來會を仰ぎ、互に春風駘蕩の歡を分たんと欲す。

金城の雪後春の歸れるに似たり。茲に一夕、我時習寮は本學年第一回大茶話會を催し、積素凝華銀燭に映するの下、大に通學生諸君の

永き歴史と共に、大なる興味を以て迎へられたる本會は深く諸君の熱誠なる贊助に謝す。今や重ねてこゝに開會の好機に迫れり。

す。まづ食卓腰かけの補充、場所の狹隘、次いで賄の手落、これ等は頗る食事委員の頭を悩めたらん。寮生まろうとを皆己が自修室に招じ

若し夫れ諸君の熱誠よく本會の素志を遂げしめ、兩者の親善愈々厚きを加へ、而して互に和協一致、以て聊か校風發揚の實に資するあらば、本會の光榮之に過ぎざるなり。

人もてうづまる。廻れるは辰章の長幕、かゝるは寮生手製の萬國旗。食堂のささ殊の外心地よし。まづ矢島食事委員挨拶として曰く「かゝる樂しき團樂に共に相對座し、箸をこらんとる事予等の深く榮とする所なり。敢て美滋佳脆の口に媚ぶるなきを答むる勿れ。本會の味とする所は人別に求むべきものありて存せん。終に諸先生及び通學生諸君の健康を祝せん。」云々。かくて食卓の上甲平げられ乙降る、鳥じぶ及時習寮名物蝦フライいとめづらかなり。玉椿一啜忽ち涙滴轉々頬を落下す。嬉々の聲々恐ろしき「賄フ」の聲どをかしう耳に躍る。

- 一、會期 二月十三日午後五時五十分より
- 一、會場 無聲堂
- 一、會費 金拾錢

時習寮大茶話會

會期は來りぬ。これより曩、午後五時よりその食堂に於て晚餐會は開かれたり。食堂定員二百四十。寮生百六十、各人一人宛を招き更に諸先生の來會を仰げば、定員超過將に百に垂んと

かくて時もうつり會もはて再び響く鐘の音と

共に一同大茶話會場に入る。場所のさま常のものに似ず。縦横に走れる頭上の國旗、うちかこめる四周の星幕、花瓶の位置、奏樂所のしつらへいと心ゆくさまなり。下足番附せしは一しほのもてなしぶりなり。

まづ渡邊寮委員立ちて開會の辭をのぶ「雪を冒し來會せられし諸君の誠意深く寮生一同の謝する所なり」ついで本會開會の理由をのべ而して曰ふ「本會はたゞに兩者間に於ける耳と口とによる意見を交換するに止まらず、更に手と心を開いてその意志疎通を計る上に最も諸君の贊助を希ふものなり」又「今日北國新聞が四高寄宿舎なる冒頭の下に寮生を譏誣したり。是に就て諸君既にその狂せる謔語なるを知らん。吾人は我が超然寮の今や成らんとする寮基を確立するまでは白山崩れ、日本海涸るゝとも初志を離さず、着實なる歩調と眞摯なる態度とを以て寮の

多く諧謔滿堂笑聲を以て震撼す。巧に講談的話柄をとり而も加味するに辛辣なる風味を以てし超然主義の何たるやを擲論す。氏は之を以て擗牛の超然的に解したるや或は禪僧の超脱とせしや知らずと雖も大にその主義の實現に於て缺たるを疑ひしが如し、試に氏の勝敗の外に超然として南下敗衄の報復を思はざるが如き云々なる語句の如き明に寮生の眞意發表のたらざるによる誤解ならんか。次に宗玄君立つ、流暢春風に乗る白帆の如く論歩をすゝめ友情の美をとき終に寮生の己を忘れて通學生に表せし誠意は實に友情の粹なりと評し、砂漠をして樂園にまさらしむるものは吾人青年に在りてこの友情を第一要義となすの意をのぶ、次に金田君寮の一員として寮史をとき超然寮の生ひたちをのべ引て我が校風論の起元に及で曰く。三十八士口敢て人を動かすに足らず態度敢て花々しきものあらむ而

運命を開かん事を期するものなり」云々。次に校長の挨拶あり。先生は大に晚餐會の經過に満足の意を表せられ、かつ今回諸先生、通學諸君の多數なる來會を悦びます。相互親善の美風を養はん事を促さる。次いで三竹先生挨拶として登壇、まづ旅中四高卒業生の現狀をのべ、京都帝大に於てはまづ我が卒業生牛耳をとり居る有様なり。福岡に於てもその團結かたくかつ予に對しても大に歡迎の勞をとりたり。概して好成績なるをのべて降らる。次に田邊先生はまづ諸生は須らく勇邁果敢の氣象を養ふべきをいつて「わんじるより生むがやすし」てふ俚語を引き興味多き西南、日清日露の役に於ける經驗談に徴し肉躍り血湧くの概あらしむ。又曰く然りと雖も事は一度慎重なる熟慮を要す。「柳下常に鱗鱗を宿せず」また二三の失敗談を以て猪勇を評價し壇を下らる。次いで四高演壇の雄中村君立つ。

もその誠意は耳口ある志士を奮起せしめ遂に校風發揚論の先馳をなす。我等寮生常にこの遺志を紹いでベストを盡さんと欲するものなり。而も想足つて實舉らざるは吾人の深く遺憾とする所なり。我が超然主義に就き世人往々之を曲解する者あり。唯我が超然寮創起の事情を見よ。諸君また一二字句を以て完全にその所謂主義なる者を闡明する事難きを知らん。我が主義超然は、所謂佛者の超然に非ず、又漢學者の所謂超然に非ず。我が超然寮創建者の創設せし主義即ち之なり。而して予輩は通學生諸君に是非了知あらん事を切望す。親愛なる諸君、諸君もし我が超然誌三卷第一號卷頭に掲げたる、超然寮創建者のものせる趣意書を見れば、心中釋然たるものありて存せん云々。次に寮生乾君立つ。親愛なる通學生諸君、今夕の會また無意氣たらしむ可らず。當に大に談じ大に喰ひ大に餘興を樂むべし。

予はその食ふに方りて、今夕の如くしかく耳目の運動を要する場合に於て何等數個の栗パンカステラが諸君に生理的害毒を及ぼさざるを保證するものなり云々。次に廣澤君寮生として立つ、君口を開くや論鋒勁適、上下する所或は哲理に涉り或は實相に走る。堂々社會の徒らに過失をせむるに急にして、美性を助長するに勉めず。この靈妙なる人生を化して地球上肉塊の一經過となし去るに至るを慨す。次に寮生として文室君立つ。開口一番今日は大茶話會なりと叫び、例の輕快なる句調を以て餘興歡迎演説をなす。満堂ヒヤ／＼の聲起る。熱氣漸く高まるや乃ち壇を降る。拍手の間に代つて寮委員立つ。大に諸君の侃諤の論談を聽き得たるは一つに寮を思はるゝ親情の發現を見たるの感なくんずば非ず。爾後我等寮生益々發奮大に熱誠なる諸君の意に副はん事を期す。乞ふ互に和協一致大に校風發

揚の實を擧ぐべきに非ずや。さらばこれより餘興に入らしめんと欲す。我等の微意匆卒の間に企てしもの、たい滋味胃腸の歡を買ひたるサツパーの後主婦の出せるデザートに値ひするものあらば我等の大に満足する所なり云々。眼は直ちにプログラムに注かれぬ。

時習寮大茶會順序、

明治四十二年二月十三日午後五時五十分

開會於無聲堂

一、開會之辭

二、校長及び諸先生演説

三、生徒有志演説

四、餘興

イ、音樂

ロ、山又山……………(中寮十五、十六號)

ハ、Das ist mein?……………(南寮三、四號)

ニ、マヂックランタン……………(中寮三、四號)

ホ、幸福なる盜賊……………(中寮一、二號)  
ヘ、音 樂……………(梁瀨君諸士)  
ト、鳥部野朧月……………(南寮七、八號)  
チ、ローマ議事堂の嵐……………  
リ、濱の真砂……………(有志)  
ヌ、Die Bingschaft……………

へざるものなし。時に注意点の戰慄を語り、時に賄牛肉のかたきを嘆す。これ一つの入れ種に過ぎず。本すぢなる太郎冠者、次郎冠者はよく空想的青年の模型、神主は現代社會の代表とも見るべし、マヂックランタンは種板室員の神腕になりしもの。奇抜々々。幸福なる盜賊。あまり冗長に失す。須く短刀直入大に人心を刮るが如きものなるべし。音樂は梁瀨君不參。オルガン今様の奏樂に代ふ。鳥部野の朧月は實に悽愴。満堂忽ち暗黒の幕につゝまる。驚き凝視すれば、白骨累々。月光漸く朧なるや。數多の髑髏携へて舞ふ。青海波? 否?。倏忽烟の如く消え再夕星の如く現はる。又悽又愴。次はローマ議事堂の嵐なり。沙翁作。數齣よりなる。ローマ迅雷の夜景よりシーザー暗殺、アントニー弔演説に至る。時迫れるを以て急行せしは遺憾。濱の真砂。盜賊のよりあひらしし。頗る言詞に

心地よきオルガンの音は満堂をして水うちたる如くならしむ。次は喜劇山又山、例の書生が勸業債券當籤の日を夢み居たりしが、豫て當籤せば電報もて報せん事を郵便局に托せしに、同日飛電あり。歡喜せしも豈計らん之れ母堂より衣服に關する報ならんとは。現代書生の氣質を示せしは可。次はDas ist meinなり。之れ當日の白眉、最も淡泊にして滑稽をふくむ。満堂腹を抱

揚の實を擧ぐべきに非ずや。さらばこれより餘興に入らしめんと欲す。我等の微意匆卒の間に企てしもの、たい滋味胃腸の歡を買ひたるサツパーの後主婦の出せるデザートに値ひするものあらば我等の大に満足する所なり云々。眼は直ちにプログラムに注かれぬ。

時習寮大茶會順序、

明治四十二年二月十三日午後五時五十分

開會於無聲堂

一、開會之辭

二、校長及び諸先生演説

三、生徒有志演説

四、餘興

イ、音樂

ロ、山又山……………(中寮十五、十六號)

ハ、Das ist mein?……………(南寮三、四號)

ニ、マヂックランタン……………(中寮三、四號)

ホ、幸福なる盜賊……………(中寮一、二號)  
ヘ、音 樂……………(梁瀨君諸士)  
ト、鳥部野朧月……………(南寮七、八號)  
チ、ローマ議事堂の嵐……………  
リ、濱の真砂……………(有志)  
ヌ、Die Bingschaft……………

へざるものなし。時に注意点の戰慄を語り、時に賄牛肉のかたきを嘆す。これ一つの入れ種に過ぎず。本すぢなる太郎冠者、次郎冠者はよく空想的青年の模型、神主は現代社會の代表とも見るべし、マヂックランタンは種板室員の神腕になりしもの。奇抜々々。幸福なる盜賊。あまり冗長に失す。須く短刀直入大に人心を刮るが如きものなるべし。音樂は梁瀨君不參。オルガン今様の奏樂に代ふ。鳥部野の朧月は實に悽愴。満堂忽ち暗黒の幕につゝまる。驚き凝視すれば、白骨累々。月光漸く朧なるや。數多の髑髏携へて舞ふ。青海波? 否?。倏忽烟の如く消え再夕星の如く現はる。又悽又愴。次はローマ議事堂の嵐なり。沙翁作。數齣よりなる。ローマ迅雷の夜景よりシーザー暗殺、アントニー弔演説に至る。時迫れるを以て急行せしは遺憾。濱の真砂。盜賊のよりあひらしし。頗る言詞に

抑揚をつゞ。書生餘興は今少し氣概あるもの又は瀟洒たるものならざる可らず。併しその珍奇なるは太に拍手を買ひたり。時迫れるを以て以下の餘興は節略し、秦察委員立つてまづ閉會の辭をのぶ。氏は時の豫定以上に長が引きたるを遺憾とし、通學生諸君の誠意を謝し、その健康を祝したり。氏の相圖により、無聲堂未會有の大聲を揚げて校歌及び寮歌を合唱す。終に四高及び時習寮萬歳を唱へ拍手堂を動かすの間に散會しぬ。(かたじけなく)

寄贈雜誌

- |        |    |         |       |    |         |
|--------|----|---------|-------|----|---------|
| 六校友會雜誌 | 三一 | 北野中學校友會 | 親友會雜誌 | 一一 | 柏崎中學校同會 |
| 校友會雜誌  | 二八 | 麻布中學校同會 | 無水會雜誌 | 每號 | 同社      |
| 一文會報告  | 二八 | 東亞同文會   | 嶽友會雜誌 | 四一 | 第三高等校同會 |
| 一橋會雜誌  | 四九 | 東京高商校同會 | 望洋會雜誌 | 二八 | 第一高等校同會 |
| 坂東太郎   | 四九 | 前橋中學校友會 | 志友會雜誌 | 三七 | 宮崎中學校同會 |
| 校友會雜誌  | 四八 | 開成中學校同會 | 龍南會雜誌 | 二八 | 小松中學校友會 |
|        |    |         | 學友會雜誌 | 二六 | 千葉中學校同會 |
|        |    |         | 校友會雜誌 | 二六 | 京都三中校同會 |
|        |    |         | 龍南會雜誌 | 二六 | 第五高等校同會 |
|        |    |         | 校友會雜誌 | 二六 | 金澤商業校同會 |
|        |    |         | 保惠會雜誌 | 九八 | 金澤二中校同會 |
|        |    |         | 養心會雜誌 | 每號 | 松山中學校同會 |
|        |    |         | 同窓會雜誌 | 二五 | 同社      |
|        |    |         | 校友會雜誌 | 一九 | 錦城中學校同會 |
|        |    |         | 學友會雜誌 | 一九 | 第六高等校同會 |
|        |    |         | 學友會雜誌 | 一七 | 石川師範校同會 |
|        |    |         | 校友會雜誌 | 一七 | 京都一中校同會 |
|        |    |         | 學友會雜誌 | 一八 | 東京高師校同會 |
|        |    |         | 學友會雜誌 | 一三 | 札幌中學校同會 |
|        |    |         | 和同會雜誌 | 一四 | 第七高等校同會 |
|        |    |         | 同窓會雜誌 | 四四 | 長岡中學校同會 |
|        |    |         | 校友會雜誌 | 二二 | 高知中學校同會 |
|        |    |         | 校友會雜誌 | 三五 | 三重中學校同會 |
|        |    |         | 校友會雜誌 | 九  | 飯田中學校同會 |
|        |    |         | 校友會雜誌 | 九  | 斐太中學校同會 |

投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治四十二年三月二十三日印刷  
 明治四十二年三月二十七日發行

編輯兼發行者 吉村政行  
 印刷者 沼倍男  
 印刷所 明治印刷株式會社  
 發行所 第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地  
 同縣同市穴水町二番丁廿九番地  
 同縣同市高岡町九十番地



